阪神・淡路大震災の主な被害の概要

地震の発生状況

平成７年１月17日、５時46分、兵庫県南部に震度６、場所によっては震度７の強い地震が発生した。

この地域としては、昭和２７年に記録した震度４をはるかに上回る大きなものであった。

震源地　淡路島北部　北緯34度36分東経135度03分
震源地の深さ　14km
各地の震度　６　神戸・洲本　５　豊岡
４　姫路など
（神戸市、芦屋市、西宮市、北淡町、一宮町、津名町の一部では７）
マグニチュード　７．２

地震の特徴

人口350万人余が密集し、我が国の経済活動の中枢を担う淡路北部から神戸市及び阪神地域の直下で発生した内陸・都市直下型地震であった。

深さ14kmという比較的浅い部分で発生し、断層が横にずれることにより起こったもので、大きなエネルギーが一挙に解放されるタイプであった。このため、地震の継続時間が短い半面、振幅が最大18cmと観測史上最大になるという強い揺れを観測した。

被害の特徴

大都市を直撃した地震のため、電気、水道、ガスなどの被害が広範囲となるとともに、新幹線、高速道路、新交通システム、都市間交通、地下鉄が損壊し、生活必需基盤（ライフライン）に壊滅的な打撃を与えた。

古い木造住宅の密集した地域において、地震による大規模な倒壊、火災が発生し、特に、神戸市兵庫区、長田区などでは大火災が多発した。

戦後50年間、近畿には特に大きい地震が無く、各分野において緊急事態への備えが十分であったとは言えないが、未曾有の大地震により被害の規模が広がった。神戸・阪神地域という我が国有数の人口密集地に発生したため、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされている。

平成７年12月26日現在の死者総数		6308人
（内訳）	兵庫県	6279人
	大阪府	28人
	京都府	1人

資料提供　阪神淡路大震災兵庫県災害対策本部
死者の数は、県・消防庁の新聞発表による

震災記録委員

野呂　一幸

東濱　善通
岡田　俊一
坂上　義信
里見　文男
瀧　　泰久
前川　康成
南　　和貴
村松　順二
山内　裕文

寄贈

震災文庫 8 − 66

神戸大学附属図書館
平成
8年2.23
No. 9511452

発刊にあたって

兵庫県立兵庫工業高等学校
校長　福留　輝男

平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地震でマグニチュード7.2の激震が発生。わずか数10秒の大地震により未曾有の大被害を受け死亡者6,308人、負傷者32,000余名、30万人を超える方々が避難所生活を余儀なくされる大惨事となった。

阪神・淡路大震災から1年が経過した現在、我々は「平成7年1月17日」という日を生涯忘れてはならないと、学校としての災害時対策を主眼にして、この記録集をまとめた。

震災直後は、生徒や職員の安否確認と被災者への対応で生きるための水や食料、毛布等の防寒用具の確保が主であった。次に必要になったのは暖かいお湯で身体を洗う設備や簡易トイレ、電話等の設置、衛生設備、医療関係との連携であった。余震が続く非常事態の中で地域の自治会長さんをはじめ、本校全職員が24時間体制でよく頑張ってくれた。

多くの尊い命が失われた大震災であったが、死亡したという教職員・生徒が一人もいなかったのは、不幸中の幸いであった。非常事態であるがゆえに、授業再開に向けて、工事関係者と早急に連絡を取り、段取りよく渡り廊下等の破損部分を応急修理し、2月2日には学年ごとの登校が実施できた。教室・実習室などの整備を行ない、2月6日 10時より短縮40分の3時限授業が再開できた。鉄道などの交通事情が悪い状態ではあったが、生徒達は長時間かけて頑張って登校し出席率も良好であった。

家庭・地域・学校が互いに助け合い協力する中で復興祭も実施できた。8月13日には住宅問題もなんとか解消でき、それぞれ新しい道へと再スタートしていただき、避難所としての役目も無事終えることができた。考えてみると平成7年(1995)は、戦後50年の節目の年ではあったが震災にはじまり、オウム真理教問題、学校では子供のいじめによる事件が多発した動乱の年であった。戦後の日本が経済復興を目指し、高度経済成長・物質的な豊さのみを求めて、肝心な人々の生活をないがしろにしてきた側面は否定できない。震災により心の教育の大切さを痛感しているところである。

今までは当たり前と思ったものが崩壊してしまった年で、それは破滅でなく、そこからの出発であるという認識にたって、生徒達の心のケアーを心がけ、防災教育を実践していきたい。完全な復旧へは10年や15年かかるであろうが、生徒・教師・家庭・地域ともども復興に向けて、この記録集がその糧になればと思う。

00095114520

目　次

発刊にあたって

1　地震発生時の学校は

直後の状況と対応 …… 4
生徒が学校管理下にある時 …… 8

2　震災と学校

1）震災後の経過 …… 9

1／17から4／16まで
生徒・家族の被災状況
被災者の推移
施設設備の被害状況
生徒の安否・動向等の確認

2）学校再開に向けて …… 14

3）学校の動き …… 25

教育の現場と避難所は同時に成立しえたか
学校に水が戻るまで
震災と自治会
被災者名簿の打ち込み
修学旅行
義援金
授業料免除と各種奨学金
救援物資受け入れ
最初の登校日
文部省の研究指定発表会の中止

3　震災と私

普通の生活○学校は無事なのか○地震の朝○炊き出しとガールスカウト活動○震災とパソコン通信○皆と共に生活している安心感○１２時間の通勤○ボランティアに関する考察○大切なものに触れた大震災○５時４６分の一瞬のために　…　39

ボランティアを考える○震災の時おもったこと○ボランティアと私○人の優しさにふれて○震災でわかったこと○神戸市立西市民病院４階　…　51

生命の保護・提言・謝辞　……　56

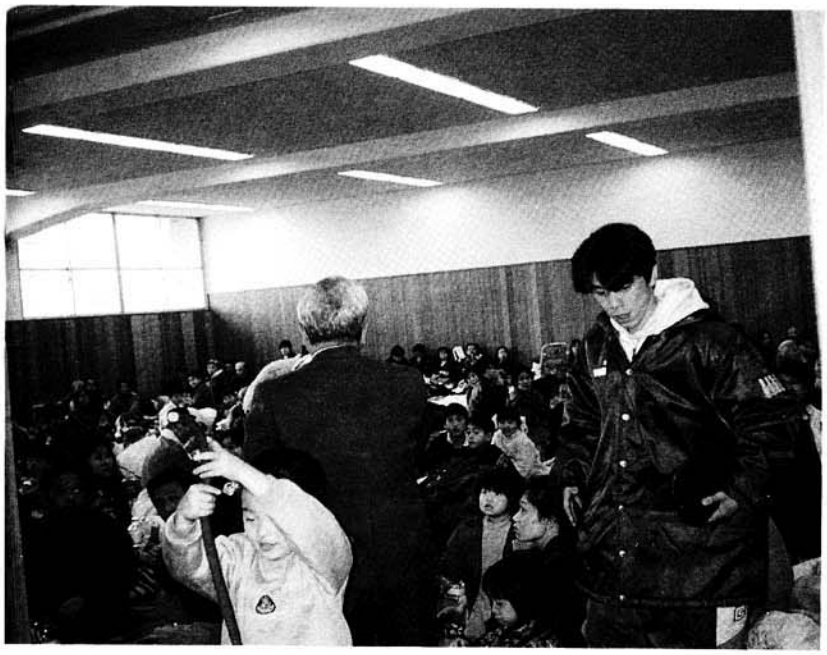
4　震災を考える

1）生徒への震災の影響調査　……　59

2）考察 震災と地盤　……　63

3）地盤の被害状況　……　66

あとがきにかえて



避難された人々に救援物資や避難所としての受け入れ体制について説明する本校校長

1　地震発生時の学校は

直後の状況と対応

１月１７日
５時４６分
　地震発生。（マグニチュード7.2・震度７）
突然悪夢に襲われた。その瞬間、私は文部省の研究指定校の発表を３日後にひかえ、最後の追い込みのためコンピュータと対峙していた。
　今思うと、前日１月16日午後６時30分頃微震があったが、多くの人がそうであったように、この予兆であったとは夢にも思わず、気にもとめていなかった。
　私はキャスター付きの椅子に座ってキーボードを打っていたが、突如「ゴーッ」という物凄い地鳴りと同時に、縦とも横ともわからぬ激しい震動に、今やただの重い物体と化したコンピュータもろとも、したたかに後ろの壁へたたきつけられ床へ投げ出された。大自然の猛威の中で人間の無力さを感じつつ、ただ這いつくばるしかなかった。揺れが収まるとすぐに職員室の懐中電灯を探し、玄関の公衆電話へと向かおうとしたが、廊下は防火扉が幾重にも行手を阻んでいた。　〈土木科　山内〉
６時３０分
　体育館１階玄関ホール・廊下に数名の被災者
６時５０分
　体育館に被災者が続々と避難
　職員２０数名が駆けつける
７時４０分
　ガス漏れ発見（Ｉ棟とＡ棟との間）
　電話の応対
　・外部からかかってくる電話に対応する
　・生徒には、臨時休業と答える
８時３０分
　学校施設の安全確保
　避難者の受け入れ
９時
　被災者より体育館１階の各部屋の鍵を開けて欲しいとの要望あり
１４時
　本校校長、学校到着（伊丹市より８時間）
体育館１階が被災者で一杯になる

液状化により黒い水の噴出した中庭

対　応
　・動けない状態であったので、揺れがおさまるまでなすすべがない。
　・ガスの元栓を絞める。
問題点
　・通路がすべて防火扉によって遮断されているであるので、すばやい避難は難しいとおもわれる。
　・電話が通じない。
対　応
　・近隣在住の職員が駆けつけ、体育館の鍵を開放し、被災者を中に誘導した。
対　応
　・交通途絶により、出勤できない職員多数
　・自宅損壊により、出勤できない職員多数
問題点
　・元栓でガスは遮断されていたので、圧力はかかっていなかった。そのため大量の漏れは免れたが、手のつけようが無かった。
　・職員、生徒の安否確認では、電話が役に立たず。
対　応
　・出勤している職員で、危険箇所の確認。
　・体育館への誘導をする。
対　応
　・出勤していた職員の合意で各部屋の鍵を開け、誘導する。

対　応
　・被災者に対し校長が２階フロアーに誘導すると共に救援物資や避難所としての受け入れ態勢

１８時

本校事務長、学校到着（寝屋川市より１２時間）体育館１階・２階ともに被災者で一杯になる

１９時

災害対策本部に電話する

・毛布、食料、衣類を要求

中部水道局に電話する

・水を要求

２０時

日米クックよりおにぎり 400 個（ボランティア）が届けられる

救援物資届く、水 200 ㍑と毛布２０枚（神戸市より）

体育館・駐車場に入りきれず、学校正門前の道路に駐車避難する被災者も現われる

２３時２０分

本校教頭、学校到着。（四日市市より１９時間）被災者への救援物資の配付

被災者よりトイレがひどい状態との情報あり

１月１８日

１１時

・校内の危険個所の確認と立入禁止の指示を行なう

・避難者 2000 名

体育館、剣道場、柔道場、トレーニング室

更衣室、食堂、駐車場の自動車内

・クラス担任は、生徒の安否確認に努める

出勤できた職員 … 学校から電話等で

自宅待機の職員 … 自宅より電話等で

・平成５・６年度文部省指定　高等学校教育課程「職業教育関係および進路指導関係」研究指定校の研究発表会（１月 20 日予定）を文部省・県教委員と協議の上中止と決定

について説明をする。

・車で避難された方には、駐車場を避難場所にしてもらった。

問題点

・すぐにでも配りたかったが、少量であったので、配付について苦慮した。

・神戸市に本校が避難所となっていることが伝わっていなかったために救援物資が届くのが遅れた。

・本校独自である程度用意しておくべきか。

対　応

・おにぎりについては、子供・お年寄りを優先すると被災者に十分に説明してから、混乱のないように配付した。

・毛布も、少量しかないことを説明した上で、お年寄り・病人のみに配付した。

問題点

・本校は結果的に避難所になったが、その機能も設備も用具も準備されていなかった。

対　応

・水洗トイレの水が断水により途絶したので、プールの水を使って掃除し、体育館以外のトイレを使用禁止とした。

・体育館のトイレについては、宿泊した職員総出でプールの水をバケツに入れ、流し用として男女各 10 杯ずつ用意した。

対　応

・ロープを張って、立入禁止を掲示するだけにとどまった。危険であったため触れない部分が多数存在

対　応

・電話はつながりにくい状況であったが、連絡を密にするよう努め、学校として全体の掌握に努めた。

・関係各位・各所に研究発表会の中止を連絡

１８時

・救援物資の受け入れ、配付
（毛布 100 枚・おにぎり・水）
・体育館内でのタバコ・犬猫の持ち込み
・外部からの電話応対
地域の方々からの安否確認の問い合わせが多数

・混乱を防ぐために子供・お年寄りを優先した。

・ハンドマイクにて、被災者へ呼び掛け理解をいただく。
・電話連絡用メモ用紙の標準化
・被災者への伝言の取り次ぎ、安否確認等を伝言カードにして、掲示することにした。

問題点

・被災者名簿ができていなかったので、大変であった。

対　応

・救援物資が大量であったことと、体育館前に下ろされたこともあってその場で配付した。

問題点

・大雑把な配付方法をとった為に混乱を招いた。

対　応

・事務室待機の職員で事務室前廊下に荷下ろしする。

問題点

・深夜に下ろす作業は不眠不休で対応している職員にはきびしい。

対　応

・建築科、土木科職員中心。
・クラス担任、科職員中心。

２０時

・毛布 200 枚が届く

１月１９日
４時

・食料・水が届く（11 トンと４トンダンプ）

１０時

・緊急事態における任務分担を行なった
点検表づくり（学校施設の破損状況）
生徒の安否確認
1153 人中 605 人の無事確認
自宅が崩壊・焼失した生徒数　25 件
保護者死亡　２件
不明生徒のマップづくり
被災地域回り
・職員の勤務実態調査

・自転車・バイクで職員が避難所を手分けして周る。
・未確認生徒・職員の自宅を職員で捜索・情報収集

・授業再開に向けて、出勤できる状況にある職員の把握
・生徒登校に向けて準備しておくこと
安全確保
教師の確保
実験実習室の設備・備品の点検
電気・水道の確保
登校できない生徒への対応

問題点

・学校組織として、生徒安否確認および授業再開に向けての実動が遅れた。
・管理職不在の時の指令系統を明確にしておく必要があった。

１３時

・外国人被災者の調査（領事館の方が来られた）

１４時

・入学生募集要項を県教委へ提出
・炊き出しの日程調整を行なう

・被災者の名簿作成

２１時

・炊き出し。肉だんご汁 300 食（ボランティア）

1月２０日

２時

・復旧本部より救援物資到着
（6000 食分のおにぎりとパン）

４時３０分

・復旧本部より缶入りのお茶 3000 本到着

１０時

・兵庫区役所から簡易トイレ２基が届く

・生徒安否確認

・プールよりトイレ用水を確保する
ポンプの手配
・簡易トイレの追加を要求

1月２１日

１０時

・校務運営委員会を中心にした緊急職員打合せ
１/22 の緊急職員会議開催について今後の生徒への対応（電話での連絡生徒への回答）
・職員への連絡
・施設、設備の被害状況調査（全職員）

・被災者ノートを回覧したが、回収に時間がかかった。

・学校の体育館は、電気ストーブを使用することを考慮していないため、しばしばブレーカーが落ちた。
原因となったもの
電気ポット、電気ストーブ、電気毛布

対　応

・被災者の中の若者を中心にリレー式に運ぶ。大量であったので、搬送に 40 分かかる。

・待機職員だけで運ぶ。

・体育館とＨ棟の間に据え付けて、女子用トイレとする。
・生徒への安否呼び掛けのビラを貼りに、各避難所を手分けしてまわる。

問題点

・檄文調だったので、後に抗議を受ける。
・ビラを色紙にすれば、目立ったかもしれない。

95.1.21(土) 9:50分現在
生徒未確認不明者 地域別

須磨区 15
長田区 41
兵庫区 25
中央区 6
灘区 6
東灘区 7
北区 4
垂水区 2
西区 2
明石市 2
三木市 1
加古川市 1

1/21 地区別生徒安否確認メモ

生徒が学校管理下にある時

予測されること

防火扉の一斉作動

情報不足による生徒のパニック

保護者からの問い合わせ

交通機関途絶
停電
断水

⇒　被災者の流入
⇒　生徒を抱えたまま避難所になる

対処するその指針

⇒　生徒の安全をいかに守るか
⇒　生徒を安全に早くいかに帰宅させるか

対処する方法

地震発生　座学の場合　⇒　動かないこと
実習の場合　⇒　動かないこと
（普段から処置を指示しておく）
避難訓練のプログラムを考慮しておく必要がある
（防火扉一斉作動により、すばやい避難は不可能）
避難経路の確認と誘導方法のマニュアル作成

教科担当による点呼確認
・生徒、職員の連絡網の作成及び時々情報を流し、周知徹底できるか確認しておく
・生徒と共におり、落ち着くように指示
・手すき教師がその連絡を担当
状況把握（学校内）
状況把握（学校周辺及びその他外部）
生徒居住地区別名簿作成
クラス担任による対応
保護者からの問い合わせには、迎えに来られたら下校させる（チェック漏れのないよう厳重に）

交通機関の復旧情報を早く入手することに努める
高架水槽と受水槽の水の節水に努め、長持ちさせる
プールからの取水方法の確保
緊急事態における任務分担
・指令系統の確立（司令塔の１本化）、関係機関との確保
連絡
・点検表作成（校内危険箇所等）
・各階、各棟の日々のまとめ係を決め、その部屋にハンドマイクの設置
・救援物資の受け入れと割り振り
・被災者への対応窓口の設定
（被災者名簿等の作成、処理）
・職員による医療団の結成（応急手当等）
・学校が避難所として機能するために必要な施設、設備の確保
・携帯ラジオ、電話の常設
・非常電源装置の設置
・毛布等（寝具）の備蓄

2　震災と学校

震災後の経過

1／17から4／16まで

平成7年1月17日午前5時46分、阪神淡路を中心とした地震は、大きな爪痕を残している。災害の復興も各地ですすめられ、交通機関もＪＲをはじめ神戸市バス・阪急・神戸電鉄は6月22日、6月26日には阪神も開通した。しかしながら市内の道路網はずたずたになったままで、今なお交通マヒを起こしている。本校も被災後、被災者の受け入れと生徒の安全確認に全力を傾け、担任をはじめ職員が組織的に、日夜生徒の消息の確認を急いだ。

1月17日

早朝より職員20数名が駆けつけ、電話の応対・避難者の受け入れ、学校施設の安全確保。

避難住民への救援物資の配付、情報提供。

1月18日

文部省主催研究指定校発表会（1月20日）中止の決定と関係各方面へそのむねを連絡する。校内の危険箇所の確認と危険箇所への立入禁止の指示を行なう。

体育館・剣道場・柔道場・トレーニング室・更衣室・食堂・駐車場の自動車内（避難者2000名）。

1月19日

緊急事態における任務分担点検表づくり、生徒の安否確認、職員の勤務実態調査、避難者への対応、未確認生徒のマップづくり、被災地域回り、報道機関との連携。生徒登校に向けて準備しておくこと－安全確保、教師の確保、実験実習の設備・備品の整備点検、電気・水道の確保、登校できない生徒への対応。1153中605人の無事確認。自宅の崩壊・焼失25件。保護者死亡5名。

1月20日

生徒安否確認、避難者への対応。

定期的に正門横に給水車がくる

「ドキュメント・１／１９の宿直」

19日

午後９時

某食料品会社がボランティアで肉だんご汁の提供を申し出る。ほかの避難所で炊き出しをして周り、この時間に本校についたのだという。プロパンガス、釜、発砲スチロールの丼と箸、などワゴン車につめこみ、すべて持ち込みで温かい「汁もの」の提供。宣伝臭も一切ない。最後に余ったものを本部詰めとしていただく。

教師はローテーションを組んで仮眠体制で詰める。管理職は、ずっと泊まり。すでに前日からの人は10人ほど。徹夜状態で皆がかなり疲労している。

午後11時

弁当はないかと事務室に女性５人が見える。他の避難所にいて、そこで配付された焼きそばが腐っていて食事をとってないというので新しいおにぎりを渡す。

20日

午前０時

見回りの職員が毛布を探しに事務室に戻ってくる。聞くと泊まるところがなく、他の場所から来た本校の生徒が体育館の玄関脇で膝を抱えて夜明けを待っているのだという。毛布を渡す。

午前１時

赤ちゃんを背負った母親が、風邪薬はないかといって来る。「改源」二日分と水と簡易体温計を渡す。毛布が１枚しかないとのことなので２枚追加。「ありがとうございます。ありがとうございます」とつぶやくように言われる。

時々、避難所にいる友人の呼び出しとか安否の問い合わせが入るが、場所もわからず深夜なので対応できない。

午前２時

ダンプ車でかつてない量の食料6000食分が復旧本部から送られる。稲美町と小野市からのおにぎりとパン。校舎内に運ばないと凍結してしまう。被災者の中の若者を中心に玄関部分にリレー式に運び込む。巨大な物資の搬送に40分かかる。

その後、事務室で避難所のリーダーの森永さん達と暖をとりながら話す。森永さんは神戸で空襲を体験、もう一人のサブリーダーの梅野さんは長崎で原爆にあったとか。

「こんな災害に、人生で２度とあうとは」とお二人とも話される。

午前４時30分

今度は缶のお茶。量は3000本なので、待機職員だけで運搬。

午前５時半

被災者のボランティアを本校職員が起こしに行く。トイレ脇のドラム缶にプールの水を運んでおかないと、朝のトイレ使用ができなくなる。一度詰まらせて凍結するとあふれてくる。起きる方も起こす方もつらい。

午前７時半

３時間ほど前まで話していたリーダーの森永さんがやって来て「テレビを見ていたら、残っていた私の事務所もさっき焼けました。」と言われる。しかし、その直後、気持ちを切り替えて朝食配付の指示をテキパキされる。

１月21日

緊急職員会議開催について。今後の生徒への対応。（電話での連絡生徒への回答）

職員への連絡…施設・設備の被害状況調査（全職員）

１月22日

緊急職員会議（正午）。避難者数1500名。

職員の勤務態様の調査…宿日直の体制づくり（この頃救援物資が夜半に到着する）

１月25日まで臨時休業とする。１月26日午前11時生徒登校（安否確認のため）と決定する。報道機関（ＮＨＫ・サンＴＶ・ＡＭ神戸）を通じて本校の情報を流す。

生徒の未確認数20名

１月23日

生徒の未確認数　９名

１月24日

生徒全員の安否を確認

１月25日

全学年担任会議（１月26日の生徒登校について）。担任マニュアルづくり。生徒アンケートづくり。生徒集合場所の確認。

１月26日

生徒11時登校。885/1153人。出席率76.8%

晴天であったのでテニスコート前に集合。家屋の全半壊及び焼失102件。保護者の死亡５名。１月31日まで臨時休業とし、その後は報道機関を通じて連絡する。教師の誘導で安全な建物内に入りアンケート調査を行なう。

「元気な生徒は、身近なところでボランティア活動をして下さい。」

１月27日

３年生は、卒業試験の日程となっているが、１月以降の授業は、進んでいないので今回の試験は中止とする。特に３年生は、授業の遅れを取り戻すため、就職内定者については、

入社後のための勉強をすること。

1月28日

生徒の登校について。交通機関の途絶・途中の倒壊家屋等により道路が危険であるので、生徒の登校は今しばらく様子を見ることにする。

本校の生徒の約半数に近い生徒が利用しているＪＲ須磨・神戸間が復旧の見込みがついたことで、２月２日（木）から各学年登校とすることを決定。

1月30日

給水等の確保。Ａ棟高架タンク、揚水ポンプ、体育館給水系統点検（本校・神戸工業職員）を行なう。

1月31日

Ａ棟給水可能となる。夜間Ｄ棟高架タンクへ揚水。校内測定結果報告－（土木科）地盤沈下は数多くみられたが、建物自体には特に異常は認められない。

Ｉ棟床の変化量は平均で87㎜、グランド側に比べＡ棟側に沈下している。

2月1日

Ｄ、Ｃ、Ｂ、Ｅ棟給水系統点検。

2月2日

３年生登校。出席332名。義務免11名。欠席40名。出席率86.5%。

（ＨＲ、補講に関する諸連絡、欠席生徒への連絡）

各棟への給水開始。給水の変位を調べる。

2月3日

２年生登校。出席342名。義務免18名。欠席31名。出席率92.7%。（ＨＲ、教室準備、欠席生徒への連絡）

2月4日

１年生登校。出席352名。義務免26名。欠席16名。出席率89.6%。

（ＨＲ、教室準備、欠席生徒への連絡）

2月5日

市水道管工事（中部水道局）、各棟への給水安定する。

2月6日

１，２学年の授業再開。10時登校。40分短縮３時限授業。３学期はこのままで実施。

2月25日

卒業式。被災者の階下への移動の協力により本校体育館にて挙行。

3月16日

入学選抜試験。

4月10日

震災から84日目、始業式を迎える。

4月16日

「がんばろうや運南復興祭」この日は小雨。被災者、運南地区自治会、学校、育友会、生徒会が参加。

生徒・家族の被災状況

生徒については、多少の怪我はあったが全員無事であった。

（１）保護者を亡くした生徒

両親…１名。父親…１名。母親…２名。

（２）全壊、半壊、全焼、半焼の生徒数

全壊…133名。半壊…217名。全焼…16名。

被災者の推移

体育館、柔道場、剣道場、トレーニング室、更衣室、食堂、廊下、駐車場に以下の人数が避難。

1/17	2000 人	14	300 人	9	100 人	7/4	43 人
24	1500 人	21	220 人	16	90 人	11	43 人
31	1500 人	28	200 人	23	70 人	18	43 人
2/7	1300 人	4/4	160 人	30	70 人	25	35 人
14	870 人	11	160 人	6/6	65 人	8/1	4 人
21	700 人	18	160 人	13	55 人	9	4 人
28	600 人	25	160 人	20	50 人	13	0 人
3/7	400 人	5/2	110 人	27	47 人		解消

施設設備の被害状況

o 土地…グランド、駐車場、中庭に亀裂。

o 建物…H棟の屋根鉄骨損傷。

Ｉ棟外５棟…渡り廊下床損傷、エキスパンジョイント損傷。

工業別館…床亀裂・陥没。

o 工作物…投光器傾斜。バックネット傾斜。コンクリート塀傾斜。

o 特別予算にて実験実習器具

建築科…トランシット、レベル

機械科…プレス、溶接機、硬さ試験器

旋盤、フライス盤、原動機実習装置

電気科…電圧計、シーケンス制御装置

工業化学科…直示天秤、気圧計、薬品戸棚、

可視分光光度計

土木科…三軸圧縮実験装置、精密天秤、ドラフター

トランシット、トータルステーション、

電子天秤

デザイン科…引伸機、石膏像

電子科…プログラマブルコントローラ、旋盤

情報技術科…２現象シンクロスコープ、

ロジックアナライザー

理科…生物顕微鏡

生徒の安否・動向等の確認

震災直後、数人の職員が学校に駆けつける。そのときすでに、電気は通常の状態に戻っていたが、ガス・水道は止まったままであった。また、電話は通じていたものの、非常にかかり難い状態であった。生徒からの連絡も時折通じる程度で、近隣の生徒は学校の様子を気にして、徒歩で登校してきた者もいた。職員は、一番に生徒の安否が気掛かりであったが、被災の実態すら掴めない状況で、数人の職員では、即座の対応を講ずることができなかった。ただ、生徒からの連絡のみに頼るしかなかった。

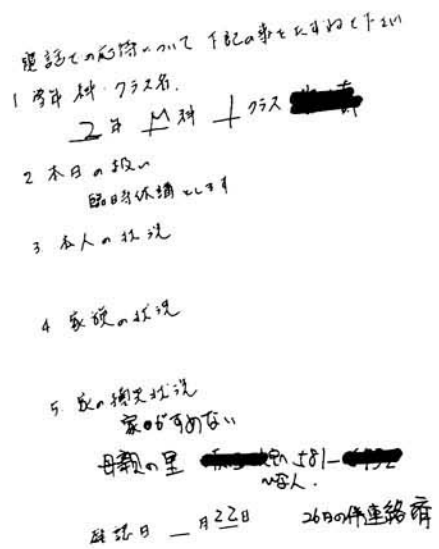
翌朝（１／18）になると、出勤してくる職員も序々に増え、また、職員間の連絡が取れるようになり、担任・科を中心に生徒の安否の確認を急いだ。しかし、家屋を失ったもの、一時避難所にいるもの、電話不通等々、連絡、情報、状況の把握・確認には手間取った。

翌々日（１／19）には、電話連絡の回数が多くなる一方で、家庭訪問するなど、また、交通事情から通勤不可の担任は自宅からの連絡に努めた。そのほか、マスコミ（テレビ・ラジオ）を通じて呼び掛けもしたが、思い通りには確認作業が捗らなかった。周辺が混乱しており、生徒の動向を記録に留めるのがやっとで、集計するに至らなかった。

震災から４日目（１／20）になって、被災の実態が次第に明らかになるにつれ、職員は、家庭訪問、避難所を周るなど

して行動範囲を広め、生徒全員の安否の確認を最優先に取り組んだ。また、生徒からの連絡を受けた際には、次の事項について統一した項目で聞き取ることにした。

科・学年・組・氏名／本人の状況／家族の状況／
家屋の状況／学校の様子・予定等の連絡



震災から８日目（１／24）になって、避難所はもとより、県外の親戚に世話になっているもの、友人宅に身を寄せているもの、ガレージ・テントで生活しているもの等々で、安否の確認に大変手間取った。その結果８日目にして、職員の必死の捜索のかいあって、生徒全員無事であることが判明した。しかし、両親または片親を亡くした生徒が４名いたという訃報には胸が痛んだ。

次表は、震災から４日後の１月 20 日から 24 日までの、５日間の様子をまとめたものである。それ以後の集計では、避難者の数に変化があるが、そのほかの項目では、変化が少なかった。また、未確認生徒のみを別表にし、地域別に分類した。長田・兵庫区が多いことからも、それらの地域の震災の影響の大きさが感じられる。

生徒総数　1153 人（１年 399 人、２年 370 人、３年 384 人）

震災後の生徒の動向一覧表　　数字は日毎の人数の推移

月日	学年	家屋焼失	家屋全壊	家屋半壊	死亡	重傷	軽症	避難	未確認
1/20	1	3	8	4	0	0	0	20	88
	2	5	8	6	0	0	3	28	37
	3	5	6	12	0	0	1	24	54
	計	13	22	22	0	0	4	72	179
1/21	1	8	11	9	0	0	0	33	26
	2	5	12	8	0	0	3	32	7
	3	6	7	11	0	0	1	28	15
	計	19	30	28	0	0	4	93	48
1/22	1	9	14	10	0	0	2	44	11
	2	7	16	11	0	0	3	44	1
	3	7	8	16	0	0	1	33	8
	計	23	38	37	0	0	6	121	20
1/23	1	9	16	10	0	0	2	50	2
	2	7	16	11	0	0	3	43	0
	3	7	8	16	0	0	1	36	7
	計	23	40	37	0	0	6	129	9
1/24	1	9	16	11	0	0	2	51	0
	2	7	16	11	0	0	3	43	0
	3	7	8	16	0	0	1	37	0
	計	23	40	38	0	0	6	131	0

未確認生徒の地区別一覧表　　数字は人数の推移

月日	学年	東灘	灘	中央	兵庫	長田	須磨	垂水	西	北	明石	三木	加古郡	加古川	計
1/20	1	3	1	2	20	29	10	7		10	6				88
	2	5	2	2	4	13	7		2	1	1				37
	3	1	4	2	9	16	5	9	1	1	2	1	1	2	54
	計	9	7	6	33	58	22	16	3	12	9	1	1	2	179
1/21	1	1	1		10	10	2	1		1					26
	2				1	4	1			1					7
	3	1	2	2	3	5	1			1					15
	計	2	3	2	14	19	4	1		3					48
1/22	1		1		3	5	1	1							11
	2					1									1
	3		1	1	1	3	1			1					8
	計		2	1	4	9	2	1		1					20
1/23	1					2									2
	2														0
	3		1	1		3	1			1					7
	計		1	1		5	1			1					9

学校再開に向けて

1　教務部として動くまで

1月17日(火)

朝、ＪＲ大久保駅まで行くも真っ暗で列車は不通である。交通途絶では出勤ができない。やっとつながった電話で学校が無事であることを知り安堵した。が、なす術もなくその日が暮れる。

1月18日(水)

安尾先生の車に同乗させていただき出勤を試みたが、交通遮断の舞子までで断念。夕方、校長から当分臨時休業となるので、非常勤講師に連絡するようにとの電話指示があった。自宅の電話ではかかりにくいので、公衆電話ボックスから連絡した。長時間かかったが、講師の先生の無事が確認できてほっとした。どうしても連絡のとれない先生については、該当科長に連絡を依頼した。

1月19日(木)

市営地下鉄が西神～板宿開通との情報を得て、食料・水・懐中電灯・ラジオをザックに詰め込み出勤。県工到着昼過ぎ。学校では、校舎の被害状況の確認、避難所の世話、生徒の安否確認の作業中であった。全体像が把握できないまま、作業に追われた。また、岡田(数学)先生を中心に今後の問題点を羅列していった。冷たくなった持参のおにぎりを食べ、その日は救援物資の運搬のため徹夜で事務室に待機した。

1月20日(金)

未明に救援物資が入ってきたので運搬作業。出勤される先生方の数が多くなったので、自発的に作業を分担していくようになった。避難所の世話、救援物資の運搬、生徒の安否確認などである。電話の応対については、かかり難い折でもあるので、対応事項を標準化した。まだ、連絡のとれない生徒が多数いたので、常盤、石松先生と安否呼び掛けのビラ貼りに行くことにした。（このビラは檄文調だったので後から抗議を受けることになったが）まず、長田区役所で避難所の所在を確かめた。学校はもちろんのこと、ほとんどの公的機関が避難所になっており予想以上に多いのにびっくり。被害の多いところを中心に可能な限り回った。極寒にもかかわらず、廊下のみならず、玄関先まで被災者があふれていた。ビラは色紙を使って目立つようにすればよかった。それでも隙間のない掲示板に見えるように貼った。交通規制と渋滞の中、須磨区の東から兵庫区の南を回るだけで一日が終わった。事務室に拡大地図を貼り連絡のとれない生徒の住所をマーカーで示していった。また、生徒連絡による被災状況が岡田(工業化学科)、東濱先生により集計された。被災の大きさと未確認生徒がかなりいることが確認された。その日は、講師控室で仮眠。

1月21日(土)

出勤者の自発的な作業が続く中、被災者の対応だけでなく、学校再開に向けての組織的な今後策が必要ではないかとの機運が生まれ、校務運営委員を中心に意見がまとめられた。要約すると次のようになる。

- o 職員の把握および連絡‥所属の教科・学科（集約：北垣）
- o 臨時職員集会‥‥‥‥‥‥1月22日(日)正午
- o 生徒の把握‥‥‥‥‥‥‥‥学年・担任（集約：総務）
- o 生徒への連絡方法
  - ・ビラ貼り‥‥‥‥‥‥‥バイク隊（隊長：大川）
  - ・報道利用‥‥‥‥‥‥‥マスコミ対応は管理職
- o 校舎の安全点検‥‥‥‥‥各科（集約：事務長、教頭）
- o 開校時期の検討‥‥‥‥‥教務、休校の県教委届けは管理職
- o 被災者の応対‥管理職、坂上、大島、東濱、手すきの教員

教務として、学校再開に向けて作業を始めた。ビラ貼りは、バイク隊に任せた。この日で長田、兵庫区をはじめ連絡のつかない生徒の被災地域全域は、ほぼカバーできたとのことであった。

1月22日(日)

12:00より図書室にて臨時職員集会。主な内容は次の通り。

o 避難所の状況説明および学校の救援方法について

o 生徒の把握状況の説明

o 教育機関としての学校の対応策の検討

o 調査依頼事項

o 臨時休業を1/25(水)まで決定

o 安否確認のための登校日を1/26(木)11:00からに決定

日曜日にもかかわらず、学校再開にむけて各分掌が機能し始めた日といえよう。生徒へは、NHK－TVを通じて次の連絡記事を流した。（マスコミ関係は管理職が対応）

> 県立兵庫工業高校の生徒へ
> 1月25日（水）まで臨時休業します。
> 1月26日（木）午前11時に安否確認のため登校して下さい。
> ０７８－６７１－１４３１

1月23日(月)

各分掌では、1/26(木)の登校日のため生徒向け資料を準備した。

o 生徒への震災関連の連絡事項

o 転居、転校を考えている生徒への連絡

o 被災状況アンケート

異常事態の場合、文書連絡が最も確実である。火の気のない実習室でパソコンに向かい、可能な限り文書を作成した。また、発行日と発行者(係)を明記することも大切である。

1月24日(火)

全生徒の安否確認を完了する。

1月25日(水)

ＪＲ西明石～須磨間復旧の日だ。13:00より臨時校務運営委員会。明日の登校日に備えての作業の確認をした。

o 立ち入り禁止区域の明示

o 集合場所（テニスコート南）への生徒の誘導について

o ＨＲ場所（多目的ホール＝機械科、Ｄ棟＝電気科・情報技術科、Ａ棟＝その他）

o 生徒昇降口（Ｉ棟の渡り廊下が使用できず、Ａ棟の昇降口が救援物資の置き場になっていたため）の指定

o 使用トイレは仮設トイレのみ（断水のため）

1月26日(木)

安否確認のための登校日。テニスコートに集合の後、各クラス毎に担任（出勤が困難な場合は学科）によるＨＲを実施。

o 震災関連アンケート

o 家庭状況の聞き取り

o 教科書、教材・教具、制服の紛失確認

o 転居、転学を考えている生徒の把握

o 被災生徒の授業料減免の説明

アンケートは、その日のうちに学年の手で集計された。登校状況はクラスによっては60.0～94.9%のばらつきがあるが、全体として76.8%であった。3時間も4時間もかかって登校した生徒。「壊れた家から学生服を捜し出した」と笑顔で話す生徒。誰もが輝いて見えた。

2　学校再開に向けて

1/26の生徒登校日以来、一応1/30までは臨時休業としたが、Xデーつまり学校の再開日を何日にするかという命題が教務部に課せられた。時々刻々と変化する状況、再開の後、再び休業日としない等々の方針。復旧状況によって授業を段階的に再開していく概略案を「授業再開のめやす」「再開の方針」案としてまとめた。この案に当てはめると、1/17で第1段階。1/20までが第2段階、現在は第3段階となるわけだ。1/30 ＪＲ須磨～神戸復旧。特に問題なのは水道であった。これも、1/30の岩田先生による通水試験を経て、2/1ほぼ正常化の見通しが立ったので、前案に、2/2授業再開の具体案を附して教務部提案とすることにした。

校運・職員集会資料
平成７年１月31日
教　務　部
授業の再開について

１．授業再開のめやす

(1) 第１段階‥‥学校再開のめどがたつこと

o 校舎の一部が使用できる

o 一部の職員が勤務できる

(2) 第２段階‥‥生徒の安否確認の方法がとられること

o 校舎内に生活できる安全な場所がある

o 光熱・水などが確保されている

o 通信方法手段が確保されている

o 大部分の職員が勤務できる

(3) 第３段階‥‥注意すれば校舎内での生活が確保されること（安否確認の登校）

職員が組織として機能できる／校舎の大部分が使用できる／不便であるが登校手段がある

(4) 第４段階‥‥校舎内での安全な生活が確保されること　　（授業再開の確認）

水道が復旧している／危険箇所が仮復旧している（Ｉ棟へのジョイントは１，２階のみ可）／授業再開の計画ができている

(5) 第５段階‥‥かなりの交通手段が確保されていること　　（授業再開作業）

多数の職員が出勤できる／大部分の生徒が登校できる（ＪＲが復旧または代替）

(6) 第６段階‥‥最低限の授業条件が確保されていること　（試行的に授業再開）

授業再開の準備（教材・教室）ができている

(7) 第７段階‥‥ほとんどの交通手段が確保されていること　　（特別授業実施）

ほとんどの職員が出勤できる／ほとんどの生徒が登校できる（山陽、神鉄、阪神、阪急地下鉄が復旧または代替）

(8) 第８段階‥‥交通がほぼ正常化していること　　（ほぼ正常授業）

職員がほぼ正常に出勤できる／生徒がほぼ正常に登校できる／ガスが復旧している／使用不可の校舎・校庭の代替措置が講じられている

(9) 第９段階‥‥ほとんどの校舎が使用できること　　（正常授業）

避難所の移転／食堂が再開されている／すべての校舎、校庭の仮復旧

(10) 第10段階‥‥正常化

校舎、校庭が完全に復旧

２．授業再開の基本方針

(1) 授業再開の後は、原則として臨時休業としない

(2) ３学年の授業は、他の学年に先駆けて終了し、のち、成績不良者を中心に補講（課題提出、登校指導）を行なう

(3) １、２学年は、段階的に正常化する

(4) 正常化までは特別時間割りを組む

３．授業再開の日程

(1) ２月２日(木)

・３学年のみ一斉登校（10時）‥靴箱整理(スリッパ捜し)、のちＨＲなど

ＨＲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・必要な生徒に補講計画の連絡、他

補講に関する諸連絡・・・・・・・・・・・・・・必要ならば各教科、学科で

欠席生徒への連絡・・・・・・・・・・・・・・・・安否確認および、補講計画の連絡

(2) ２月３日(金)

・２学年のみ一斉登校（10時）・・靴箱整理、のちＨＲ・教室整備等

ＨＲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・教科書・教材の調査、他

教室整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・保健部、各学科の計画による

欠席生徒への連絡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・安否確認および諸連絡

・３学年の補講（午後：各教科・学科で対応）

(3) ２月４日(土)

・１学年のみ一斉登校（10時）・・靴箱整理、のちＨＲ・教室整備等

ＨＲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・教科書・教材の調査、他

教室整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・保健部、各学科の計画による

欠席生徒への連絡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・安否確認および諸連絡

(4) ２月６日(月)～２月10日(金)

・１、２学年の授業（10時登校、40分短縮授業で３時限行なう）

原則として、授業は各曜日の４～６校時を実施する。

時間割りを変更する場合は、工業科の教務係が集約し教務部に事前報告する。

・３学年の補講（午後：各教科・学科で対応：ただし２／10(金)まで）

４．３学年に関する教務事項

(1) 出席締切・・・・・・・・・・・・・・・・・・２月２日(木)　３学年登校日

(2) 伝票提出・・・・・・・・・・・・・・・・・・２月13日(月)　正午

(3) 卒業判定等資料の提出締切・・２月15日(水)　正午

(4) 卒業判定会議・・・・・・・・・・・・・・２月17日(金)　14:40

５．事前準備

・３学年の補講計画・・・・各教科・学科で作成し３学年担任まで提出（2/1までに）

・教科書･教材の調査・・・各学科で資料作成し、１，２学年担任へ依頼(登校日前日〃)

・各クラスの時間割り・・教務が集約・作成し、担任および教務部へ連絡　（〃）

・教室等整備計画・・・・・・保健部、各学科で作成し、１，２学年担任まで報告(〃)

・講師等への連絡・・・・・・各教科・学科より授業および諸連絡（なるべく早く）

校務運営委、職員会議の結果、原案どおりの授業再開となった。最小限の安全性確保から、A棟I棟3、4階のジョイント部分を使用禁止とし、I棟の3、4階を使うHR教室を2/6(月)からA棟の3年教室へ移動することにした。また、開始の授業を4～6校時にしたのは、この校時の授業が工業科の実習が多い。散乱した実習室の後片付けなどに利用できるとともに、座学における教材準備時間を確保する意味もあった。生活面では、食料配給を受けている被災生徒の多い中、学校食堂もなく、暖房のない学校での授業は3時間が限度であった。その後は、段階に応じて校時を変更していったが、断水のための家庭での水汲み作業、交通マヒによる通学手段、そして昼食の準備が学校では対応することのできない問題点として残された。3学期中は、学校の食堂が再開できないので止むを得ず午前中の授業となった。完全に正常化できたのは、夏休み明けの2学期からである。

このような異常時においての時間割変更は、どこの学校でも教務部の時間割の係に集中し、困難をきわめるものである。本校の時間割は、実験実習などがからみ、連続授業やクラス分割編成など複雑であり、変更となると難解至極である。このため、1台のコンピュータが処理するのではなく、複数のパソコンにより並行処理するというように、日頃から変更該当教科の教務係が各々に処理する方式をとっている。このような時であっても、業務が一か所に集中せず、非常にスムーズな時間割変更が行なえたことは本校の誇るべきシステムである。

震災以降における授業正常化の流れを以下に示す。

1／17　5:46　地震　臨時休業
／18～25　臨時休業（生徒の安否確認）
1/18 ＪＲ姫路～西明石復旧
1/19 市営地下鉄　西神中央～板宿復旧
1/25 ＪＲ西明石～須磨復旧
／26　11:00　安否確認のための登校（テニスコート前）
諸注意のちにＨＲ
／27～2／1　臨時休業
1/30 ＪＲ須磨～神戸復旧
2／2　10:00　3学年登校日　靴箱整理のちにＨＲ
／3　10:00　2学年登校日　靴箱整理のちにＨＲ
／4　10:00　1学年登校日　靴箱整理のちにＨＲ
／6　以降　10:00　予鈴
40分3hr授業（4～6、1～3hr隔週交替で）
2/15 ＪＲ兵庫～和田岬復旧
2/16 市営地下鉄板宿～新神戸復旧

／20以降
9:00　予鈴
50分3hr授業（4～6、1～3hr隔週交替で）
／24　卒業式予行
（3年9:30～12:30, 2年1 hr後参加, 1年午前中授業）
／25　卒業式
（9:10　受付　10:00開式　11:25閉式）
／27　午前中授業
2／28～3／4　学年末考査
／23　終業式（9:40～）
4／10　着任式（9:40～）始業式、大掃除ＨＲ
入学式（13:00～）
／11　離任式（9:40～）対面式
学力診断、課題テスト（11:20～15:15）
／12以降　9:00予鈴　45分6hr授業

7／6～12　期末考査
8／30　始業式
／31　始業時刻の変更（夏季短縮40分授業）
9／11以降　8:35　予鈴　50分6hr授業　（正常授業）

3　登校できない被災生徒の対応

震災直後から気になったのは、被災生徒のことである。勉強どころではないだろうが、どのような状況であっても勉学させる方策を継続することが教務部としての責務である。最初の登校日に、さしあたって次の文書を準備した。

平成７年１月26日
転居・転校等を考えている生徒諸君へ
県立兵庫工業高等学校
教務部、各学年担任団

今度の大震災により被災されました方々に心からお見舞い申し上げます。

被災によりやむをえず転居・転校等を考えている生徒諸君から、問い合わせがありましたので、資料を準備しました。参考にしてください。

１．転居の場合。

・転居先、連絡先等を担任まで届け出てください。

・最終的には、個人調査書を提出していただきますが、さしあたっては、まず、電話連絡でも結構です。

２．転校を考えている場合。

義務教育とちがい、高校の転校については種々の制限があります。

(1) 転出する学校について

・転校理由‥‥今回は緊急時なので考慮されるでしょう。

・欠　　員‥‥義務教育とちがい、高校には定員があります。

・転校時期‥‥各高校では転入の時期を指定している場合があります。

・校　　種‥‥学校毎に教育課程が異なります。したがって、卒業にむけての教育課程が継続できるか判断されます。（全日制、学科）

・転入試験‥‥一般的には、授業についていけるか試験が行なわれます。（学科、面接）
県によっては、今回を特例としているところもあります。個々について具体的に問い合わせをする必要があります。

(2) 転校の時期、期間について

ア．すぐ転出を考えている場合
どうにかして、転出先の高校を見つけなければなりません。

イ．今学期中は本校に通学し、４月から転校を考えている場合。
ア．に同じ

ウ．短期間のみ転出し、再度、県工に戻ってきたいと考えている場合。
ア．に同じ。ごく短期間なら本校に在籍したままで対応することを検討して

います。（休学すると進級できません）

3．手続き等

(1) 転出先（住所）、転出時期、転校したい学校など、なるべく詳しい情報について、担任へ連絡、相談してください。

(2) 学校では、転出希望先の高校に転校可能か等の問い合わせをします。

(3) 転校可能であれば、具体的に話をすすめます。

(4) 受け入れが不可の場合、次の学校を探さざるを得ません。

(5) 転校したのち、将来、県工に戻って来る場合も、同じ手続きとなります。

一番苦慮したのは、転居したが物理的に本校に通学できない生徒の対応であった。また、転学を希望しても次の２点で受け入れ校が不調または保留となることが考えられた。

o ３学期という時期から、新年度まで受け入れが待たされる

o 近い将来、本校へ復帰するなど、一時的転学が不可である

対応策として、２つの特別措置を考えた。

・特別義務免

交通途絶等による短期間の欠席については、義務免としたが、転居などで長期の通学不可生徒に対して、自宅学習を念頭においた措置である。生徒に対して、通学できないことによる疎外感をなくすとともに、勉学意志の喚起をねらった。

・他校での期間聴講

転学へ移行できる緊急避難的措置である。転学不可である場合、学校間連携の変則型として、生徒の学籍を本校に置きながら、他校に授業の実施を依頼するものである。したがって、学習成果、出席状況の資料を受け、履修、修得の認定は本校が行なう。授業料の心配があったが、被災により免除の措置がとられたので特に問題はなかった。その他、学校健康センターなどの問題があるが、緊急措置であるので、その時は相手校とで対応することにした。

次に、被災生徒に対する本校での措置について、その種類と詳細を示す。

教務部会資料
平成７年２月１日
合同担任会資料
２月６日
職員会議資料
２月８日
教務部

阪神大震災における被災生徒の措置について（案）

1．該当する生徒

被災により転居等で通学不可となった者、または、それと同等と見なされる者

勉学を継続する意志の確実な者

2．措置の種類

(1)休学で対応　(2)転学で対応　(3)特別義務免で対応　(4)他校への期間聴講で対応

(5)欠席で対応

3．休学で対応する場合

(1) 手続き等　　休学を願い出る（休学願）

理由として、被災 を認める

(2) 期間

３ヶ月間以上‥‥休学の場合は進級不可となる

4．転学で対応する場合

(1) 条件

転居先が決定していること／保護者または後見人が同居していること／本校への通学が不可であること／転学する学校があること／原則として４月以降も転学先に通学する計画であること

(2) 手続き等

保護者と生徒が連署で転学を願い出る（転学願）／学校は転学先へ照会する。／（在学証

明書、単位取得証明書・成績証明書、その他必要書類添付）／受け入れの回答があれば、転学先の指示に従い、願い、転入試験などの手続きをする。／転入学許可となれば、諸手続きの後、転学となる(転学先に籍が移る)／転入学不許可の場合は、次の転学先を探す。

(3) 転学に際しての通常の必要事項

転校理由が妥当であること／欠員、転入時期などの受け入れ条件があること／課程、学科など教育課程上の条件を満たしていること／授業についていけるかの転入試験が行なわれる（学科、面接）／個々について具体的に問い合わせをする必要がある。

5．特別義務免で対応する場合

(1) 特別義務免について

特別義務免とは、自宅学習を前提に、出席義務を免除するものである。／特別義務免は単位の履修に関与し、修得については、その期間の学習の成果等およびそれまでの学習活動をあわせて、学校が判断する。

(2) 条件

本校への通学が不可であること／次の年度に亘らない期間以内であること／学校の学習計画にしたがった自宅学習が可能であること／学校の指示による登校指導が可能であること／学習の成果を提出すること、また、原則として、定期考査を受けること

(3) 手続き等

保護者と生徒が連署で特別義務免許可を願い出る。／許可願および担任・学年主任・科長等の副申によって校長が許可を判断する。／許可されたならば、教務部は、各教科・学科へ教育計画を依頼する。／期間が終了したならば、保護者および生徒は、その期間の成果を添えて、学校に届ける。

6．他校への期間聴講で対応する場合

(1) 期間聴講について

期間聴講とは、特定の科目について他校において履修するもので、単位の履修、修得の判断対象となる期間に至らない学習活動をさす。／出席状況、学習の成果を受けて、本校での学習活動とあわせて履修、修得を判断する。

(2) 条件

本校への通学が不可であること／聴講が許可される学校があること／本校からの依頼で行なわれること／期間は、本校の依頼する期間とする／聴講先の学習のほかに、本校で計画した学習を行なうこと

(3) 手続き等

保護者と生徒が連署で期間聴講を願い出る。／学校は聴講先の学校へ照会する。／受け入れの回答があれば、聴講先の指示に従い、願い、聴講試験などの手続きをする。／聴講許可となれば、諸手続きをする（学籍は本校）。／聴講が終了したならば、保護者および生徒は、聴講先が発行する出席状況、学習成果、および本校が計画した学習の成果等を添えて、学校に届ける。／単位の履修、修得の認定は本校が行なう。

7．欠席で対応する場合

何の対応もしなかった場合は、特別な措置は講じられない。（欠席となる）

8．本校への転学について

震災により、転学した生徒が、ある期間以上経た後、本校へ転学を願い出た時は、転入考査の期間、定員等について柔軟に取り扱うものとする。ただし、本校活動に著しい支障があるときは、受け入れ不可とする。

震災による特別措置該当者は予想に反して少なく、次の通りであった。

1．休学‥‥‥‥‥‥なし

2．転学‥‥‥‥‥‥2名（大分県、三重県）

3．特別義務免‥‥1名

4．期間聴講‥‥‥‥1名（宮城県）

このうち、期間聴講の成績等は具体的には次のように取り扱った。

平成7年3月3日
学級担任様
教科担任様
期間聴講生徒の成績等の取扱いについて（連絡）
教務部

みだしにつきましては、下記のとおり処理して下さい。

記

1．判定会議　・期間聴講の生徒であることを資料上明示し、取り扱いについて別途審議する。

2．欠席時数　・聴講先の出席状況を本校各教科・科目に算入する。

・算入の方法については、教務部が決める。

（各教科の意見を参考にする場合がある。）

3．学習成績　・関連する教科・科目について、聴講先の学習状況を参考として本校での学習とあわせて総合的に評定する。

4．そ の 他　・聴講先からの資料が未着の時は、次のとおり扱う。

(1) 欠席時数‥‥聴講期間を抜いた部分で処理する。

(2) 学習成績‥‥本校での学習状況により仮評定する。

(3) 本校で与えた課題について、明示する。

・ただし、聴講先からの資料が届き次第、上記の 2，3 により修正する。

5．該当生徒　（以下略）

2/14 の交通状況図

また、震災という特別事情による義務免の範囲を次の通りとした。これの適用生徒は非常に多く交通途絶だけでも、延べ1年87人、2年80人、3年56人であった。

平成7年2月14日
被災生徒の義務免扱いについて
教務部

阪神大震災（兵庫県南部地震）による被災生徒の義務免扱いの具体例を以下に示しますので、個々の事情に応じて適切な取り扱いをされるようにお願いします。

1　交通途絶による場合

2　被災時の負傷による入院、もしくは通院でやむを得ない場合

3　生活上の基本に関係することで急を要し、やむを得ず家庭内の用務に従事する場合

(1)損壊家屋の片付け、修理　(2)転居　(3)家族等の看護

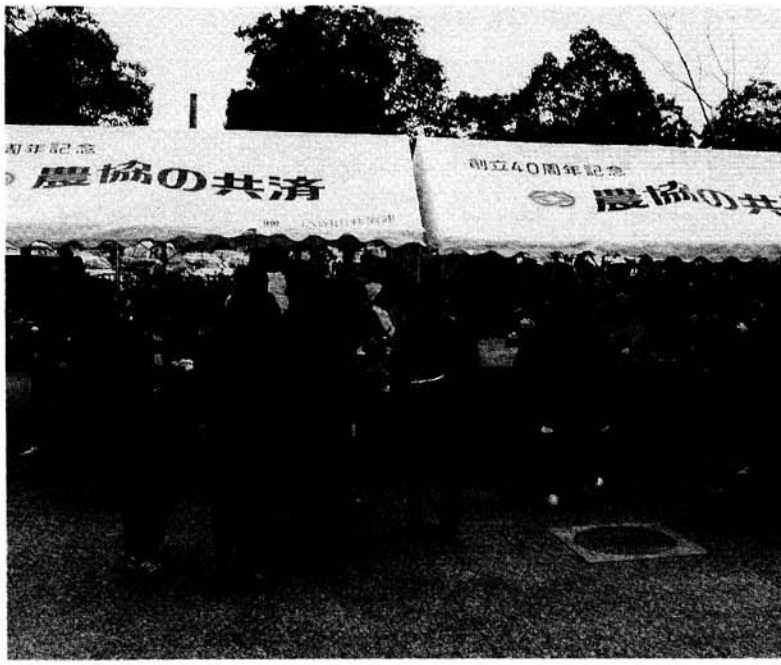
(4)罹災証明手続き等に関する保護者の代理

4　一時避難先から戻る場合

4　被災生徒の教材の確保

授業再開にあたって、被災生徒の教材確保が教務部としての大きな問題であった。しかし、これについては金銭にからむ問題であるので学校としては全く無力であった。３学期であったので、３学年の授業は打ち切ることで対応し、１，２学年についてはほぼ学年終了という時期であったので、各教科でプリント作成するなどで対応せざるを得なかった。

ここでは、教材教具に関する事項について述べる。



登校時の炊き出し風景

（１）県教委からの調査依頼

次の調査依頼を受け取った。このことにより、教科書・教材・教具は県教委の指示で対応することが示されたことになる。よかったという反面、迅速さ・救援の範囲にやや不安を感じた。

教高　第989号
平成７年１月24日
関係高等学校長様
高校教育課長

被災生徒の教科書等必要数の調査について（依頼）

兵庫県南部地震による被災家庭の生徒のうち、教科書を失い、救助を要する者に対し無償で給与し、授業再開のための必要条件を整備する計画である。

ついては、必要教科書および授業に最低必要な学用品等について、下記のとおり調査しますので、可能な限り早急にＦＡＸで回答願います。

記

１　内　容　　別紙様式のとおり

２　提出先　　県教育委員会事務局高校教育課長

ＦＡＸ　078-632-3929

担　当　　高校教育課指導第２係　田　畑

ＴＥＬ　078-341-7711　（内）　5745　078-362-3898　（ダイアルイン）

（2）本校での調査

ちょうど、1/26が安否確認のための登校日であったので、各クラス担任へ次の内容の調査を依頼した。クラス集計は各学科が行ない、最終の集計のみ教務部が行なった。調査内容と結果概要を次のとおりである。（対象は1，2学年のみ）

o 教科書の必要人数……57名

o 教科・科目ごとの教科書必要冊数

・普通科目‥‥19種類　延べ328冊

・工業科目‥‥42種類　延べ267冊

o 教科・科目ごとの副読本

・普通科目‥‥11種類　延べ237冊　計234,750円

・工業科目‥‥27種類　延べ159冊　計199,611円

o 教材・教具

・体育関係‥‥330点　計 811,000円

・音楽関係‥‥ 12点　計　20,400円

・工業関係‥‥136点　計 551,426円

o 制服‥‥‥‥‥ 60点　計 364,600円

（3）教科書、副読本、教材・教具の救援状況

県教委からの教科書は、2/17、3/1、3/18に兵庫県教科書株式会社経由で届けられた。時期的には、ほとんど授業に間に合わなかったが、2学年以上にわたって使用する専門教科の教科書については非常に助かった感じがする。その他、卒業生からもらい受けたり、他校からの救援物資として届けられた分もある。一方、副読本、教材・教具については、県教委から現物の支援はまったくなかった。したがって、これについては、学校の教材を貸与したり、義援金で対応せざるを得なかったことになる。義援金については、学年主任が担当したのでその項で述べることにする。鉛筆などの学用品は多量に届けられたが、逆に工業科で使うものが不足したというのが実情である。

5　おわりに

震災という未曾有の出来事に際し、教務部としては授業の再開・生徒の勉学継続など、いわゆる学習活動の正常化に取り組んできた。教務部にとって多忙な3学期。卒業や進級の認定、入学試験などの時期にも拘らず柔軟に対応できたのは、職員の協力があったからである。組織としては、すべての機能が1ヶ所に集中する教務部の専門化ではなく、広く各学科に分散していることが幸いしたのだと思う。

一方、震災後は授業再開を目標に全力を傾けていたが、それ以外にもすべきことはなかったのかと、いま、思いはじめている。震災によって失なわれたものは多い。それでも、家族の絆であるとか、ボランティア活動への参加とか、長時間の通学とか、最も人間らしいものが蘇った時でもあった。いま、教育に求められているものは、効果的な知識の獲得ではない。心の修復である。絶好の機会であったにも拘らず、そちらの方への計画がなされないまま時間が過ぎ去ってしまった。生徒の中に芽生えた何か好ましいもの、それをどう育てていくのか、われわれ教師のもう一つの課題である。

（加藤忠好・教務部）

学校の動き

教育の現場と避難所は同時に成立しえたか

市民感情では、すべての小中学校が防災時の避難所になっている。「本校は防災時の避難所になっているか？」答は、「なっている」である。神戸市防災要綱でも、県防災要綱の水防要綱でもそうなっている。水害で避難所になったことは人づてに聞いていたが、防災時については、職員の多くには周知されていなかった。管理職も知らされていない。これまでは、県も市もそういう防災政策であった。

それはともかく、1月 17 日、早暁から体育館には被災者がつめかけていた。職員も集まれる教師は個々に交通手段を工夫して学校に出勤した。それらの教師で1月 19 日から 20 日にかけて、被災者係を構成し当面の作業にあたった。震災報告を出すにあたり当時の係で集まり討議した問題点をまとめる。

1　教育現場として

今回の震災では、最初に学校として、学年教師集団は安否確認に全力を集中した。ひきつづき、教務部の提起で、授業再開に向けて衆知を集めての取り組みが開始された。

o もし、授業中に地震が起こったら

いろいろ議論はあったが、風水害でも、地震でも、交通途絶になっても、より早く、より安全に下校する方法を見つけて、下校させるのが良い。市内は歩行で、遠方は車で。いずれもグループを作るなどして集団下校をとるべきである。

2　避難所としての学校を振り返って

本校は、地震直後の一両日から1週間は最高時で 3000 名を越える被災者が避難されていた。被災者は、体育館の二階のフロア、1階の食堂、剣道場、柔道場、トレーニング室、更衣室、玄関、廊下、階段など所狭しと埋めつくし、駐車場、周回道路は避難者の居住自家用車で一杯になっていた。被災者は2月に入ると半数に減った。8月中旬の避難所閉鎖まで、長期にわたって、被災者を受け入れた。被災者は、初めの一両日は地震の恐怖、家の心配、家族、身内の安否が気になって他人のことはかまえずの状態であったが、三日目ごろから、森永氏（本御崎市営住宅自治会会長）を中心とする自治会役員さんの呼びかけで、フロアの居住場所区分、班分け、班長選出、お年寄りや障害者への心配り・配慮がなされて行き、4日目以降はトイレ水当番・清掃当番が始められた。下町の長屋式人間関係が避難所の中で作られ、あちこちで助け合いや、面倒の見合いが見うけられた。当初の2週間は職員が 24 時間常駐態勢で、被災者関係の電話等の応対、救援物資の受け入れ、区分、保管、配膳等を担当し、配給は避難所の世話役さんの担当と、自然に任務分担がされていった。2月に授業が再開されると、救援物資の受け入れの仕事は世話役さんを中心に、被災者の当番制にスムーズに移行し、職員は、手すきのものがお手伝いへと切り替えられた。

o よかったこと

・施設管理面から見て、被災者には狭い目、寒い目にあわせたけれど、体育館に入ってもらったこと。

・校地が広く、ピロティー・駐車場など広いスペースがあったこと。救援物資の集散・区分・保管には広場が必要である。

・避難所の被災者の中に本校の職員がいて、被災者の声を集約でき対応できた。

・被災者一人ひとりが、学校、職員を信頼し、職員の要請、注文を全面的に受け入れてくれた。

・森永会長を中心に、避難所の自治組織が作られ、当番制やボランティア活動が行なわれた。

・教職員は自らが被災者であったにもかかわらず、被災が軽く、勤務できるものがすすんで勤務につき、ベテランは経験を生かして、若者は宿直などの激務を引き受け、多数の教職員が毎晩交代で宿直し、長期に 24 時間常駐態勢が取れたこと。本校は、日頃からマニュアルなしで自主的に判断し行動する気風があり、被災者の要求や注文に即座に対応し、処理できた。

・２日目以降避難所解消まで、ライテック社によるお湯の炊き出しは歓迎されていた。初めの１週間はライテック社の若い衆が、２週間目は避難所のボランティアが、その後は当番制でお湯の提供を続けたこと。ある県会議員のお世話で、洗濯機や、乾燥機が設置され、また、神奈川県の会社が提供してくれた給湯機も歓迎されていた。

・ガス復旧が早かったこと。大阪市のガス復旧支援隊が本校を作業基地と駐車場にしたいと訪ねてきた時、ガス復旧をお願いしたら、すぐに見てくれて付近の本管から支管を引いていただき、３月３日、ガスが復旧した。

・北九州市医療団が本校に診療所をおかれたことで、被災者に「安心」を贈ってくれた。

・ヘリコプター駐機を断ったこと。グランドの各所に地盤沈下が発生し危険箇所が多くあり、救援物資の輸送にしても、騒音や被災者の混乱も予想されたので断った。

・池尻前育友会会長の炊き出しボランティアをはじめ、多くの団体、地域の炊き出しは被災者にも、生徒にも大いに「元気」を送ってくれた。富士通の寮の浴場開放、三菱の二見寮の浴場にバス送迎とゴミ集積所の清掃、カネカのボランティア活動など、近辺の企業にもお世話になった。６月まで毎朝、校門から校舎周辺のポイ捨てゴミを拾ってくれた二人のおばさんにもお世話になった。（被災者）

・情報技術科３年生のボランティアにより作成された被災者名簿は、使用目的に応じて多様な検索ができ、大いに活用された。

以上、地域とのお付き合いを通じて交流を深め、地域から信頼され、地域に開かれた学校を作って行くことの必要性が再認識された。教職員は、普段からできていることが非常時でも役に立つことが確認できた。また、被災者との対応では、被災者自身に自治組織を作ってもらうことがもっとも大切であるなど多くのことを学んだ。今後の教訓にしたい。

o 「してほしいこと」と「してほしくないこと」

・県・市の対策本部がその機能を果たすこと。特に本校は避難所にカウントされておらず、何かと後回しにされた。

・県教委は非常時の危機管理の体制をとっていなかったこと。現場の状況を充分に把握できないまま、17 日には、「学校の被害金額を報告せよ」、20 日には、「授業正常化の計画書を提出せよ」を指示するなど、救援活動で厳しい人手の足りない状況を無視した指示があいつぎ、現場がさらに混乱した。

・毎日、日記、記録を作ること。

・非常時に備えて普段から、学校と管理職間に無線電話（ホットライン）を設置しておくこと。

・本校を今後も避難所に指定するなら、最低、倉庫、電気・灯油両用の温水シャワー棟を建設すること。職員自炊用の厨房を設置すること。　**（大島伸生・被災者係）**

学校に水が戻るまで

1月 17 日(火)。私の手帳にはその日の予定と、『5：46 兵庫県南部地震発生、M7.2 震度6』の朱書きのメモがある。以下、手帳に残された主なメモから授業再開までを振り返ると次のとおりである。

1/18(水)　建物、備品破損の写真撮影。
21(土)　9:00 打合せ。校内施設・設備損害調査開始。
22(日)　12:00 職員集会。損害調査継続。
24(火)　卒業証書作成(E)。
25(水)　卒業証書作成(C)。
26(木)　11:00 生徒登校、安否確認・諸調査・連絡。
15:00 職員集会、臨時職員会議。卒業証書作成(P)。
27(金)　3年考査中止。卒業証書作成(T)。
28(土)　卒業証書作成(I)。
29(日)　卒業証書作成(D)。
30(月)　A棟高架タンク揚水ポンプ運転、漏水箇所点検。水道局中部事務所へ通水の要請。
31(火)　11:00 職員集会。A棟高架タンク揚水ポンプ運転。夜間、D棟高架タンクへ揚水。
2/1(水)　D棟高架タンク系漏水箇所点検。
2(木)　10:00 3年登校。I棟消火管系統閉栓。
3(金)　10:00 2年登校。
4(土)　10:00 1年登校。東側道消火栓より受水槽へ給水。市水管復旧工事依頼。
5(日)　南側道および西側道市水管復旧工事。受水槽への給水回復。
6(月)　10:00 1・2年授業再開(40分×3時間)

前日、研究発表の準備を行なっていた。その夕刻に少しの揺れを足元に感じたが、前兆とは思わなかった。

地震発生からは、先の読めない困惑の中で、なんとか卒業式が行なわれることを前提に証書作成を始めた。いつもは自宅で行なうことを、いつもとは違う校長室の片隅で、非常食や布団を横にして進めた。その間、ガスと水道は依然止まったままであった。トイレの詰まりが複数発生し、簡易トイレが設置され、北九州市からの医療団が 24 時間の診療を開始してくれたが水もガスも出ない。緊急物資の中でも水はとくに重い。

卒業証書をほぼ書き終える頃に、「水が出るようにやってみよう。このままではだめだ。」と思い、改築図面から配管系統を調べた。結果、受水槽～A棟高架タンク～A・I・H・体育館へ、受水槽～D棟高架タンク～B・C・D・E各棟へ、市水直圧でプール・運動場への3系統給水であることが判った。このうち急を要するのはA棟高架タンク系統である。1月 30 日、受水槽への給水は殆ど停止に近い状態であったが止水弁を触っている中ごくわずか、2時間で1 m^3(30分で家庭用浴槽1杯)程度の給水が感じられた。「これは可能性がある。」と思った。側道の市水弁は閉められているが試験通水で洩れているのが流れ込んでいるようであった。その後水道局に、多数の避難者がおり北九州市からの医療団がいることを伝えて、衛生管理上、急ぎ給水工事をして頂くよう頼み、一方でわずかの給水を受水槽に貯めては高架タンクへ手動運転で揚水し、最小限での使用ができるようになった。

しかし、事はそう簡単でない、漏水は通水しないと判らない。建物内で漏れると厄介で、敷地埋設管は漏水箇所の特定が難しい。結局、手動給水しながら漏水箇所を探すということを夜中も次の日も懐中電灯と工具と図面を持って行なうことになった。協力してくれる先生方と学校の中をぐるぐると廻り、1箇所ずつ漏水系統の弁を閉めてなんとかA棟高架タンク系統の給水ができ、学年別登校に間に合った。同時に女性避難者用体育館トイレとH棟の医療団の水使用が可能になった。

A棟系の給水確保と併行して、運動場散水用埋設管の破損

には分岐の弁を閉めて対処した。

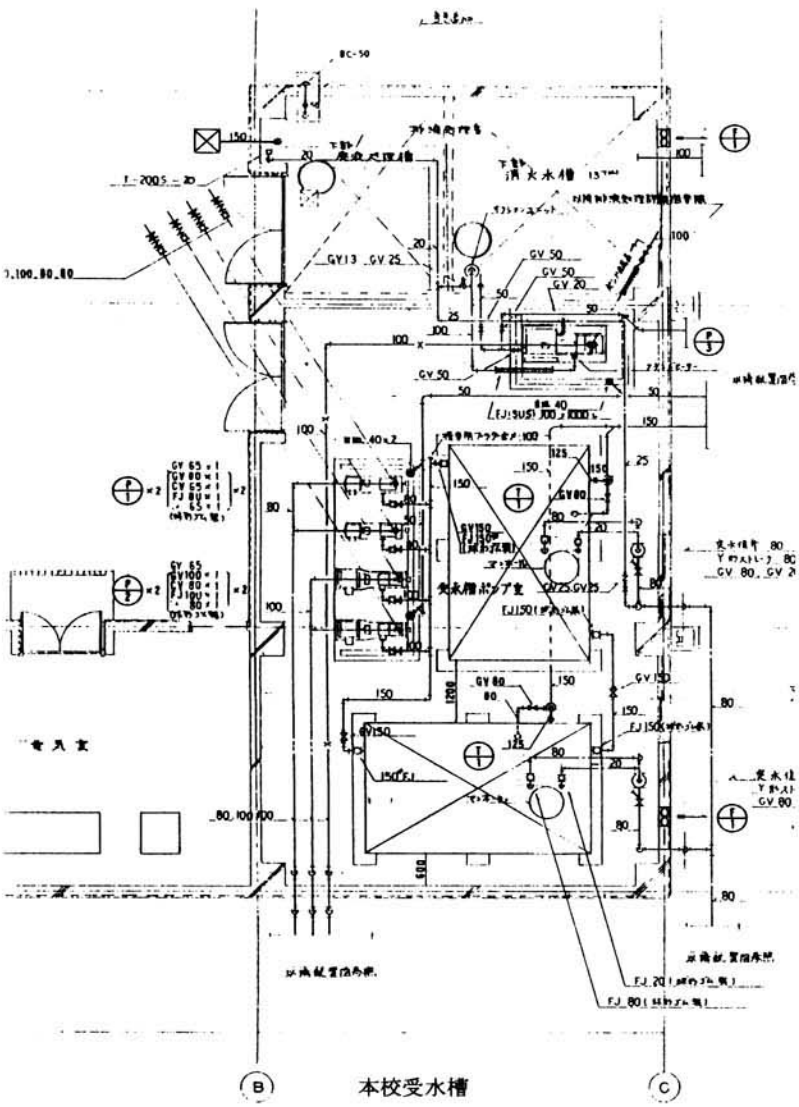
さらに引き続いてD棟系の給水を開始したが、この系統には学校全体の屋内消火栓系統がつながっており、E棟前埋設管の破損を発見して止水し一般給水は可能になったものの、消火管の破損で消火系統が全く使えないようになっていた。火災が起これば消防隊が来ても手段がとれない。これには焦りを感じ漏水箇所の発見に努めたが1日、2日経っても判らなかった。D棟からC棟さらにA棟へ1階下の共同シャフトに電気科の先生に潜って点検して頂いたが発見できなかった。3日目、消火管に通水し最上階から順にエアー抜きをしながら水圧を確かめ、全部の屋内消火栓と系統を見て廻わるローラー作戦をとることを決行、点検の一番最後、半ばあきらめのような気持ちのときにI棟1階の屋外部分で配管の切断箇所をやっと発見できた。

漏水はほぼ止められたので、次は市水管からの給水の確保がいる。2月6日(月)の授業再開に間に合うようにしないと生徒はトイレが使えないことになる。再度、水道局に連絡して局員に来て頂き、南側道および西側道市水管復旧工事を日曜日の朝から行なうことをお願いし、また、万一のことを考えて2基の受水槽と高架水槽を満水にするために東側道の消火栓からホースで受水槽への給水を行なってもらった。

2月5日(日)朝8時から市水管復旧工事は始まり、午後から水道メーターは元気よく回り始めて給水は確保された。引き続き学校周辺と本御崎地区各戸への給水が再開され、避難の方々も自宅へ帰れるようになった。

多数の先生方と協力して困難の一時期を克服するように出来たことを忘れません。ご協力に感謝します。

(岩田澄雄・機械科)



本校受水槽

震災と自治会

兵庫県南部地震において地域の方々と私たちの友情の絆が生まれた。

平成7年1月17日午前5時46分、未曾有の大地震が襲った。兵庫県南部地震である。

本校は、地域の中の避難所として、非常時の対応については、平素より配慮に抜かりはなかった。が、一時に大勢の避難された方々を迎える事態となり、本校職員が、体育館を開放して、これに応えた。安全が確認された施設は、体育館しかなかったためである。実に2000名あまりの方々が、体育館、剣道場、柔道場、更衣室、トレーニング室、食堂、廊下、玄関ロビー等で、不安な朝を迎えられた。自宅から持ち寄った毛布で暖を取るのみ、未だ余震も続き、駐車場や周辺の路上に止めた車中で夜を明かされた方々を含めると3000名を超える避難の方々で膨れ上がった。当然混乱も起きた。まず、食料、水が、毛布が足りない。

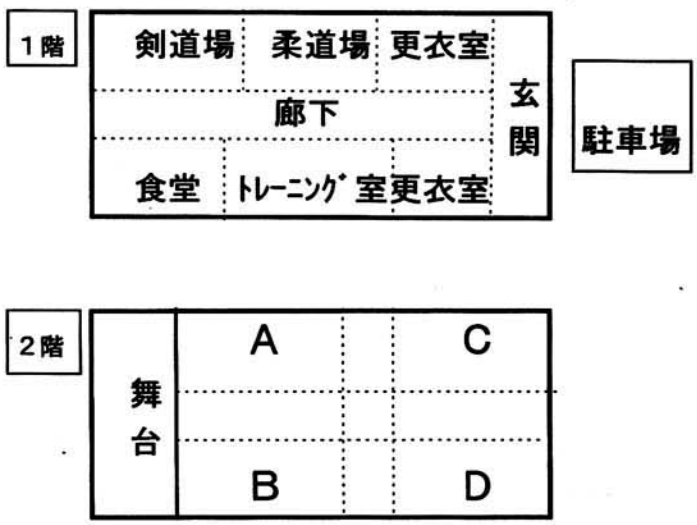
真夜中になって救援物資が届く。配給物資は、一家族あたりおにぎり一個。毛布百枚弱。殺到する人々に、管理職、数人の職員が不眠不休の対応であった。あとで寄せられた苦情もいろいろあった。中には一人で、二、三枚と毛布を持って行く人もいたからだ。

「次々と救援物資が到着しますから。」と慰めたり、老人、子供たちへの配付を優先するも、救援物資の配付、環境整備への限界が見え始める。

森永氏は、この時本御崎自治会長として、本御崎住宅327所帯をまとめる世話をされていたが、今後の対応については、相談に乗っていただく。以降、梅野太志男氏や、西木昭造氏らが連携し、精力的に活動された。それは、本校各施設に避難された方々の人数確認から始まった。

次のように各ブロックを分けて責任者(代表者)を決めた。

避難所の平面図



代表者会（学校側、森永会長、各責任者）を召集し以下の項目を決めた。

- o 人数確認（所帯）
  …名簿の作成（外部からの電話紹介連絡のため）
- o 救援物資の受け渡し
- o 各部屋の生活環境
- o 便所の清掃
- o 便所の水汲み

避難された方々は、交通機関やライフライン（水道・ガス・電気）の復旧が進まないため、避難所での待避生活が余儀なくされた。一方学校では、生徒の安否確認と校舎の危険個所調査に取りかかる。出勤した先生方が手分けして取り組んだ。

ここで、避難された方々の呼称が問題となる。各地の避難

所では「避難民」という名前が飛び交う中で、本校では「被災者」と呼ぶことに決め、全職員に徹底する。

避災者のグループ分け、仕事の分担も軌道に乗る。救援物資を積んだ車が正門から入って来ると、ロビーに集まり、手際よく荷物を受けて取っていく。本校職員も、事務所に常時十人程度待機していた。「ペットボトルの飲料水、トイレットペーパー、おにぎり等の至急必要な物資」と「緊急度の低い物資」に分類し適宜分配を考慮する。またたく内に、ロビーは支援物資で一杯になる。事務室、校長室前の廊下にも、山積みされた。それぞれの数量を確認し、各ブロックの人数分だけ用意して配付する。自治会長の森永氏は、旧住宅に家族を残し、朝は6時前から被災者の様子を見て、よき相談相手となり、親身に話されていた。西木昭造氏は本校と連絡を密にして、避難所として生活環境を中心にお世話していただき、梅野太志男氏には、救援物資や校内施設の復旧に協力していただく。おかげで、被災者の心の支えとなり、大きなトラブルもなく共同生活を送ることができた。

その後、有り難くも各方面から救援の炊き出しをはじめ、多くの救助を賜る。森永会長は、その都度感謝状を渡され、感謝の意を表された。

2月 25 日が迫る。卒業証書授与式を何処で行なうか。勿論、大きな体育館や講堂は、震災の被害を受けているか。避難所となっているかで使用不可能の状態である。検討を重ね、候補として、本校体育館、三菱重工倶楽部、三菱電機体育館等数カ所に絞り込む。

「卒業式は、本校体育館で実施可能か」、森永氏に相談。被災者は、この時点で 700 名。各部屋に分散している状況である。森永氏は「日頃、生徒さんに迷惑をかけているので、何とか母校から卒業できるようにしよう。」と、決断していただく。

「2月 15 日までに体育館2階を開けます。清掃してお返しします。」との言葉通り、無事卒業式を迎えられた。荘厳な式ではあるが、被災された方々の心情を鑑み、静かに挙行することとなった。被災者を代表して、来賓として森永氏と梅野氏に出席していただいた。

体育館には、剣道場・柔道場・トレーニング室等の施設がある、今までここで練習していたクラブの生徒は、震災後は屋外の駐車場にマットを敷いて練習した。その姿を見て、森永会長は励ましの言葉をかけたり、大会に応援にきていただいたりして、我が子のように生徒達をかわいがっていただいた。

春季休業に入る。部活動で体育館を使用するクラブが体育館の使用伺いを申し出てきた。体育館で部活動を実施すると階下の被災者の頭上が反響する。そこで、使用時間の制限をして部活動に許可を与えた。午後5時以降の使用は自粛したため、定時制の神戸工業高校はまだ使用できない状態であった。

4月 16 日に「復興祭」をしょうという気運が盛り上がり、被災者、地域自治会、学校、育友会、生徒会で運営を相談をする。この催しのために加古川、滋賀県、姫路等より多くの方々に駆けつけていただいた。会場は駐車場にトラックの荷台を舞台として、紅白の幕で飾り、テントも8張用意して子ども用の遊び場をつくった。歌手も呼んだ。オカリナ演奏、紙芝居、ゲームなどで一日を楽しく過ごした。この日はあいにくの小雨が降る天候であったが、さわやかな気持ちで神戸の復興を誓い合う。

震災から6ヶ月間、森永会長は、毎日、本校の玄関ロビーの椅子に腰掛けられて関係方面との連絡や被災者の相談相手となり、ご自分の生活を省みず献身的に面倒を見ていただいた。このことが、本校が避難所として大きなトラブルも起こらず、無事に避難所としての任務を解消できた大きな理由の一つといえる。地域の方々と、私たち学校職員の支援の絆が生まれた、また一つの理由でもあった。

（野呂一幸・教頭）

被災者名簿の打ち込み

事務室前の受付にストーブが置かれ、そこがいわば避難所の受付になっていた。最初は大型のノートが置かれ次々に避難所に入る人たちの名前が、部屋別に書き込まれていった。安否を尋ねてくる人もこの１冊のノートの中の名前を追った。数日でその数が膨大になり、また退去や部屋の移動なども追加され、判別しにくいページもあった。

そこで、森永会長に、コンピュータに打ち込むことを提案したら「ぜひ」ということで、さっそくコンピュータ部に所属している生徒に打ち込みをさせた。１月 23 日から打ち込みを始めた。中心になったのは情報技術科３年生の大島さんと岩田君で、Excel を使い打ち込んだ。

打ち込まれたデータは、体育館内の部屋別、名簿順、住んでいる町名別の３通りに分類してプリントアウトした。これらを綴じて事務室前に置き、マスター名簿に避難者の出入を記入するようにして定期的にデータの修正を行なった。この閲覧方法で避難者情報も把握しやすくなった。さらにこのデータをもとに、部屋別避難者の集計表なども Excel で打ち出し食事の配付資料として使用した。

（岡田俊一・コンピュータ部顧問）

「名簿のこと」

自転車で須磨北部から六甲山脈の端を越えて最初に目にした光景に私は愕然とした。私の住む地域はそんなに被害が大きくなく、地震直後よりテレビで報道されていた映像を見てはいたのだが、信じられないというか、信じたくなかったというか、あの映像は何かの間違いであって欲しいと願っていた気持ちが、一気に音を立てて崩れていくのを感じた。青いシートが目につく。壁がはがれ落ちた家が多い。瓦礫の山と化している所もある。自転車をこぐ足が、がくがくと震えるのが分かった。いつも利用していた新長田のバス停。まわりは焼けこげた匂いが立ちこめている。まだ熱気さえ感じる。地震が発生してから、もう３日以上経つのに。家で待機していても、友達や他の住民の事が気になって仕方なく、親の反対を押し切って学校へ向かう私に街が教えてくれたのは、自然の恐ろしさだったような気がする。行く先々でショックを受け、１時間以上かかって学校に到着した時には、知ってい

次の表は、１月 27 日分（震災後 10 日目）部屋別人数の集計表である。

ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ室	剣道場	更衣室１	更衣室２	柔道場	食堂
１２５人	１８０人	３６人	４３人	２４人	１６５人
体育館１階廊下	体育館２階	自宅	未記入	駐車場（18 台）	合計
４８人	４７２人	７人	２３９人	４９人	１４８８人

る顔を見れた安堵感と中庭に走る亀裂を見ての驚きが一緒に身に降りかかっていた。とにかく、何かお手伝いしたかった。何をしたら良いのか、なんて浮かばなかった。とにかく早く何かをしたかった。私に出来る仕事をとりあえず考えた。と、その時、避難されている方々の名簿らしきノートを目にした。被災した親族を尋ねているのであろう男性が、必死にノートを見ている。私は情報技術科に所属していたので、パソコンならば少しは扱える。避難されている方々の名簿をつくって、パソコンで検索できるように出来ないものかと思い、先生に言おうとしたら、先生も同じ事を考えていたらしく、早速名簿作成の作業に取りかかる事になった。ノートに書込まれている名前を、パソコンに打ち込むだけの単純な作業のはずだったが、分からない漢字でつまったりして、作業はなかなか思うように進まなかった。そのうち、様子を見に学校に立ち寄ったクラスメートが、私の名簿作成の作業を聞いて、手伝ってくれるようになり、結局1週間以上かかって名簿が出来上がった。市の方や、赤十字の方が名簿を要求された時にも、すぐに提出できて助かったと後で先生から伺った時には、こんな私でも、少しは役に立ったんだなぁとちょっと嬉しくなった。この嬉しさをみんなにも知ってもらいたくて、学校ぐるみでボランティア活動はできないかなぁと生徒会にボランティアを紹介したが、生徒会ではうまく受け入れてもらえず、悲しい思いもした。私の家の近くに、仮設住宅が沢山建ちだした。犬の散歩で近くを通りかかるとお年寄りの姿が多い。震災で可愛がっていた犬を亡くしたお婆さんとか、話し相手が欲しい人とかが寄ってくる。実際の所、相手の話にうんうんとうなづく程度しか出来ないのだが、それでも喜んで貰える。逆に私が教わる事もある。震災から1年近く経った今、まだまだ復興中であって、街は元どおりになった訳ではない。もう終わったと思わずに、何か小さな事でいいからボランティアを体験してもらいたいなと思う。

（大島直子・平成6年度卒業生）

修学旅行

1月22日　緊急職員会議後、第2学年臨時担任会開催

2月 12 日から計画している平成6年度修学旅行について検討する。11 名の担任団全員が、中止する方が望ましいと考えたが、生徒にアンケートを実施し現状を掌握したうえで検討することとして保留にした。

1月26日　全校生登校日

第2学年在籍 370 名のうち、全校集会開始 11 時に 249 名(66.9%)、ホームルーム終了時点でも 302 名(81.6%)の生徒しか登校することができなかった。登校生徒によるアンケート結果は、全半壊焼失合わせて 43 名(11.6%)、自宅外に避難している生徒 67 名(18.1%)となり、アンケートを実施できなかった生徒のことも考え合わせ中止の結論を出した。

2月7日　代替案の検討開始

スキー実習の修学旅行に代わるものとして、第3学年の進路指導が本格的に開始される前の5、6月において実施するのに適切なコースを 19 モデルより選ぶ作業を開始した。

2月22日　平成7年度修学旅行の実施内容決定

第1次選定で 19 モデルより4モデルに絞り込み、この4モデルを細かく分析したうえで、2月 22 日の第4回修学旅行実施委員会にて6月7日より横浜、東京デイズニーランドに行くことに決定した。この間、多くの生徒達が要求したこと、「先生、温泉に連れて行ってほしい。僕ら、今お風呂に入りたい。」

3月 8日　職員会議にて修学旅行実施計画承認

3月23日　保護者に報告

（平成6年度第2学年担任団）

義援金

1月 22 日に本校教職員からなる睦会において、被災した教職員への義援金活動が始まった。その第1次締め切りの2月 10 日ごろより、生徒会の中で被災した生徒への義援金活動が生まれることを願い始めた。しかし、生徒の大半が激震地に住んでおり、また、多くの生徒が被災しているために、2週間経過しても生徒側からの活動は発生しなかった。担任団として、新年度の教材、教具購入等の援助をし、生徒が安心して新学期が迎えられるように2月下旬より活動を開始した。そして、3月 10 日には振り込み口座を開設し、保護者への義援金も募った。

3月 31 日を締め切りとして、次に挙げる方々よりいただきました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

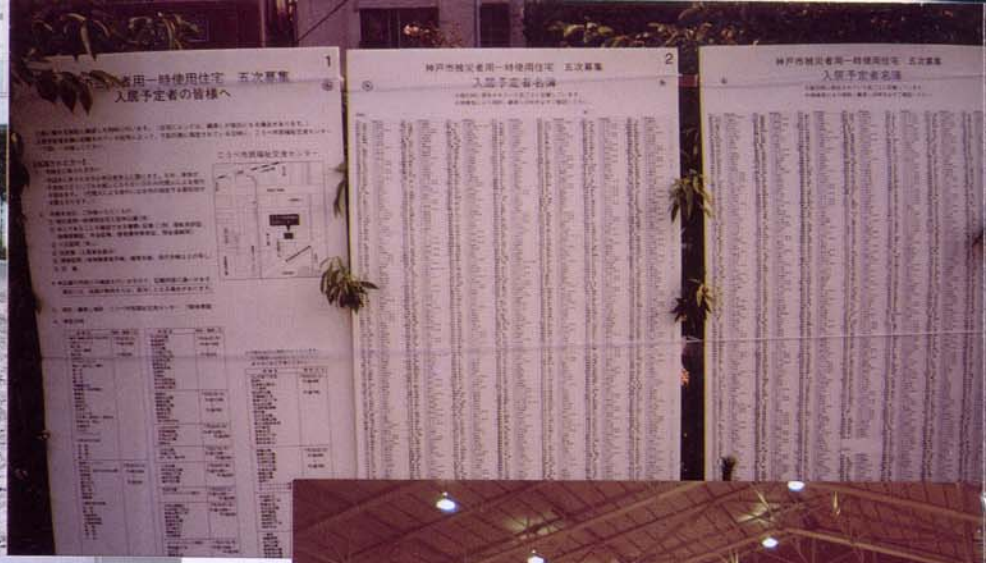
・西日本工業高校建築連盟
・全国デザイン教育研究会関東ブロック校
・兵庫県立高等学校長協会
・兵庫県高等学校教職員組合
・兵庫県高等学校教職員組合兵庫県高等学校支部兵庫工業分会
・兵庫県「主任手当」基金委員会
・兵庫県高等学校教職員組合兵庫工業分会「主任手当」基金
・兵庫工業倶楽部
・兵庫工業高校育友会
・兵庫工業高校教職員

分配に先立ち、3月2日の合同担任会において義援金の配分方法を検討し、全壊・半壊・全焼・半焼のり災証明書がある家の生徒、証明書のあるレベルで主たる生計者が失業もしくは収入が激減した家の生徒に分配することにした。しかし、この結論に対しては幾つかの問題点を指摘された。義援金は被災した家に対して渡されるものであるが、教材、教具購入の補助として被災した生徒一人ひとりに分配しようとしたため、兄弟が2人在籍している家には2軒分渡されることになる。また、失業・減収についても、阪神大震災と関係なくそうなった家に対しても渡される可能性が出てくることになる。そのために、再度慎重に検討し次の結論に至った。

o 配分する対象は、公的証明書のあるレベルで考え、今回は自宅についてのり災証明書のみとする。
o 市役所が認める全壊・半壊、消防署の認める全焼・半焼の生徒とし、一部損壊は入れない。
o 対象学年は、現1、2、3年とし、兄弟姉妹のいる家庭については下位の学年の生徒一人分のみの配分とする。
o 3月 31 日までに寄せられた義援金の総合計を、全学年の対象家庭の総戸数で単純割りする。
o 兵庫県からの被災生徒の学用品の無償給与分を全壊・全焼の生徒を対象とし、これにより半壊・半焼の生徒と配分金額が異なるようにする。

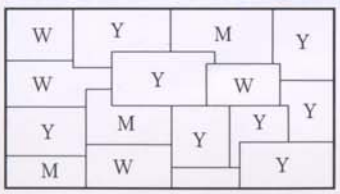
この配分方法にて「義援金」としてではなく、被災した家庭に対して「見舞金」として授業料口座に振り込むこととした。

（担任団）


入居予定者の皆様へ
入居予定者名簿

Pclub

お湯サービスでき ます



photograph by

M = Morinaga
Y = Yamauchi
W = Wasio(oohashi P.)

授業料免除と各種奨学金

o 被災死亡者　０人（最終確認は平成７年１月24日）

o 保護者被災死亡者　４人（両親１、父親１、母親２）

旧３年１、２年３

o 住居被災者　460人

（全壊155、全焼22、半壊281、半焼２）

被災者による「授業料」免除者　382人

３年127人、２年132人、１年123人）

被災による「神戸市奨学金」受給者　123人

（旧３年６人、３年47人、２年69人、１年１人）

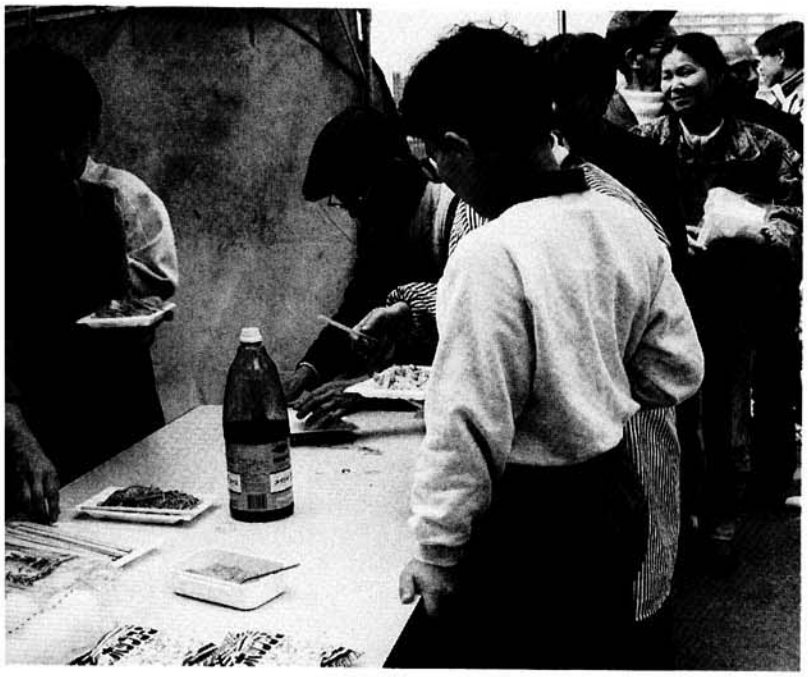
o 「待機所」居住者　１人

o 「仮設住宅」居住者　20人

（西区11、垂水区2、北区2、明石市1、須磨区1、長田区1、灘区1、三木市1）

３年７、２年２、１年11

（平成７年９月８日現在）



ボランティアによる温かい炊き出し

救援物資の受け入れ

1／19　おにぎり、飲料水、お菓子、生活用品「くさのね」
／20　おにぎり「くさのね」
／21　車椅子「くさのね」
／22　仮設トイレ14棟「大林組・神戸機材センター」
／23　仮設トイレ16棟「大林組・神戸機材センター」○水中ポンプ「株式会社安田」○食料・生活用品「くさのね」
／24　サニーホース「株式会社安田」
／25　生活用品「くさのね」
／26　電池「ＮＴＴドコモ」
／27　雑炊の炊き出し・お茶（朝）、豚汁・おにぎりの炊き出し・お茶（夕）「ＢＩＬＬ岡山」
／28　ガスボンベ・生活用品「くさのね」

2／3　カロリーメイト「大塚製薬株式会社」○豚汁の炊き出し（100食）「日本防災協会」
／4　ぜんざい・綿かしの炊き出し「くさのね」、「加古川シーサイドクラブ」
／5　ハブラシ「大阪歯科医師会」
／6　ポリスチレンフォーム断熱材（400枚）「(株)大西コルク工業」
／8　混ぜご飯・豚汁の炊き出し（昼・1500食）「岡山大原町農協」
／10　老眼鏡等「くさのね」○うどんの炊き出し「岡山県矢部町役場」
／11　うどんの炊き出し（昼）、豚汁の炊き出し（夕）「ＢＩＬＬ岡山」
／13　うどんの炊き出し（昼）、豚汁の炊き出し（夕）「ＢＩＬＬ岡山」○学生服・飲料水・洗剤・衣料等「社団法人三木青年会議所」
／14　豚汁の炊き出し（夕）「三菱重工」○中古自転車90台「広島県三原市役所建設部」
／17　豚汁の炊き出し「新潟県長岡市晴耕舎」
／19　もつ鍋の炊き出し「千葉県流山市」
／21　うどん、けんちん汁の炊き出し（昼）「七福醸造」
／22　みそ汁の炊き出し（朝）「七福醸造」
／26　ふく鍋の炊き出し（1000食）「社団法人下関青年会議所」○衣類、生活用品、洗濯機、乾燥機「東大阪市江田信子氏」
／27　焼き鳥の炊き出し（夕）「宮崎県児湯郡新富町役場」
／28　みそ汁・ごはんの炊き出し（朝）「宮崎県児湯郡新富町役場」

本校の事務室の受付の記録簿をまとめたもので、この他にも多くの団体、個人から物心両面にわたるご支援を頂いております。

最初の登校日

校内のあちこちが非常に危険な状態だったので、まず校内にできた地割れや陥没部分、傾いた塀、および校舎の階段やジョイント等の破損部分に対する注意の看板を設置するとともに進入禁止のロープ張りを実施する。その後は他の職員と同様救援物資の運搬や仕分け、およびプールの水のバケツリレー等に従事。また、1／26の生徒の初登校に備えて集合場所やＨＲ教室の指示等の準備および当日の安全な生徒誘導を実施。それと並行して、救援物資の自転車について被災生徒を対象に希望調査のうえ配付。また、学生服の紛失・焼失した生徒について、１・２年生に対して調査を実施。その結果 30 名近い生徒が消失していることが判明したので救援物資の中から選ぼうとしたがなかなかサイズが合わなかった。卒業生の中古、もしくは本校の指定業者にお願いして新しいのを半額以下で譲っていただいた。なお、運動靴や学生服は小さいものがかなり含まれていたので近隣の中学校との連携を図った。

o 救援物資の自転車の台数

東京都より 50 台（２／２）

広島県より 90 台（２／14）

神戸市より　５台（２／15）

o 生徒登校日の生徒誘導

1 月 26 日について生徒登校日にむけて、生徒指導部から職員用に次のようなようなお願いをして万全を期した。

申し合わせ事項

・自転車は自転車置き場へ

・靴は各自持って教室へ

・トイレは体育館南の仮設トイレを使用

生徒誘導人員配置		
1	集合場所	浜野、出雲、小河、南
2	正　門	桝田、大川
3	通用門	向山、坂上
4	東　門	安尾、永良
5	南　門	田中、小畑
6	西　門	鶴谷、宇野
7	自転車置き場	油浅
8	正門前道路	山内、毛笠
9	正門前道路	鈴木、大熊

・上記にて 10:00～12:00 までの間生徒誘導。

・集合場所（テニスコート南）に指定の順路で誘導する。

・校舎、グラウンドの地割れ、陥没場所および南の塀付近には近づけない。また、校舎内の危険個所にも近づけない。

・自転車置き場への誘導。

・前面道路の交通安全指導。

・都合の悪い方は各人で交代お願いします。

・その他お手すきの方は集合場所および各誘導場所での応援お願いします。

雨天時は直接ＨＲ教室および下記の場所へ誘導

情報技術科：1､2 年生はＤ棟３階に集合→Ｄ棟昇降口を利用

電気科：全学年Ｄ棟２階に集合→Ｄ棟昇降口を利用

機械科：全学年Ｈ棟４階多目的ホールに集合→体育館玄関側の昇降口を利用

※Ｄ棟昇降口はＩ１、Ｉ２、Ｅ１、Ｅ２、Ｅ３のみ使用可。他の生徒はＡ棟事務室前より各教室へ（Ａ、Ｂ棟昇降口は使用不可）

（浜野　修・生徒指導部）

文部省の研究指定発表会の中止

平成７年１月 20 日は、全国の先生方に、研究指定の成果を発表する日であった。

本校は、平成５・６年度文部省の高等学校教育課程研究指定校「職業教育関係及び進路指導関係」を受けていた。
研究主題は、

科目「情報技術基礎」を中心とした新技術の導入を図る「実習」と「製図」の指導計画と指導方法について
である。

12 月には、各科とも研究推進委員会を中心に資料の作成に没頭し、研究成果報告書（Ａ４版 67 頁）と研究発表資料集（Ａ４版 90 頁）を製本印刷した。また、全国から参加される先生方も 150 人の参加申し込みがあり、ホテルの手配も終わっていた。当日の研究授業の教案や校舎案内等の校内の印刷を、17 日に残すだけになっていた。

そして震災が、起きたのである。
学校が、避難所となる中で、３日後に控えた研究発表をどうすべきかという決断がせまっていた。

被災の規模がわからない。中止するのか、実施可能なのか。交通機関は大丈夫か。

情報が乏しい中で、的確な判断をしなくてはならなかった。まして、学校は避難所になっている。会場の多目的ホールの屋根も変形して安全が保障されない。とりあえず、予定していた研究発表の教案などの最後の資料は印刷をストップし、文部省や教育委員会との日程の調整に入った。徐々に被害状況が入るにつれて、とても全国大会を開催できることはできないことがわかった。県外から参加される先生方の宿舎に予定していたＪＲ神戸駅前の「チサンホテル」も大きな被害を受けて、営業不能になっていた。そこで、最終的に中止を決定し、可能な範囲で中止の連絡を入れた。

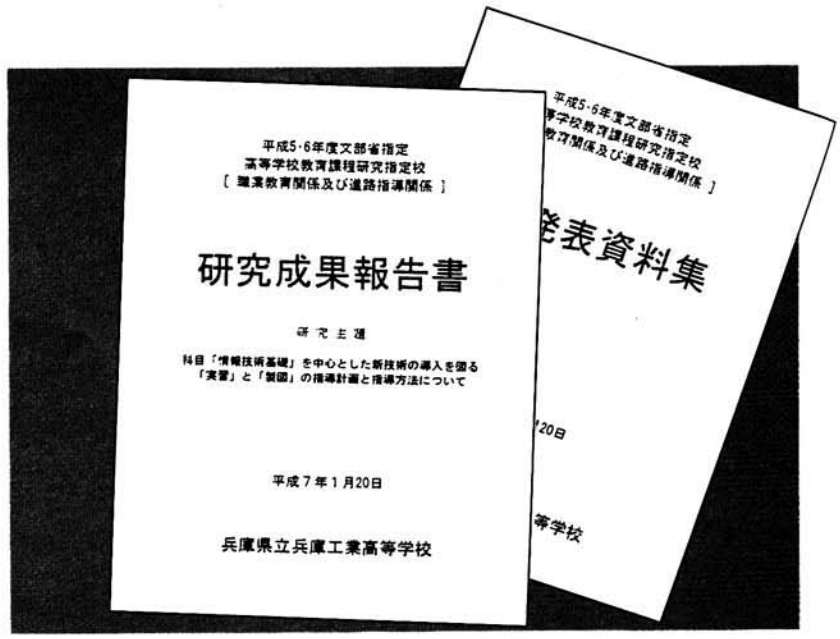
そして、発表会は、「紙上発表」に切り替えた。

３月に入って、教育委員会の講評と校長の挨拶文を入れて、参加の申し込みをいただいた方々に資料の郵送を行なった。ほとんどの学校で、励ましのお言葉と共に資料代実費を送っていただいた。

残念ながら、２年間に及ぶ研究成果を、直に全国の先生方に問う機会を持つことはできなかったが、研究成果を、２冊の発表集にまとめた。

その後、震災のお見舞いを兼ねて関連校からの訪問を受け、交流の絆を残すことができた。

（平成６年度研究推進委員会）



1/20 発行研究成果報告書

3　震災と私

「普通の生活」

中世古　圭基（三重県立四日市工業高等学校）

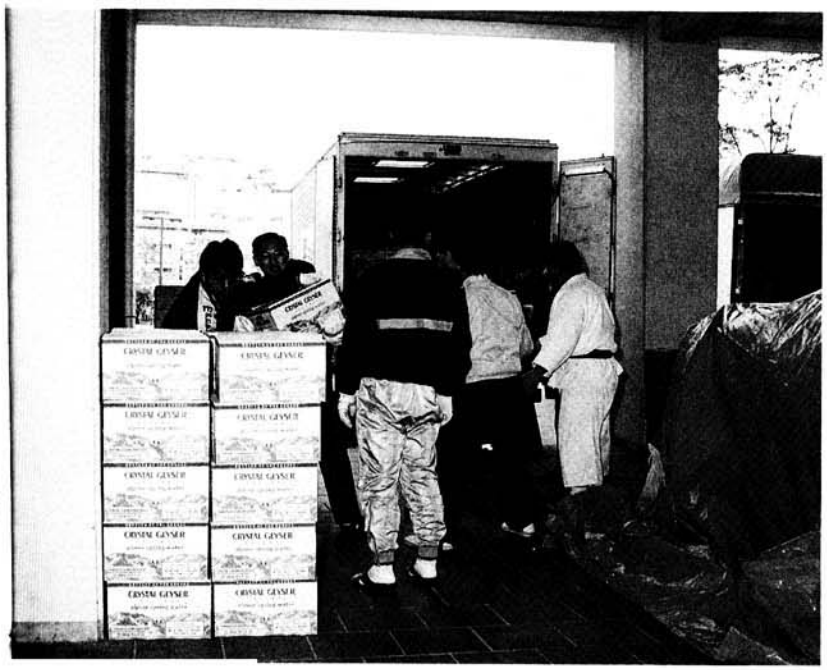
近鉄で鶴橋まで行き、ＪＲ環状線・兵庫経由で和田岬に着いた。震災後１ケ月以上も経った２月21日であった。神戸線は住吉と灘の間が不通で、その間はバスによる代替輸送であった。

多くの乗客がしていたマスク。列車の窓越しに飛び込んできたガレキの山と化した一面の焼野原。すでに、何度も新聞・テレビ等の映像で見て知っているつもりであったが、強い衝撃であった。１階部分が崩れて、２階が１階のようになった建物。その前に、ほんの数日前に置かれたと思われる花と果物。バスへの乗り換えの途中に見たこの光景は、そこで何が起こったのかが瞬時に理解できただけに、立ち去り難い思いにとらわれた。

県工の先生方や他のボランティアの方々と一緒に、配送されてくる食事の分配や救援物資の仕分けのお手伝いをさせていただいた。その合間の忙しい中を、機械科の小河先生に校舎を案内していただいた。まだ手付かずの状態の活断層の跡、液状化現象の跡、数10センチ以上もできた段差、数メートルもの深さのキレツ。これだけの作業をするためにはいったいどの位の労力がいるだろうか。自然の前に人間は何と無力な存在であるものかという事を改めて思い知らされた。

あの１月17日未明、私の住んでいる三重県鈴鹿市でも、相当強い揺れが感じられた。すぐに枕元に置いてあったラジオのスイッチを入れて地震情報を聞いた。「淡路島北部が震源で、死者も１人出ている模様」というのが第１報であった。出勤してテレビの映像を見た時、初めて大災害が発生したことを知ったのだった。

４日間、ほんの少しのお手伝いしかできないまま、野呂教頭先生に送っていただいて神戸を後にした。出勤した翌



救援物資の搬送

日も、三重では私が兵庫に出発する前と全く同じ生活のリズムて仕事が行なわれていた。私も何の違和感もなく勤務に復帰した。

その時初めて、何の変哲もない普通の生活こそがすばらしいものである事を実感した。１日も早く以前と同じ日常生活にもどられる事を祈ります。

「学校は無事なのか」

瀧　泰久（国語科）

あの日あの時、私と後輩は大阪駅のホームで、友人は阪急梅田駅のホームで、スキーの道具を抱えて、電車を待っていた。三連休を利用してのスキー旅行からの帰宅途中であったわけである。西の空が妙に明るかったことと、地鳴りがしたことを今でも鮮明に覚えている。後で知ったことだが、大阪は震度５であったらしいので、神戸と比べるべくもないが、それでも目の前で電車は躍るは、看板は落ちるはなかなかであった。

あの時、私は一人でなかったので、心細くはなかったが、学校へ出勤できなかったら、また、同僚の先生方から「スキーなんか行っているからだ」と、小言の一つも言われると、今思えば愚にもつかないことが頭をよぎった。

直後、最初にしたことは、切符を払い戻してもらったことである。ついで阪神、阪急（この時友人と合流を果たす。）となんとか出勤する算段するべく走りまわったが、結果は同じであった。神戸がどんな状況なのか、皆目見当がつかなかったのである。この時大阪駅のコンコースは、我々と同じスキー帰りの人々が多数いたが、混乱はなかった。ただ、「どうしよう。」という雰囲気が蔓延しているように思えた。

鉄道を使って神戸に帰ることを諦めた我々は、車で帰ることを考えた。幸いなことに友人が、伊丹に部屋を借りていた。そこまでたどりつければ、なんとかなる。そう考えてタクシー乗場を見てみると、長蛇の列である。だいたいタクシーが走っていないのであるから、無理もない。そこで、「いらち」の我々は徒歩で伊丹まで行くべく、国道を歩き始めたのだった。スキー道具は歩くのに邪魔なので、後輩に預かってもらって、彼には彼の勤務先で待機するように言いおいて。

運良くタクシー会社の前を通り、タクシーをつかまえることができ、伊丹には思ったより簡単に到達できた。その友人の部屋は十三階建てのマンションであったので、遠くからその姿が見えたとき、「おおっ、建っとる、建っとる。」と、妙に感動したものだが、それぐらい大阪よりも伊丹の方がひどいことをタクシーの中から感じていた。

停電していたので、仕方なく真っ暗な階段を上がって行くと、ガスの匂いが充満していた。そんな中で「煙草を吸うたらあかんで」と、お互いに注意しあったのを覚えている。外壁は新しいのにあちこちひび割れが走り、渡り廊下にいたっては、何ヶ所かが落ちていた。彼の車は無傷であった。ラッキーとしか言い様が無い。我々は、とりあえずガスの元栓と、電源を切っておくべく部屋の中に入ったのだが驚いた。彼の唯一の財産であるところの２８インチのテレビは台から落ちているし、私が貸していたワープロに至っては、１メートルもふっ飛んでいたのである。このあとの我々の行動を考えると冷や汗ものである。あの時、けっこう我々は落ち着いてるつもりであった。しかしながら、我々は馬鹿な事をした。それは、テレビが壊れていないか、確認するのにスイッチを入れてみたのである。ご丁寧にブラウン管の静電気まで「バチバチ」と音をさせて放電させたのだ。後日、神戸に帰ってから火事がおこるたびに、「ひょっとしたら自分も」と他人事ではなかった。

後輩を迎えにいくべく、伊丹を出発したのは、十時過ぎだったように覚えている。大阪・伊丹間の往復時間は三時間弱であった。豊中辺りでは、普段と何ら変わらない日常があった。ラジオから情報をいくらか仕入れていた我々は、言い様の無い怒りを覚えたものである。後輩と荷物を積み込んだ後、神戸に帰ろうと努力をしたが、南回りでは武庫川、北回りでは宝塚から先は渋滞で行けなかった。仕方なく、我々は後輩の勤務先の応接室で一夜を過ごすことにした。

家族の無事は確認できていた。しかしながら、私は一人暮らしである。部屋の様子がわからない。テレビでは、長田区・兵庫区は火事で焼け野原になりつつあるという。自分の部屋が延焼で燃えてしまうのは、覚悟していた。しかしながら、自分の部屋が火元になっていたら、と心配で仕方がなかった。この時ほど、神戸にいない自分をうらやんだことはない。まんじりともせず、テレビの画面を見据えながら、朝を待った。阪急が西宮北口まで、朝一番で動くとテレビが教えてくれたから。

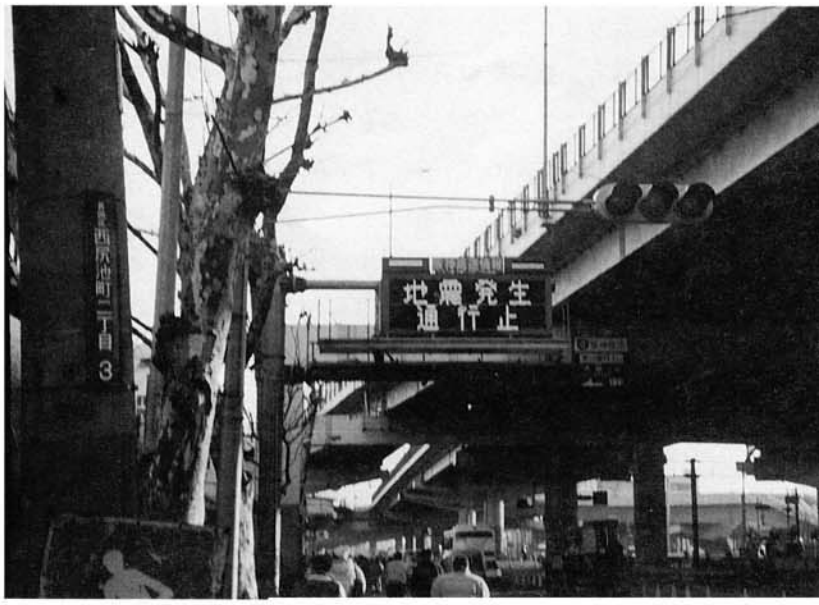
翌朝、私は荷物を友人に預け、独りで西宮から神戸へと歩き始めた。とりあえずの着替えと、必需品をデイパックに詰めて、道を急いだ。西宮から、芦屋に入ると景色が一変した。ひどいとは思っていたが、「うそーっ」という感じであった。ところが、神戸に入ると言葉では言えないほどの状況であった。ガス漏れとかで、避難してくる人波に逆らって、「学校は無事なのか。」と足が速まった。国道２号線を三ノ宮まで来ると、人通りはなく、見慣れた街と違っていた。私の傍らを、神奈川ナンバーのパトカーが重機を先導して、追い越していった。もちろん、西宮では、自衛隊の装甲車を見かけたりしていたが、「神戸は」と脈絡のないことを深層心理に持っていたせいか、今更ながらにショックであった。

４時間で学校には着いた。多くの先生方が来られていた。若くて、独身で、近所に住んでいて、守るべきものがない私なのに一日遅れたことが、「今晩泊まってくれないか。」という声に、二つ返事で答えた正直な理由である。いったん自宅に戻って、ガスの元栓と電気のブレーカーをおろし、着替えを持って、学校へ出かけたのである。

それから、４月までのことは、他の先生方の体験とそれほど変わりはない。ただ少し学校に泊まる日が多かったぐらいである。

あれから、９ヶ月が経った。「人間、明日はわからない」ということが、教訓のように思える。また、「人というものは、けっこうしぶといなぁ」という感想も持った。立ち直れそうにもないと感じた街並も、人々も、それぞれが日々の日常を取り戻しつつあるからである。

今回の地震を経験して、たとえ一つでも賢くならないといけないだろうと考えながら、私はこの筆を置きたいと思う。



阪神高速の通行止表示

「地震の朝」

久米　豊（情報技術科）

1月17日早朝8時すぎ、自家用車を使って学校に出勤しました。校舎の前の駐車場には既にたくさんの人々が集まってきていました。それらの人々の服装はパジャマ姿で、その上に早朝の寒さを防ぐために毛布を覆っている人が大半でした。今思い出しますと、その時の人々の様子は着の身着のまま自宅を飛び出し、これといった目的もなく広い駐車場を左右に歩いているだけでのように見えました。学校の上空はなぜか暗く、地震の余波が辺り一面を被っている、そんな風景でした。

私は、それらの風景を横目にみながら直ちに事務室に入りました。その時点で出勤していた職員は確か10人ほどだったと思います（里見・前田・光森・出水・前川・大熊・中井・坂上・岸原）事務室の中はご承知のように、書類ロッカー・事務机の引き出しなど乱雑に折り重なっているだけでした。坂上先生が学校の駐車場に避難してきた人々のために体育館を開放しました。これが本校の救援活動の第一歩となりました。

その後、出勤した職員で相談を行ない、管理職の先生に連絡を取ることが先決であるとの結論になりました。校長先生は学校に向かっている、との情報が入りました。教頭先生は、三重県からの出勤途上であるとの連絡がありました。事務長は大阪より車で学校に向かっている、とのことでした。管理職先生方の動向がおおよそ把握できたときにはすでに昼近くになっていました。その間職員で手分けをして、校舎の各職員室・実習室の様子を見回りました。その中で、工業化学科・理科室の薬品破損状況、その他出勤職員の所属する職員室の被災状況、校舎全体の破損状況などを、大まかに把握しました。しかし、学校としての具体的な作業を開始するまでにはいたりませんでした。管理職の先生の到着を待って本格的にとりかかろう、ということが出勤した職員の共通認識でした。この日の午前中は、今回の地震の被害状況の全体像を知ることと、兵庫区・長田区など付近の火災状況の推移などが目前の関心事でしたし、余震が続く中で職員の家族のことも気がかりであったことは事実です。午後からは里見先生、坂上先生などが管理職の先生の到着を待つこととし、私を含めて出勤した職員は三々五々帰宅したように思います。

「炊き出しとガールスカウト活動」

田中　冨美恵（理　科）

震災で、「何かせねば」、「何かしたい」と考えていた人は大勢いました。実際に活動した人は神戸市内の高校生が何人いたのかわかりませんが、一緒に炊き出しをした高校生もいたことは確かです。ライフラインのない場所での活動は始めてという人も多かったのですが、私達は長年やってきたガールスカウト活動で、キャンプ生活を何度も経験しているため、まず水の確保、食料、懐中電灯、ラジオ、電池、カセットコンロ、灯油、ガソリン等用意、何が必要かは分かっておりましたが、店先からみるみるうちに、品物がなくなり不安がつのりました。

全国から届いた救援物資が、各避難所にそのまま山積みされている事を知り、一緒に活動している高校生達とすぐに『しあわせの村』へ救援物資の整理に行きました。1月21日のことです。「誰よりも早く行動したい」「手伝いたい」という気持ちを持ち、余震の中でも活動は各自が責任を持っていたので、スムーズに動いていたと思っています。多量の食料、衣類があっても被災者には、なかなか届いていない現状で、「生ものは腐ってしまうのにどうするのですか」と係の人に聞くと、「私にはわかりません」との返事。この食料

を見てすぐに炊き出しを考えました。昼から休みの星和台小学校の給食室へ電話、心よく場所の提供を引き受けて下さり、同じように活動している星和台の自治会長に連絡し、校長にＯＫを出してもらえるように手配。１時間程して責任者が来て、「炊き出しして下さいとはいえませんが、持って行ってもらって結構」とのこと、2,000 人分のおでんの材料として譲り受けて、給食室の職員の方々の協力のもと調理し、配布先の手配をしていったのです。

兵庫工業は 1800 人避難されていたので、自治会長の森永氏へ電話し、「暖かい食べ物は大歓迎」とのことで、持って行きました。残りを水木小学校へ持って行くと「少なすぎるけど、貰っておく」と言われて悪いなあと感じましたが「順番に分けて行きます」と言われてほっとしました。どこも大勢の人が待っているのだと再確認し、気を入れ直しました。

私達は、その後も夢野小学校、夢野福祉センター、吉田中学校、下中島公園等炊き出しや、救援物資の配付をしました。大勢のボランティアの人が帰った後もがんばろうという気持ちを持ち続けて今日に至っています。今は、まだ仮設住宅へ行けない人達の話相手や子供の世話をしています。

この文を書いている時、一緒にボランティアしていたスカウトからボランティア推薦で、大学に合格したと連絡が入りました。彼女は、クラブのキャプテンをしていてなかなか活動出来なかったのですが、学校が休みになり進んで手伝いに来ていました。ボランティア活動を入試で重要視している学校も、最近は増加しているのです。

本当のボランティア活動とはどうあるべきでしょうか。誰もいなくなった時や、本当に困った時、進んで手を差しのべれるだろうか。いつまでも世話出来るだろうか等、厳しい条件を考えがちになるものです。しかし高校生なら、まず動いて感じて欲しいと考えます。「力強い若者は行動あるのみ」どんどん実行して活動して下さい。躊躇しないで、一歩踏み出して下さい。まずは身近な所からでいいのです。誰でもすぐに出来るのです。仮設住宅のお年寄りや子供達に声をかけてあげて下さい。そこからボランティアが始まります！

「震災とパソコン通信」

岡田　俊一（コンピュータ部顧問）

神戸市はインターネットのホームページで震災の衝撃的な画像を世界に発信し、全世界からの救援体制へ大きな刺激を与えたといわれている。そして、このことは、今回の震災でパソコン通信が、緊急時の情報を入手する手段として注目を浴びた。

パソコン通信への関わりの中で、学校と関係のある部分をまとめてみたい。

o 新しい情報がパソコン通信に流れる

私の関わっている Nifty のフォーラムで臨時に「阪神淡路大震災」の会議室を開き情報を集めた。書き込まれるボードには、インターネットに流された情報も転送された。そこから、被災地区で何が必要か、どのようなボランティアが必要なのか、緊急時の連絡先などの情報を入手した。私は、さっそく事務室に用意された連絡事務用のホワイトボードに張り付け、この表から必要な物資の連絡先などの情報を得た。１月 19 日の時点である。

そのほか、各新聞社が、新聞に掲載された地震による死亡者の氏名情報を公開した。本校の事務室に勤務しておられ、病気療養退職をされたＦさんが御影のマンション住まいであった。交通遮断の上、電話も通じなくて、本校の川端先生に名前の検索をしていただいたが、犠牲者の名前にはなくほっとした。また、パソコン通信ができる環境にある人用には、自分の安否を知らせるコーナーが設けられていた。

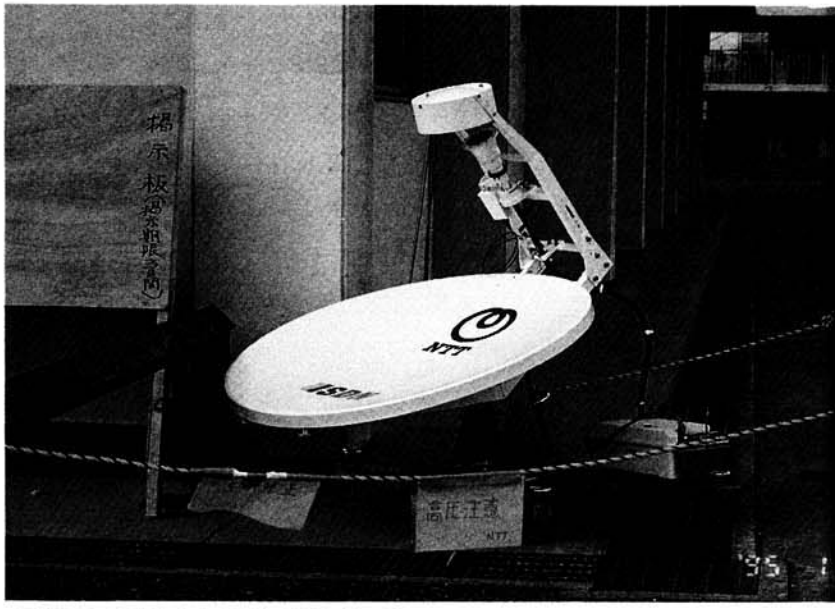
o Teens ねっとの高校生

ＮＨＫ教育では、Nifty の中に高校生専用のフォーラムを構成し、そこの話題を１年間継続して番組化するメディアミックスの実験番組の試みを行なっている。本校の生徒もこのネットに参加していた。地震の時に全国の Teens に参加している生徒が心配し、臨時にリアル会議室を開き、神戸の様子を心配していた。私は、17 日当日は、学校への交通手段がないために自宅でパソコン通信による情報を得ようとしていた。神戸市内のポイントは地震によって潰れ、そのために姫路と加古川のアクセスポイントもあおりをくったのか、電話規制のためか繋がらない状態が続いた。やっと鳥取のポイントから Nifty への接続が可能になり、Teens に入って本校の生徒の様子を知らせた。そして、鳥取のポイントが利用できる事を当時のコンピュータ部の３年生に連絡した。生徒達はさっそく無事を確認している部員の安否をリアルタイム会議室に待機している県外の高校生に伝えた。この Teens に集う生徒の中から、５人の生徒が神戸にボランティアとして入ってきて、本校の生徒との交流があった。

o　ＩＶＮの活動

ネットワーカーの震災への支援は、やがて「インターネット・ボランティア・ネットワーク（ＩＶＮ）」へと組織化されていった。この運動は、２月 24 日付の兵庫県企画部企画参事による「パソコン通信による情報提供システムの実施体制について」という協力要請になった。全国ネットの Nifty、PC-VAN、ピープルで震災関係の専用の会議室が定着し、これらを利用するために６１カ所の比較的多くの被災者のいる避難所に、パソコン通信のできる機材と電話回線が提供された。本校にも設置され、事務室横に置いて希望者に利用できるようにした。ただ、時期的に最も必要な時期がずれていたのと、操作に馴染みがなくて充分な利用がなされるまでには至らなかった。そこで、本校職員による代理アップの手段をとった。本校の避難所の必要な台所用品を八王子の方から送っていただいたり、また４月 16 日の「復興祭」の情報を流したり、炊き出しに来校された方のお礼を書き込んだりした。

この避難所のパソコン通信の操作支援ボランティアも公募されてかなりのネットワーカーが動員されたが、これとは別に兵庫県教育工学のメンバーは、県の現地本部のパソコン通信の操作方法の相談に乗るボランティアに回った。県の設備なので、同じ公務員がフォローする方がよいという配慮である。私は、兵庫区の門口公園の現地本部を担当し、学校の帰りに支援にいった。３月から始めて６月ごろまで続いたが、後半は本部へつめる各部署からの出向する担当者が長くて３日いう状態で充分にパソコン通信の技術を修得する余裕もなかった。ただ、操作に詳しい方がいるときは、必要な情報をプリントアウトして、各避難所を定期的に回る連絡員への資料を作成していた。



避難所に架設された電話回線用パラボラアンテナ

掲示板（救援・ボランティア）
※本コーナーは「5.震災ボランティアフォーラム」に移動します。
今後は「震災ボランティアフォーラム」に情報を登録するようお願いいたします。
1. 掲示板（救援・ボランティア1）　※Read Only
2. 掲示板（救援・ボランティア2）　※Read Only
3. 掲示板（救援・ボランティア3）　※Read Only　　パソコン通信による震災情報
>1
本掲示板は救援・ボランティア等に関する掲示板です。
※広く一般の方々にも情報を知っていただくことを目的として、掲示板に登録された
メッセージは、新聞、テレビ等のメディアで紹介させていただく場合があります。
予め、ご了承の上、登録いただきますようお願いいたします。なお、当該利用についてご了承いただけない場合は、その旨、メッセージ中に記載をお願いいたします。
掲示板（1:閲覧　2:登録　3:アップロード　4:ダウンロード　5:削除　6:検索　E:終了）

今回の地震に関連した情報も、パソコン通信ができる設備と知識がなければ、活用できないわけで、すべてを網羅して必要な情報が必要な人の所までいくところまで活用されるたとはいいにくい。パソコン通信に加入している大手商業ネットの人数が100万人を越えて、パソコン人口も刻々増加している中で、大きな災害が生じた場合には、有効な情報伝達手段の一つにになると思われる。

「皆と共に生活している安心感」

岡　耕一（教頭）

1月は、病院から10月末に退院して家庭療養に入っていた。1月20日には文部省の研究発表が予定されていたので、是非とも出席したいと思い毎日、出勤に備えて散歩をしたり体調の調整に専念している頃であった。1月17日早朝突然、就寝していると「グラッ」と1回目の揺れが襲ってきた。東側を頭にしていたので、続いての2回目の揺れで、上半身が半ば起きた程の大きな東西方向に揺れてこの時、常夜燈をつけていた室内照明が、消えて停電したことが判った。

あたりは真っ暗になり、それ以後の揺れにも起き出す気持ちにはなれなかった。突然、襲ってきた余りにも大きな揺れで、なすすべもなくただじっと、布団を被ったまま、しばらく納まるまで耐えていた。その間、隣の部屋の台所やリビングの家具やピアノが倒れたり、食器類がこわれる音がした。

5分ほどして、別室で就寝していた娘が気になったが「お父さん」「お父さん」という声が聞こえてきたので、「ほう」と安心した。娘は別室から、わずか8mほどはなれた私の、ところへたどりつくまで、家具が倒れ食器が壊れ散乱しているところを、乗り越えてきたためかなり時間がかかったように感じた。

今思うと靴下も履かず素足のままでよく食器やガラスの破片の上を乗り越えてきたのだと思う。ただし、傷は一つもしていなかった。同室で就寝していた妻は、照明器具の傘が落下してきたときその角が頭部に当り、軽い打撲を負ったり、洋服ダンス、和ダンスが倒れてその一部が足の上に乗ったようで、娘に取り除いてもらっていた。このような状況で一家3名が、たいした負傷もなく安全であることを確認した。

しばらく、3人で固まって余震の静まるのを待ったり、何事が起こったのか、TVもつかず、全く判らない状態でじっとしていると、窓の外もようやく白みはじめてきた。さっそく、時間を確認した。室内は、まだ暗いのでローソクを捜し出して、照明のかわりとした。しばらくすると、上の階の主人が訪ねてくれて「大丈夫ですか」と安否の確認をしていただいたときは、一人でないんだ皆とともに生活しているんだと感じ、大変安心をしたことを覚えている。

娘を戸外へ出し、何が起こったのか、どのような状況なのかとにかく、情報を得たく思った。この時点では、水が出ていたのでまず風呂の浴槽に水を張ること、窓や出入口は変形して開かなくなると大変であることから、開けておくように近所の人から教えられて帰ってきた。電話は、家具や食器の下になっているため捜し出すのに苦労した。

午前8時頃になって広島の長女や宇部の長男から安否の問い合わせが、近所の友人や親戚から入ってきた。電話は直接通じなかったらしい。幸いにも、人身の上では安全であったし、家屋もたいした被害もなく安堵した。

ただし、家具や擁壁の一部の被害に止まったのは、不幸中の幸いであった。とにかく、療養中であるため、極力冷静に行動をしてきたのが、家族に安心感を与えてきたものと思う。

ある程度状況が把めたときに、次に学校の状況が大変心配になってきたが、電話は不通、交通途絶の状態で、ただTV等からの情報に頼る方法しかなかった。この間学校では避難所としての対応や職員・生徒の安否確認等に大変な状態であ

った事を知らされた。療養に専念しなければならない時期であり、職員として何等貢献できなかった事を大変残念に思っている次第である。

「12時間の通勤」

事務長　小倉　義明

1月17日午前5時46分・その時私は、テレビを見ながらの茶漬の朝食・ホームコタツで突然飛び上がる衝撃・茶碗を落とすまいとしてお茶を手にかぶった。一瞬納まったかのように感じた次の瞬間、大きな横揺れ・右に左に前、後ろにとコタツに座ったままでどうしょうもなかった。

居間の4隅の柱が、大きく揺れては戻る繰り返し、序々に強くなる横揺れは、部屋が瞬間的に菱形のように見えた。閉めていたはずのガラス戸や襖は、柱との間に20数センチほど移動し、次の瞬間柱が揺れて倒壊するかと感じた。神戸から50数キロはなれた寝屋川市の自宅でのこと。地震直後、壁は、屋根瓦はと、家の周辺を見回った。幸い大きな損傷もなしと自己満足。すぐ出勤の準備をする。

5時50分ごろには、NHKテレビの速報が出て神戸だけが不詳のままで、大阪震度4と報じられていた。

いつも、一部高速道路を利用する車通勤の私は、この地震のため道が混ではと、早い目の6時前には、家を出発していた。全くこのような大惨事が起こっていようとは予知もなく、普段通りの服装である。自宅を出てすぐ、ラジオ放送で十三大橋段差が生じ、通行止であることを知り、迂回経路を通り尼崎市を通常時間と変わらない時間で通過。しかし、武庫川周辺では、2号線、43号線大渋滞、旧道への抜け道も動かない。とにかく西へ、神戸へとの思いで南北の空いた道を行ったりきたり、家を出発して4時間ほど経過していた。この間、学校・自宅へ連絡をしようと公衆電話の行列に並んだ。「回線が込んでいます・・・・・」の繰り返しである。10時頃連絡ができた事務室は、事務職員でなく、教員が応答。少ない人数で対応している様子が受話器を通じて聞こえてきた。現在地とあと2時間ぐらいと伝え、何人で外部と連絡しているかなど確認、当面の対応お願いして通話を終えるが、それ以降、学校の状態が気になり一時も早く着きたい念に駆られた。2号線夙川の大橋では、大きな段差が生じて通行不能、無理に歩道に割り込む車に続いて通過し、家屋の崩壊している旧道など経て、43号線芦屋を通過し、神戸市東灘区の高速道路の倒壊現場横に差しかかった。午後1時頃だった。橋脚は、コンクリート部分が弾け飛び太い鉄筋が引きちぎられた様が目に飛び込んできた。地震という自然の凄さを実感させられた。

ここで、大阪方面からの応援の消防車の緊急自動車を通過させるため道を譲ることになった。3時間余り規制にしたがったが、我慢できずに1台、2台と進みだし規制区域を突破した。その後は、灘区内では、道路の損傷、家屋の倒壊も凄く、いたるところで道路を防いでいた。また、電柱のほとんどは、倒れていて、電線は垂れ下がり、通行可能な道路などない中を無我夢中で進み、思い出せないほどの迷路を通過した。

三宮に差しかかったときには、めっきり暗くなっていた。神戸駅の周辺一部が明るかったように記憶するが、暗がりの町を突っ走った。校門を入ると校舎にも、植込みの街頭にも点灯されている学校施設を目にして、言いようのない安堵感で胸が一杯になった。

こうして、12時間の通勤の度を終え、事務室に到着した。午後6時になろうとしていた。

「ボランティアに関する考察」

斎藤　亨（体育科）

今回、日本中からいろんな形のボランティアが神戸に集結してきた。過去にボランティア経験のある人や、全くのボランティア初心者など多数の方々が自発的に行動をおこして、自分の意思でやってきてくれた。とてもありがたい事である。ＴＶの映像で惨状を知り、理屈なしに行動を起こした人間の心のエネルギーを感じる事ができた。もちろん地元のボランティアの数が最も多いのは当然である。目の前で起こった事に対して、黙って見過ごしていられるほど人間は性悪ではない。

ボランティアの専門家という人は、ごく少数しか日本には存在しない。青年海外協力隊やシルバーボランティアなどがその対象に考えられるが、青年海外協力隊にしてみては２年という任期が基本的にはあり、それを終えると実社会の一員として、給料を得るなんらかの職業に就くため『期限つきボランティア専門家』と言えるかもしれないし、シルバーボランティアに関しては余暇を利用して定年退職後の活動と言うことができる。このような少数派を除いて、ほとんどは普通に生活していた人が何か働きかけする『場』ができた時「ボランティア」に一時的な変身をするのである。ボランティアを自分の給料を得る『仕事』として考え、それが成立するとなると、それはもうすでにボランティアではなくなる。また労働に対する代償は相手に対して求めず、まして相手が喜んでくれないからと怒ったり、すねたりすることは本末転倒である。相手がいて初めて働きかけのできるのがボランティア活動であるため、この点から考えると、ボランティアには「相手からの代償を求めない行為」という定義が成り立つように思う。

海外でのボランティアとして、青年海外協力隊(Japan Overseas Cooperation Volunteers) での自分の経験をふまえ今回のボランティアとの相違点を考えてみる。

	青年海外協力隊	阪神大震災ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ
行く先	海外の未知の国	日本の神戸
現地の状況	恒常的な不都合状態	日常生活が崩れた状態
初期参加意識	有する者が無き者に与える	無くした物を補ってあげる
期　限	２年、自由な帰国不可	自分の都合優先
障　害	言葉、食生活、文化、宗教、環境	(学校)・衣・食・住など
身　分	外務省管轄での派遣	現状のまま
金銭面の補助	１か月９万円の国内で積立金	なし
終了後の措置	就職ガイダンスなどあり	なにもなし
目　的	相手側への技術移転	復興への手助け

このようにして見ていくと、同じボランティアでありながら様々な点で違いが見られる。協力隊の方は、職場を辞めたり休職したり（休職させてくれる企業はそう多くはない）しなければ参加できず、ある程度の社会的な踏ん切りをつける必要があったり、わざわざ派遣前に３か月もの訓練（語学学習など）をつまなくてはならないため派遣され現地に着いた時には、かなり意識過剰な状況になっているのは確かである。「これだけのことをしてきたのだから」と、相手に代償として求めるものがあっても仕方がない。「自分が努力して準備してきたのは全てここの人達のため」と、相手が「ありがたがってくれる事」が当然なものとして頭の中にはある。お金とかいう俗物的な代償ではなく、もっとやっかいな、一方的お仕着せに近いものでありながらのそれに対する精神的見返りである。また、ある程度の技術を持っていないと、行ったところで役に立たないし、準備段階が長いためボランティアに対するある種の『自信』をもって現地に到着するのが青年海外協力隊である。

そこから始まった協力隊活動は、最初の１年ほどにも渡ることのある混迷期をくぐりぬけ、上から下への援助という構

図からぬけだし、現地の人々の視線と同じレベルから現地を見れるようになった時、初めて効果的に遂行されていくというパターンが多く、そこで自分自身の協力体活動への意味づけがなされる。

一方、阪神大震災ボランティアには、最初そこまでの思いあがりはまずない。微力ながらでもなんらかの役に立つことができたらと、体一つで行動を始めた人がほとんどであり、ボランティアも初めてなので自信はなく、失敗も多い。それゆえに時間の経過と共に円滑に動けるようになると、自分の行動が役に立っていると実感できる瞬間が、「ありがとう。」という相手からの言葉で得られるようになる。

実生活で自分の存在が誰かの役に立っていると実感できる瞬間はそうあるものではない。会社内での業績であったり、テストの点数であったり、自分の努力の結果はそのようなものでしか自分では確認する事ができない。それが、今回のような場合、自分の行動で誰かから「ありがとう。」と言われ、誰かの役に立っている、と簡単に実感できる瞬間が数多くあったのである。まさに自分がこの世に存在している意味づけとでも言えるような瞬間であった。いずれにせよ自発的ボランティア（学校などの授業ではない）を経験した人間がこれほど多数産まれたことは今後の日本にとって貴重な財産になるに違いない。他人とのかかわりあいが稀薄になり、一人でも生きていけるような錯覚さえ起こしてしまうような現代で、自分の存在価値を確かめた人は、なんらかの内なる変化を起こし、行動していくに違いない。困っている人に対して自分の手を差し延べ、それが相手に感謝された時の心の潤いは、またこの様な心になりたいがために次ぎなる行動につながる。そのような中では、もし自分が逆の立場だったら、と言う事を考える瞬間があるかもしれない。なにも難しいことではない。困っている人に手を差し延べることは「その時はきっと自分も感謝するだろう。」となれば、ますます博愛に似た心の変化が生じてもおかしくはない。

もう時間が過ぎてしまって、阪神大震災が過去の事になりかけていても仕方ないことかもしれないし、自分の周りで大きな被害もなければ他人事になっても仕方ないことなのかもしれない。しかしながら、最初にも書いたように、目の前で起こった惨事に対して無視できるほど人間は性悪ではない。それは今回のボランティアの数を見ても明らかである。何年か経ち、ボランティアの手を借りなくても大丈夫な状況まで復興した時、ボランティアの人々の仕事はなくなり、自分の存在価値を簡単に実感できる時間もなくなる。その中から幾らかの人々がまた、自分の力が誰かの役に立ち、喜んでもらえることに自分の存在価値を見出だしたいがために、ボランティアに参加しようとするかもしれない。その場が日本であるか、海外であるかはその人の適性と条件などから違いがあるかもしれないが、日本以外の国々に対するボランティアの数で考えると、震災前の本当のボランティア経験が無かった時と較べ増加する事は十分考えられる。

「大切なものに触れた大震災」

村松　順二（第３学年主任）

私たちは今回の阪神大震災で、大地が息をしていることを改めて知り、忘れていた自然に対するおびえを呼び起こされました。そして、私たち人間が再び謙虚にこの自然と共存し始めるには、あまりにも過酷な災害でありました。

6,000 人を超える死者が出ましたが、本校の教職員及び生徒が誰ひとりとして命を落とすことがなかったことに対して、感謝せざるを得ませんでした。家が全半壊、全半焼した生徒は全体の３割を超え、また、両親とも亡くした生徒が１名、片親を亡くした生徒が３名おりました。この生徒たちのことを考えると、私たち教師ができる力がいかに小さなもの

であるか思い知らされました。今思い返せば、あの頃の私たち教師はその生徒達に対する思いを、本校に避難されている被災者の方々へのボランティア活動に向けていたようにも感じられます。生徒に対して私たちができることを考えても、実際に生徒は登校してこれない。でも誰かの役に立ちたい。そういう教師が集まったからこそ、24時間体制で2,000人を超える避難所を自治会と共に運営していけたのだと思います。

地震翌日より担任が中心となり、生徒の安否の確認に全力を傾けましたが、丸一日費やしても100人以上もの生徒が確認できませんでした。電話だけの作業では時間だけが過ぎ、思うように確認が進まないために、リュックを背負い、自転車または徒歩で現地に探しに行く先生が出始めました。そのようにしてでも、5日目においてさえ48名が不明のままでした。その大半は長田区と兵庫区に住む生徒で、あの全壊全焼の信じられない情景を見ているだけに、頭の中でまさかと思っては否定し、テレビの死亡者名に生徒の名前が出ていないのを見ては、ほっとすることの繰り返しでした。そんな中、事務室に未確認の生徒から電話が入った時は、ほとんどの先生方が早く連絡してこなかったことを強く叱ってしまいました。しかし、後で無事の報告をする際、目が潤んでいる先生を見たものでした。こんな時でないと、私たち教師がいかに生徒を愛しく思っているか感じられないとは悲しいことだと思いました。

私はバイクで通っていたため、何度か生徒のいる避難所に立ち寄って帰りました。家を失った生徒を勇気づけようと立ち寄ったはずの私が、「先生、俺大丈夫やで。先生こそ身体に気つけてがんばってや。」と言われ、逆に励まされました。自分の家が大変なことになって気が滅入っているはずなのに、私の身体のことを思ってくれる生徒が愛しく思われ、周りに人がいなければ抱きしめたく思いました。また、ある生徒は避難所に届いた救援物資をあまりにも一生懸命に運んでおり、その健気な姿を見ていると涙が出てきて止まらなくなりました。目が赤くなった私は、近寄って声を掛けることができず、結局何も話さずに帰ったこともありました。この生徒は、提出物がルーズでよく教師に叱られている子です。生徒は学校の外では、私たち教師が知らない面を持っており、一人ひとりみんながすばらしい可能性を持っています。私たちは、彼らがそのすばらしい面を、どこででも出していけることを信じ、彼らの成長を愛情を持って見守っていかなければなりません。

新年度の教科書購入に際しては、代金を用立てできない家庭が出てくることを心配し、奨学金が振り込まれる6月まで支払いを猶予してもらえるよう書店にお願いしていました。しかし、実際にこの援助を受けたのは全学年で1家庭だけでした。家が全壊全焼しようとも、親は我が子のためには何としてでも勉強する準備はしてやりたいと強く思っておられることを改めて知りました。この親の思いを私たちは真正面から受取り、それに答えられるよう鋭意努力していかなければなりません。

神戸において、すばらしいボランティア活動が発生し、本校生徒も様々な分野で参加しました。毎日、困っている人に手を差しのべる心に直に触れ、本来人間が持つ温かさを感じ、すべてのものを大切にして生きていくことを学んだことでしょう。また、今あるもののすばらしさにも気付いたことでしょう。私たちは、生徒達がこれらの体験をとおして、意識を神戸から日本、そしてアフリカ等の世界各地で困っている人たちにも向けられる、優しくてすばらしい人になってくれることを強く願っています。

「５時４６分の一瞬のために」

中田　榮治郎（機械科）

当時、姫路工業高等学校に通勤していた私の生活のリズムは、朝５時に起床して５時55分には家を出ることでした。いつもであれば仏壇に光をあげて、慌ただしく出勤するのですが、１月17日はなぜかその日に限って寝ぼうをして、起床と同時に「毛利ちよこ」のラジオを聴きながら食事をしてから、トイレに足を運びました。

トイレに入ると同時になにやらゴーという地鳴りがして、突然上下の大きな揺れが襲ってきました。電気も瞬時に消え私は周りの状況が分からないまま、トイレから必死に出ようとしていたことは覚えています。おそらく稲光だと思うのですが、戸が曲がって床が波うっているのと、天井が落ちてきたのと、数コマだけのモノクロ写真のような光景だけが鮮明に記憶の片隅に残っております。そして暗闇の中で土間に叩きつけられるように弾き飛ばされてからはどれほどの時間が経ったのかは記憶がありません。

ふと気がつくと、天井が被いかぶさって身動きがとれないことに気がつきました。私の両親は、２階で寝起きしていたのですが私の頭のすぐ上で騒いでいるのが聞こえましたがどうすることもできません。夢中でもがいている間に挟まれていた両足に緩みができて、スボンがスルリと外れるとすこし体が自由になりました。天井を破り、屋根を押し退けて、瓦の間から体の上半身が外に出てきたときは、なにか爪先から熱いものが体中を駆け巡ったのを覚えております。「おれは生きているぞ」と叫びたい衝動にかられていました。

すでに多くの人が脱出をしていましたが、周りは泣き叫ぶ声に混じって、「助けてくれ」「頑張れよ」という声と「わー」とも「ギャー」ともなんともいえない声が聞こえていました。阿鼻叫喚の地獄とはこのことを指すのでしょう。

それからのことはよく覚えております。とにかく家族を助けなければと鉄格子を壁から引き離し、雨戸をはずして両親を助け出して、妻を助けだした頃には太陽は高く、周りは明るくなっておりました。

ようやく落ち着きを取り戻してみると、自分が全身怪我だらけで、手足から血がしたたり落ちているのに気がついてはじめて痛みを覚えました。私が先ほど寝ていた布団の上の枕は、２階の梁が落ちてきて煎餅のようにぺっちゃんこになっていました。姫路工業高校に通勤中だったら、今ごろはどうなっていたのかと思うと今更ながらゾクッとします。向いの奥さんも一軒となりの御夫婦も、斜め向こうのおばあさんもそして近所の人が11人もタンスの下敷や梁の下敷になって亡くなりました。

京都にいた長男がその日の夕刻に到着をして、「お父さんは２年間、姫路工業高校に毎日朝早くから出勤していたけど、全てがこの日の５時46分の一瞬のためだとおもえば、お父さんは強運なのだ。」と言ってくれたとき、その日初めて目頭に熱いものが溢れてようやく人間らしい気持ちになれました。人間の生死、運不運を分けたものがなになのかとつくづく思い知らされた一日でした。

その後、人々との出会いで学んだことは、人の心の優しさと勇気です。自分の生命も省みず人命の救助に当たってくれた見ず知らずの若者、事故の危険を堵して食料や水を船で運んでくれた同僚、無償で住宅を貸してくれた下宿屋の奥さん、展示している自動車を信用貸ししてくれた自動車会社の社長さん。不眠不休で復興に当たってくれた技術者。この出会いで知った人の優しさと勇気に学びながら亡くなった人の分も強く生きよう。生きていて本当に良かったと思えるような生き方をしようと思っています。

「ボランティアを考える」

井浪　謙祐（2年）

1月17日5時46分、阪神・淡路に悪夢が起こった。その時私は、家で寝ていました。「ガタガタガッシャン。」という音にびっくりして起きました。目を開けるとまっ暗で何も見えず、バッと立ち上がったら余震がきたのでふとんの中にもぐっていました。手さぐりで近くにあったラジオをとり聞きました。すると聞こえてきたのは、「ただいま阪神地方に強い地震が起きました震度は5と思われます。」という言葉でした。だんだん明るくなり家族でおたがいの安否を確認し、僕は近くのおばあちゃんの家に急ぎました。その途中で見た物は、大きなビルが倒壊している所とか2階が1階になった家など、さらに空には長田区の方から上がる煙、なんか戦争でも起きたのかと思うほどひどい状態でした。おばあちゃんの家に行き安否を確認した後近くの友達の家に走りました。友達の安否を確認した後近くの家を見るとほとんどが全壊でした。その家の前でボーと立ちつくす、老夫婦、泣き叫ぶ人など言葉に表せないほどの光景でした。それから家に帰り食料の買い出しに走りました。どこのコンビニも人だかりができていて、10軒ぐらいまわって買えたのはお菓子だけでした。それからハーバーランドのダイエーが営業していると聞いて行ったらすごい人で3時間近く並んでやっと入れました。ボンベなどを買った後家に戻り家の片付けをしました。食器はほとんど割れました。片付けを終わってから、水をくみに学校まで行って帰ってきました。くみに行くのはかなりしんどかったです。1月17日から4日たった21日、親戚の家に行きました。地震前は50分ぐらいで着いていたのが3時間以上かかりました。地震で都市のライフラインがこれほどマヒしてしまうとは思ってもみませんでした。それから神戸に戻ってきて、ボランティア活動でもしようやないかという気持ちになり近くの僕の出身校である兵庫中学に行きま

ボランティアによる炊き出しの準備

した。そこでは、食事の用意をしたり本部の受付、救援物資を倉庫に入れたり、自衛隊の風呂の当番などいろいろなことをしました。パンやおにぎりなどの食品もはじめは、賞味期限が切れても、固くなっても配っていました。それしか配る物がなかったのです。しかし物資が増えてくると賞味期限が１日でも過ぎたらどんだけ余っていても捨てるようになっていきました。その時僕は人間とはなんてぜいたくな生き物なんだとつくづく思いました。

また、ボランティアの人たちと一緒に服を配っていたら、避災者の人たちに「おまえら、ボランティアがええやつをさきにとっとんちゃうか。」と言われた時には、とても腹が立ちました。なんかこの地震で本当の心の中を見たという感じになりました。

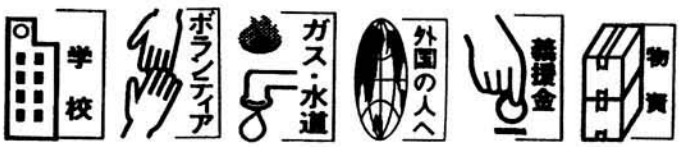
けれどもいいこともありました。それは、自衛隊の人と仲良くなったことです。自衛隊の人はみんな優しくいろいろな話を聞かしてもらったことが何よりもうれしかったです。およそ２ヶ月間続けたボランティアで思ったことは、人と人とのつながりが一番大切だと思いました。

最近は、マンションに住んでいる人が隣に住んでいる人の顔も知らないという状態だったのがこの地震で近所同士が助け合ってきたといいます。これは本当にすごいことであると思います。僕は、この地震で忘れていた何かを思い出したように思います。

「震災の時おもったこと」

高田　喜美子（２年）

阪神大震災が起こってから半年が過ぎました。あれ程大きな災害が起こったとは未だに信じられない時があります。震災が起こったあの日のことは今でもつい昨日の事のように思い出せます。１月 17 日の早朝に起こった大地震、あの時、本当に死ぬかもしれないと生まれて初めて死に対する恐怖を感じました。あの日から地震に対する恐怖は頭から離れないけど、私はあの震災からたくさんのことを教えられたと思います。震災の当日、家にいなかった父の代わりに、いつも、わがままを言う弟が、とてもしっかりして男らしかったこと。地震で起きた火事を近辺の住民全員が川から水をくみあげてバケツリレーで消火作業をしていた姿が朝日を背にとても美しかったこと。数 10 分前まで全員が死に直面していたのに今は火事を収めるために全員が協力している。川の水だって相当つめたいはずなのに。私はあの時、人間の強さを見たと思います。普通なら電話一本で駆けつけてくれる消防車も、災害時には電気は停電、道路は遮断され、火事もあちこちで起きる、そんな時消防車が何の役に立つのか。自動車でさえ通行できない道路、電源がなければ動かない機械類は何の役にも立たなかった。ああいう災害時に何より役に立つのは周りの人との信頼関係、自分自身の判断力だと思う。それも震災などの困難を通して自然とできていくと思います。震災が起こって私たちの暮らしは電気や水道がなかった昔の時代に戻ったと思う。昔の人達はそういう暮らし方をしていたのなら私たちにできないはずがない。そして、ぜいたくな生活よりも無事に友達と再会できた喜び、家族のみんなが生きている、こんなあたりまえのことことがどれほど幸せだったか、生きることの原点に返った気がしました。今は毎日、家の周りから工事のする音が絶えません。それは今、みんなが目指す復興の音だと思います。



神戸新聞救援情報シンボルマーク

「ボランティアと私」

田中　蔵善（３年）

目を開くとつい数分前とは部屋の様子は大きく変わっていた。飛び出た本、テレビ、その時は気付かなかったが、今思うと非常に大きな揺れだった。避難所への道中見たものは、長田南部の大火災の始まりの火柱と煙だった。夜になりおにぎりをもらった時、テレビで見たような被災者になったことを自覚した。ラジオを聴きながら、長田や兵庫のクラスの人がもしかしたらと思った。そして僕もだれかに心配されていたのだろうと思う。

数日後、担任の先生と連絡がとれて、見に行ける友人の所へ行くことにした。そして初めて長田南部を見た。焼けこげた道路・建物、臭い、今まで見たことのない光景だった。特に印象深かったのは、完成したばかりの会社の大きなビルが傾き、そして壊れていたことだった。

そしてこの震災で多くのことを学んだ場は、避難所での生活だったと思う。長い間の集団生活は人と人との間で多くの問題を生んだ。協力的な人は救援物資を運んだトラックが来るとすぐに手伝いに行き、非協力的な人は手伝いもせずに、配付の列を作って、ただ待っていた。このようなことが長く続き、どうしても両者の間には壁ができてしまっていて、気まずい時期が長く続いた。そういう時期が続いた中、岡山の美作から一週間、毎夕食をしかも暖かいものを用意していただいた。冷めた体と心には本当においしかった。

このボランティアには心を打たれたものが多かったのか帰られる時には避難所の大人と先生方全員が涙で別れをしていた。これを期に人々が和み、避難所が明るくなった。こういった体験から得たものは、人と人とのつながり、そして日頃からのコミュニケーションの大切さだと思いました。

「人の優しさにふれて」

上田　努（２年）

今、僕は友達の家にいる。同じクラスの青木君の家だ。今は７月だから約半年間居候させてもらっていることになる。青木君の家に来る前に２週間ほど親戚の家に住まわせてもらっていたが、そこでは、家の人が外国に避難していて、僕一人で住まなければならなかった。

当時は水、ガスがこなかったので、風呂にも入れず、食事も作れなかった。でも、地震当初の事を考えると、屋根があるだけましと考えていた。そこからの登下校は、学校からもらった自転車があったが、朝夕の食事が大変だった。毎日カップラーメンばかりだった。お金の方も大変だった。

そんなとき、青木君に声をかけられた。すごくありがたい申し出だったので是非とお願いした。はじめは緊張していたが、青木君の家族の優しさにふれ、次第に打ち解けていった。ここでは、すでに電気、ガス、水道すべてが通っていた。また、地震のことを忘れさせてくれる唯一の空間だった。青木君のお母さんの料理はおいしい。やっぱり家庭料理はいい。インスタントラーメンなんかと違って栄養のバランスもとれている。まさかこの年で栄養のことを気にするとは思わなかった。おじさんも出張であまり会わないけれど、いい人だ。

青木君の家族は、おじさん、おばさんと、男３人女１人の６人家族だ。今はおばあさんも避難してきているので７人だ。ここの家は、人数が多いのでいつも声が絶ぎれることがない。とくに青木君の弟と妹、この２人がおもしろい。こんなに楽しいので、地震後の辛さが薄れていくのが自分でも分かる。でも、週末に親戚がいる京都に帰るときは、電車の窓から見える町並で思い出す。周りの家々がまだ壊れたままのように僕の家もまだ建っていない。完成すれば、僕は青木君の家を離れるが、ここの人たちに教えてもらった人の優しさは、いつになっても忘れないと思う。

「震災でわかったこと」

山根　由紀子（３年）

朝起きてごはんを食べて学校に行く。授業を受けて部活行って家に帰る。夜、ごはんを食べてお風呂はいって寝る。それが普通の生活。

１月 16 日、午後７時か８時くらいに震度３の地震がおこったとき、なぜか無性に怖くなって友達に電話した。そのおかげで怖くなくなって、明日の家庭科しんどいなあなどと考えながら寝た。妙に寒かったからパジャマの下にタンクトップを着ていた。

今思えば、妙に怖かったのも、寒かったのも、人間の本能的なもので地震を感じとっていたんだろう。とにかく１月 17 日午前５時 46 分、阪神淡路大震災が起こり、それまでの私の普通の生活があっというまにくずれさった。

電気・水道・ガスは当然止まり、何をするにも不自由で、夜になると真っ暗闇で何もできない。朝起きて顔を洗うのもままならない食べ物も近くの小学校でもらってきた物を食べる。昼はくずれた家の中に入ってまだ使えそうな物を出す。そんな生活を経験して、いかに今まで普通だと思っていた生活があらゆるものに支えられて成り立っていたもので、人はそれが当たり前とその生活に甘えてくらしていたかが良くわかった。

それともう一つわかったものがある。人は他に人がいないと生きていけないということ。近所の人がいなかったら姉は死んでた。家族がいなかったら怖くてたえきれなかった。友達がいなかったらさみしくて明るくふるまうなんてできなかった。私もあらゆる人に支えられて今生きているということがわかった。

もう今は、震災前に普通の生活といっていた生活になっている。けれど、またその生活に甘えて、地震のことをいい意味でも悪い意味でも忘れつつある。今の生活を支えているのも、自分自身を支えてくれる人に対する感謝を忘れてはいけないと思う。

「神戸市立西市民病院４階」

佐藤　弘昭（３年）

1995 年１月 17 日（火）午前５時 46 分、神戸市立西市民病院４階 455 号室のベッドから落ちた。真っ暗な中、ものすごい揺れと音と悲鳴が耳に響いた。自分は立ち上がろうとした時、窓ガラスが目の前に落ちてくるのがわかったので、とっさに椅子の上に置いていたコートを頭からかぶった。同時にスプリンクラーが作動していたのかその辺が水びたしになって、自分もびしょ濡れの状態で恐さと寒さで震えが止まらなかった。こんな事をしていてはいけないと思い廊下に出た。

目の前のナースステーションがなくなっていた。看護婦さんを呼んだが、震えて泣いていたので、「看護婦さんが泣いとったらどうするねん」と思わず叫んでいた。「逃げ道を探してくるから、看護婦さんは動けない患者さんを見てきて」と言って１つ目の非常階段を見に行ったが階段がなかった。２つ目の非常階段は何とか通れるようなので病室に戻って先に歩ける患者さんを誘導して１階まで連れて行った。次に動けない患者さんを車椅子に乗せて階段の前まできたけど、一人では降ろせないので誰かを呼びに行こうと思って１階まで行ったところ既に救急のケガをした人達でいっぱいだった。その付き添いの人にたのんで手伝ってもらった。４階の患者さんは１人を除いては無事だったが、その１人の患者さんはショックで亡くなりました。

若い患者は自分しかいないので、守衛さん２人と自分で上の階、５階へ行ったが５階が消えてなくなっていた。声をかけたが返事がない。院内放送で「５階の看護婦さん、聞こえたら声を出してください。」という放送があった。けれど返

事がないので全員だめかと思ってゾッとした。よく見ると５階の半分が６階になっていた。５階をあきらめ、さきに６階の人を助け出そうと思い守衛さんと６階のナースステーションに行ったが、看護婦さんがいなかったので病室を見に行った。６階は重傷患者が多いので点滴をしていたり、酸素吸入をしていたりする人がほとんどなのでベッドに寝たままで階段まで連れてきたが、５階と６階との段差があったのでベッドマットや毛布などをクッション代わりにして１人１人すべり台のようにして降ろした。

１階の方は救急のけが人でいっぱいだったので２階の方に避難した。時間にしたら４時間位経っていたと思う。５階の人を助けるためにいろいろな手段を考えたが自分達では助けることはできないので自衛隊を待つしかない状態だった。結局、自衛隊が来たのは午後３時頃だった。

１階では次々にけが人が運びこまれるが、お医者さんがけが人の数に比べ少なすぎて、治療もできないまま死んでいく人達がたくさんいた。自分が見ていて１番辛かったのは，４～５才の子供が運びこまれていた時は泣いていたのに５～10 分位したらぐったりしてきて，子供の泣き声から家族の人の泣き声に変わったことだった。死んだ人を目の前にして思わず目に涙があふれ出た。

ロビーの床には治療もされないまま死んだ人が１人２人とだんだん増えていき、足のふみ場もないぐらいになった。現実とは思えない光景を目にした。家族の人が迎えに来た入院患者は連れて帰ってもらうようにと言われた。自分も家に電話をしたが電話が通じなくてどうしようかと思った。今度大きな余震がきたらここもどうなるかわからないということで，動ける患者は近くの学校に移るようにとのことだった。自分は昨日自転車を家から持ってきていたことを思い出した。なぜ自転車を持ってきたかというと、最初は１ヵ月で退院する予定が長引きそうなので主治医の先生から病院から

５階が潰れた病院。佐藤君は４階の病室にいた。

学校に行ってもいいという許可をもらったので、１月 19 日に一度学校に行ってみて自転車の通学許可とかを聞いてみようと思って、１月 15 日に教科書などを病院に持ってきたとこでした。病室は危険やから行ってはいけないと言われたが学生服と教科書の何冊かは持ち出せたが全部は持ち出せなかった。

その日は主治医の先生が見当たらなかったので，知っている先生にこれからのことと，帰ることを告げて帰ることにした。仲のよかった看護婦さんやその辺にいた人たちが食べる物をくれました。「気をつけて帰るんやで、また会えたらいいのにね」と当分の薬をもらい自転車で垂水の方へ向かって走ることにした。病院を出たのが午後４時 30 分頃でした。一歩外に出てみると道路は車が多くて、救急車が病院に入れなくて何台も並んでいる状態でした。けたたましいサイレン

の音と車の長い列でみんなパニックを起こしていました。自分は早く垂水まで行きたくて必死に自転車をこいでいたので、どこを通ったかははっきり覚えていないが、家が傾いたり、既に火の手がまわって家が燃えているのを目の前にしてこれが現実なのか夢なのか、いつかテレビで見た神戸空襲の場面に自分がいるように思えてきた。道がふさがっていて今どこにいるのか分からなくて何回も同じ道を通ってしまった。どのくらい走ったか須磨の水族館が見えてきた時は足がガタガタで、自分の家がつぶれてはいないか、家族は無事でいるのだろうかと思いながら自転車のスピードを上げた。滝の茶屋まできたとき電話ボックスがあったので家にかけたら、やっとつながってみんな無事だった。急に安心したせいか力がぬけて自転車をこぐことができなくなってしまったので迎えにきてもらった。家の方でも電気がついてからテレビを見て西市民病院のことが映っていたので、心配で連絡をとっていたそうですが、連絡がつかず病院の方に行こうかと思っていたところだったそうです。

やっと家にたどり着いて時計を見ると午後７時頃でした。テレビを見ると西市民病院が映っていた。自衛隊の人達が救助して１人２人と運び出されるのを見て拍手をした。最後の１人は自分の病室のちょうど上の人でしたが助かりませんでした。助かった人達はベッドの両横にさくがあったので、そこに隙間ができていたので助かったそうですが実は自分は片方のさくを取っていてベッドから落ちたのでけがもせずにすみました。もし、ベッドから落ちなくて寝ていれば窓際だったので、窓ガラスとテレビがベッドの上に落ちていたのでけが、または死んでいたかも知れません。

今まではさくをはずしていたことがなかったのに、なぜか16日の寝る前にさくをはずして寝たのです。今になって思うと何かに助けれられたように思います。テレビを見ていて被害者がどんどん増えてきて、死者の数も考えられないほどに多くなっているのにテレビの報道や政府の対応の仕方にいらだちを覚えました。報道の仕方にも本当に被害者が知りたいことを伝えているとは思われなかった。この震災で，人と人とのつながりや助け合いとか人の優しさとかを見て，いろいろなことを学んだような気がします。亡くなった人達は本当にかわいそうに思います。しかし、悲しんでばかりいられない、神戸の町の復興を願い、家が焼かれてなくなった人達が１日でも早く安心できる生活になるように願わずにはいられません。震災前からも思っていたことですが、自分は将来医療関係の臨床工学士の仕事につきたいと思っていたので、こんなことがあってからは今まで以上にこの仕事につきたいと思うようになりました。

「生命の保護・提言・謝辞」

森永　実（前 本御崎自治会長）

生命の保護

私共の日常生活は、家内が４時 30 分に起きます。弁当、朝食の準備、私と娘「次女」は５時に起きます。朝食を済ませ出勤するために腰を上げたときでした。お母さんが地震と言う声と一緒に体が私の方に飛んできました。ものすごい揺れと金属音、命の危険を直感したのがこの時でした。私は冷蔵庫を支え、ガスレンジを押さえ倒れるのを防ぎながら、大声で家族４人に適確に防護の指示を与えておりました。「第１に頭部、第２に心臓部分」机の横で布団をかぶり身を寄せる。またテーブルの下に上半身を入れることです。

地震の揺れも収まり、私は全員にその場を一歩も動くなと指示し、懐中電灯を探し、靴を履き家族全員の靴を手渡し、玄関の扉をカナヅチにて上中下と約百回程叩き、やっと開けることができ、家族全員救出できた安堵感がありました。

私は自治会長です。次には 327 世帯の救出作戦です。その

ときお願いだから行かんといて、心細さで震えた妻の声「会員の方が私達の救いの手を待っているんだ。家族のことは頼んだよ。」家族は理解してくれているはず、自分を責める気持ちはなかったです。約 10 時間救出活動をし、ある人は病院へ、又応急手当。その時でした、全員無事の安否確認がとれました。相談役 25 人全員大の字になり、わずかに休憩し、今度は飲料水の確保に暗くなっている地下上水槽の汲み取り作業に約 3 時間「1 世帯当り 100 ㍑」の飲み水を配り、夫々避難所又親戚、友人宅と重い足をひきずり歩いて行く姿に覇気を感じませんでした。

私は 1 月 19 日早朝より県立兵庫工業の被災者の責任者として指揮を行なうことを決心し、直ちに学校側と接点を得ることと、体すべてが傷だらけの避難者と裸の付き合いを求め、皆さん方の代弁者として行政に門戸をたたいて行く第一歩でした。副責任者の梅野氏、石田、西木、山口、井上他多数の支えてくれたお父さん方、又学校側も出雲先生、坂上先生多くの先生方に支えられ、私共は大きな衝撃を受けたにもかかわらず、心に安らぎを持てました。

なお、校長先生はじめ教頭さん、事務長さん又職員の方々には統括的な面で、県並びに市の方又対外的な情報等を速やかに対応をしていただき、大いに助けて貰いました。24 時間体制を速やかにとっていただき、尚北九州医療団のセンターとして受け入れをしてもらい、被災者の心にどれだけ安心感を与えてもらったことでしょう。又育友会会長池尻様、当初より炊き出し又創作活動、クリーン作戦等に最後迄力を出していただき感激で一杯でした。がんばろうや運南復興祭ありがとうございました。その中に生徒会、ボランティアの生徒達、女子大生のボランティア、各部活動の生徒諸君、大変な支援活動ありがとう。学校と被災者が一体感を得る。そして卒業式、無事体育館でできました。その喜びを忘れません。入学試験、新学期の始まりと、冬から春、そして夏が来ました。思い出します、朝酒飲んでのケンカ、犬猫の問題、総てを乗り越えてきました。今ここに幕を降ろす時が来ました。出逢いと別れを大切にし生涯の宝物にしよう。

提言

和田岬校区に、福祉推進協議会がございます。しかし、阪神淡路大震災に直面するや何の機能も果たし得ませんでした。もとより非常時には、機を見て、即動けるリーダーが不可欠なのですが、残念ながら、肝心のリーダー不在が、混乱に拍車をかける結果となったのです。まず、地域を如何にまとめるのか。平時には分からぬ問題点が、浮彫りになってきました。

私共の地域には、神社を中心に氏子会がございます。それは、「吉田中学校」、「和田岬小学校」、「兵庫工業高校」と近隣の中学を取り巻くように別れ東部、北部の北、北部の南、南部という具合に分立しています。それぞれの町に町会があり、自治会組織があります。今回の震災は、その自治会そのものの在り方を考え直す契機となったように思います。

現在の自治会は、1 年交代の持ち回り方式で、どう考えても、リーダーの育つ素地はありません。核を中心に 1 日も早くそれぞれの町会で見直し、確立し、育てて行くことが、今後の大きな課題ではないかと思うのです。

私共の自治会には 1 年持ち廻りと、会長を中心に相談役という大きな集団がございます。また、子供会を経て立派な社会人に成長した若人がたくさん手伝いをしてくれます。それは、大人の地位に気軽に入れるリズムを作ってあげることで、次世代のリーダーが育つ下地となるのかもしれません。今後、大切なことです。非常時、人はバラバラで動いては弱いものです。助け合い支え合う地域ぐるみの取り組みこそ「治に居て乱をわすれず」を実践することになりましょうか。

一方、行政に対しては、申しあげたいことが山ほどあります。敢えて、2、3 整理するならば、まず、地域社会維持課、

まちづくり推進課等が、調整だけの作業しかないという点です。モデル地区の紹介等に大いに広報等で宣伝し、各町内会の立て直しを計り、非常時には速やかに対応できる組織を確立しておかなくては、このたびの二の舞になりかねないと思います。震災発生時より、7月末日迄、まさに指令塔のない集団だった行政。派遣されてくる一般職の方々は、ほんとうに気の毒でした。民生局局長しっかりしなさいと大声をかけたい気分です。

区長にも申しあげます。立場はよく理解できます。いわば、区長は兵庫区の父親的存在です。然るに、避難所に足を運ばれたか。弱い立場の方々に勇気を与え、元気づける言葉の一片たりとも発せられたか。私は、その点が残念で仕方がないのです。上の立場の者が、それも、行政に携わる者が、住民の心を悟らずして何としましょうか。非常時にこそ人の心が見えるとか申します。よりよい地域づくりのため、以上の事を提言し、私も死ぬまで走り続けます。

謝辞

あの衝激的な大震災から早いもので一年目を迎えようとしております。私共を支えまた活力を与えていただきなおエネルギーを蓄えさせていただき感謝をいたして居ります。

この兵庫工業高等学校で避難生活。体も心も傷だらけになって…やっとたどりついた避難所です。

皆さん不安と寒さに耐え乍ら安度感を求めて参りました。私共、学校との対応に少し不安を持っておりましたが校長先生を中心に先生並びに職員の方が適格に素晴しい対応をしていいただき、被災者の心にも灯が見え始め、世話方の私達も少しの安らぎをもてるようになりました。

育友会を始め生徒会、学生諸君のボランティア、大学生のボランティア、O・Bの方々からの炊き出し、また全国からの救援活動を受け元気と明るさを取り戻してきましたが、寒さの中、病に倒れ不安の毎日のなかで心と病気を立ち直らせていただいたのが、医療機関（北九州医療団）に恵まれ、被災者に満身創痍の心体を暖かく治療をつづけていただきました。これも学校側のご理解が素晴しいの一言です。思い浮かべるだけで涙が頬をつたわります。

長い道でしたが夫々の置かれた立場もございます為、学校関係者の皆様方には大変ご迷惑をかけ、何一つ恩返しも出来ず心残りですがお許し下さい。

被災者を代表しまして御礼の言葉にさせていただきます。

運南地区「復興祭」

4　震災を考える

生徒への震災の影響調査

担任団

6ヶ月目の7月 17 日、全校生徒 1,118 名を対象にした震災に関する様々な項目のアンケートを実施した。被害状況は既に調査済みなので震災当日の行動、学校が再開されるまでの様子、ボランティア活動の有無、身体の調子等で記述式と択一式とがあったが、不真面目な回答はなく非常に信頼性の高い調査結果である。

1　地震当日生徒はどうしていたか？

『地震と同時に飛び起きた。父が出張で九州に行っていたので母と、妹と弟と一緒に外に出た。自分の家の周辺はあまり被害はなさそうだった（暗くてよく見えなかった）。しかし、父方の祖父母が火事のひどかった鷹取の方だったので、母に家の事は任せて祖父母の家に急いだ。途中の山陽電車の踏み切りから南は地獄のようだった。家は崩れ、火の手がすごい勢いで広がっていた。祖父母の家も完全に火に包まれていたのであきらめかけたその時、近くに毛布を身体にまいた祖父母が立っていた。祖父母を家に連れて行き、見事にめちゃめちゃになった家の片付けをした。』

これは一例ですがほとんどの生徒が自転車で親戚や友人の安否確認に行ったとか、パンやジュースそれに電池などを買いに走ったなどが多かった。また、近所で壊れた家の下敷きになっている人を助けたとか、淡路島の生徒は津波が来るというので車で逃げる準備をしていた等それぞれがさまざまな体験をした。

2　学校が再開されるまでどう過ごしていたか？

最初の１週間は『ひたすら水汲みをしていた、それに食料の買い出し、あるいは近くの小学校で炊き出しの手伝いや救援物資の仕分けをしていた』が多かった。

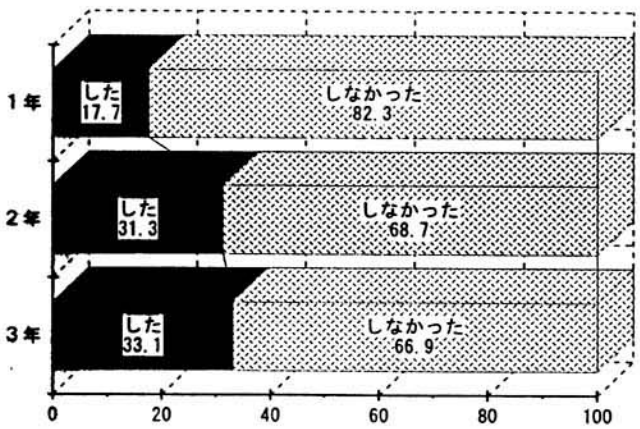
２週間目からは『屋根のシート張りを手伝ったとか、震災後初めてお風呂に入った』とかがあった。なかには『埋もれている人を掘り出す作業を手伝っていたら小学生が埋もれていて、一生懸命掘り出したが既に亡くなっていてショックを受けた』というのもあった。

３週間目はさすがに『早く学校に行き、友達に逢いたいと

思った。退屈だったのでテレビゲームをしていた』といったものや、特に現１年生は高校受験を目前に控えていたので『勉強をしていた』というのも多かった。

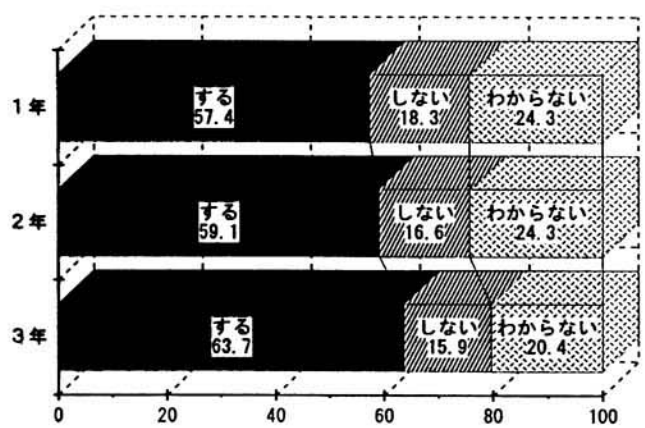
３　ボランティア活動の意識調査

あなたは今回の震災で奉仕作業をしましたか？



奉仕作業の内容としては、「避難所での炊き出し、救援物資の仕分け･運搬、掃除、子供の相手」などで、しなかった理由は、自分の家の水汲みや片付けに追われていたためにできなかったという回答が多かった。地震直後の極限状況においては、何もしなかった生徒は一人もいなかった。それどころか「生き埋めの人の救助やお年寄を避難させる」など中･高生が一番活躍したと思う。

今回の震災では多くの人が奉仕作業をしましたが、今後機会があれば参加しますか？

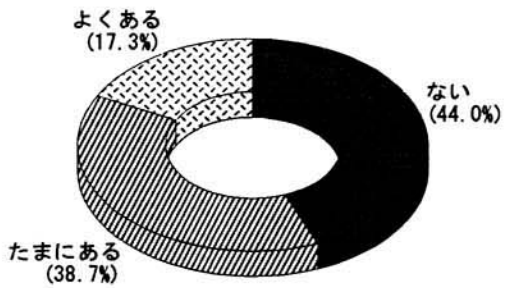


奉仕作業をすると回答した生徒は、「今回助けてもらったから」で、しない理由は「今回活動に参加したが被災者が何もしないから」といったものもあった。また、わからないと答えた生徒は「その時にならないとわからない」、あるいは「今回、自分の家族のことで精一杯だったから奉仕活動をする余裕がないと思う」というのがほとんどであった。

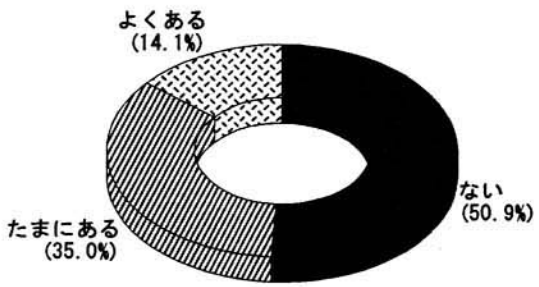
４　現在の体調について

震災以前と比べて体調で特に感じることは？（全校生対象）

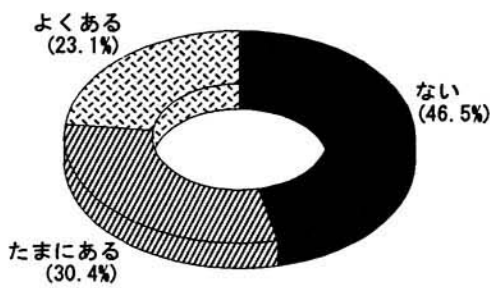
（１）何もする気が起こらないことがあるか



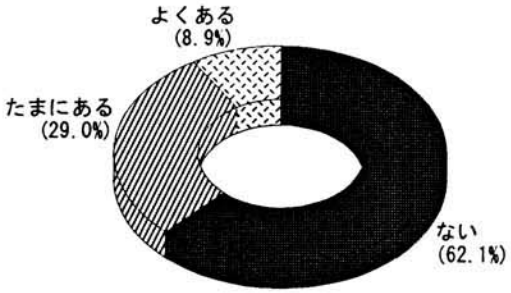
（２）遊びや勉強に集中できないことがあるか



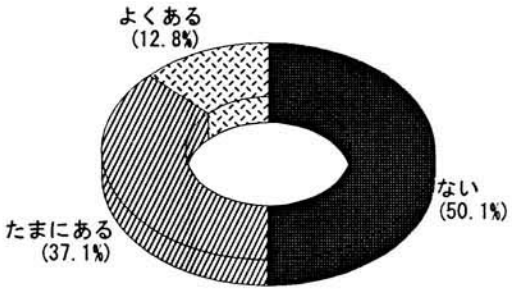
（３）小さな音や震動に敏感になったと感じることがあるか



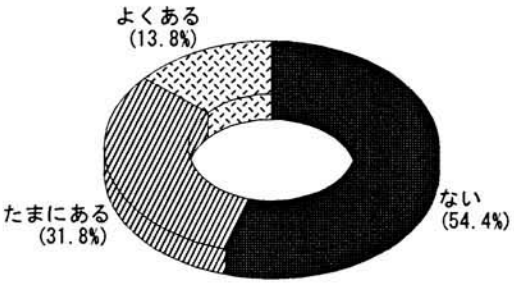
（4）全身の疲労を感じることがあるか



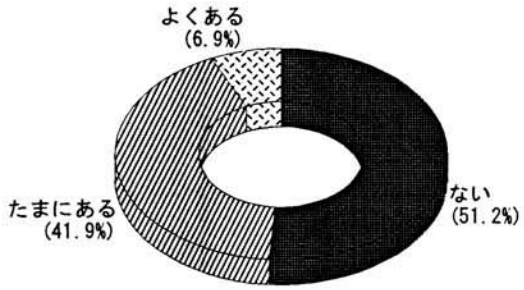
（5）いらいらしたり、腹立たしかったりすることがあるか



（6）ストレスがたまっていると感じることがあるか

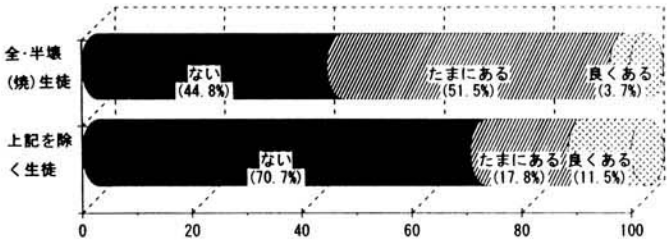


（7）地震の時の様子を思い出すことがあるか

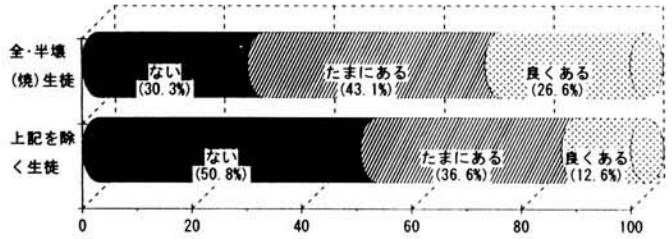


被災［全・半壊（焼）］生徒とそれ以外の生徒との比較

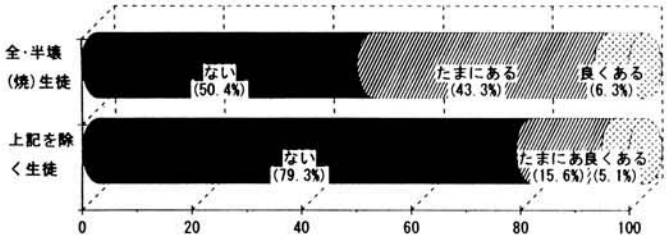
（1）全身の疲労を感じることがあるか



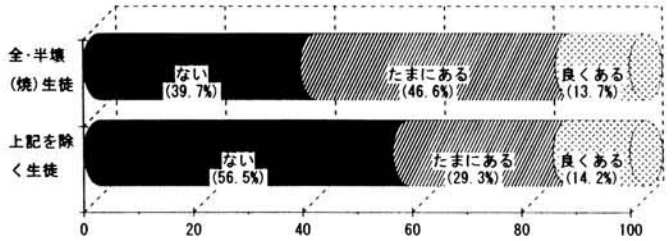
（2）何もする気が起こらないことがあるか



（3）頭痛や腹痛、それにめまいを感じることがあるか

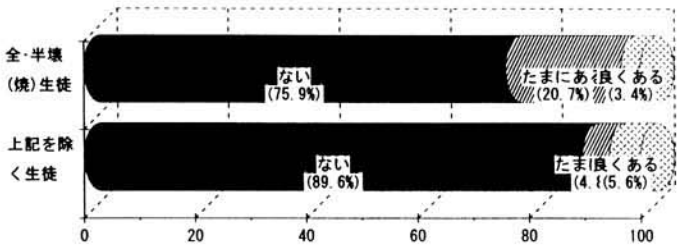


（4）遊びや勉強に集中できないことがあるか

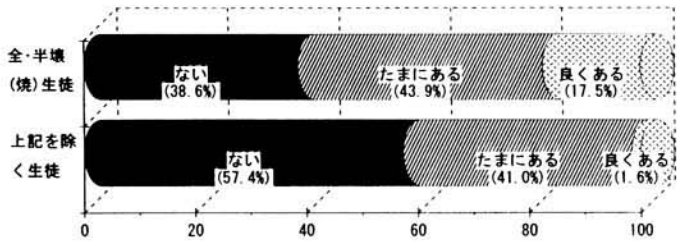


本校生徒の中でも、被災生徒が震災による影響を特に受けている様子がアンケート結果にもよく現れている。また、本年度の入学生は、例えばクラブ活動入部率が極端に低い、意欲に欠ける、問題行動が多いといった指摘を受けるが、彼らは受験勉強の真っ只中で被災した。そして現に今もその傷を抱えている。そのことが彼らの日常の発言や行動に大きく影響していることは理の当然であろう。11 月末現在、まだ 21 名の生徒が仮設住宅および待機所暮らしをしている。

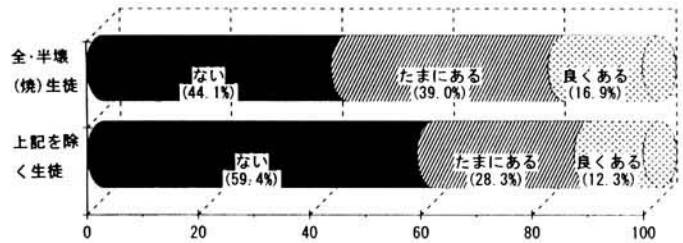
（1）地震の夢を見ることがあるか



（2）地震の時の様子を思い出すことがあるか



（3）ストレスがたまっていると感じることがあるか



※アンケート回答総数 1,105 名、うち全･半壊（焼）生徒数 366 名（現 1､2､3 年生）

ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）

死や負傷の危機に直面して恐怖や無力感を感じた時に体験するのが心的外傷後ストレス。症状として『再体験』（災害の光景が忘れられないフラッシュバック現象）『回避』（何事にも無関心を装うなど災害とのかかわりを否定する試み）『過緊張』（眠れないなど過度の緊張）の三つが一定の強さで一ヶ月以上継続した場合に、ＰＴＳＤと診断される。

（平成７年７月４日付「読売新聞」）

阪神・淡路大震災に関わる実態調査および体調についての調査

[redacted]科 2年 組[redacted]番 氏名 [redacted]

各設問について該当する項目を○で囲んで下さい。また、記述式および（ ）内はご面倒ですがお書き下さい。

1．あなたは今回の震災時にどこにいましたか。
自宅 ・ 知人宅 ・ その他（ ）

2．自宅の被害状況はどうでしたか。
全壊 ・ 全焼 ・ 半壊 ・ 半焼 ・ 一部損壊 ・ 異常なし ・ その他（ ）

3．あなたの家族で今回の震災で亡くなられた方はおられますか？
いる ・ いない

4．あなたの知り合い（親戚・友達等）で今回の震災で亡くなられたか、負傷された方はおられますか？ 亡くなられた方がいる ・ 負傷された方がいる ・ いない

5．あなたは震災によって負傷されましたか？ 負傷した ・ 大丈夫だった

6．5で負傷したと答えられた方はけがの程度をお書き下さい。（ ）

7．あなたは震災直後どこで生活していましたか？
自宅 ・ 親戚の家 ・ 知人（友人）の家 ・ 避難所 ・ その他（ ）

8．7で"自宅以外に避難していた方"にお聞きします、何日位避難されていましたか？
1週間未満 ・ 1週間～2週間 ・ 2週間～1ヵ月 ・ 1ヵ月～2ヵ月 ・ 2ヵ月以上

9．あなたの現在の住まいはどこですか？
震災時の自宅 ・ 親戚の家 ・ 知人（友人）の家 ・ 避難所 ・ 仮設住宅
震災後転居した家 ・ その他（ ）

10．あなたは地震当日（1／17）どうしていましたか？
（例）近所で埋もれている人を助けた後、親戚の安否を確認に自転車で行った等できるだけ具体的に書いて下さい。
[illegible]

11．あなたは震災以後、学校が再開されるまでどう過ごしていましたか？
（例）水汲みや家の片付けをしていた。弟や妹の面倒をみていた。買い出しや物資の調達をしていた。被害がなかったので何もすることがなく暇だった等できるだけ具体的に書いて下さい。
[illegible]

12．あなたは今回の震災にからんで何か奉仕作業（ボランティア活動）をしましたか？
した ・ しなかった

13．12で"した"と答えられた人にお聞きします、それはどこでしましたか？
自宅で ・ 親戚、知人宅で ・ 避難先で ・ 本校で ・ その他（[illegible]）

14．12で"した"と答えられた人にお聞きします、それはどんな内容ですか？
[illegible]

15．12で"した"と答えられた人にお聞きします、それは何日位ですか？（ 7 ）日位

16．今回の震災では多くの人が奉仕作業（ボランティア活動）をしましたが、今後このような機会があればあなたは参加しますか？
参加する ・ 参加しない ・ その他（ ）

17．16で"参加しない"と答えられた人にお聞きします、その理由を書いて下さい。

18．各項目で震災以前と比べて該当するものに○印を付けて下さい。
・全身の疲労を感じることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・体重が（減った ・ 変わらない ・ 増えた）
・よく眠れなかったり、寝ていても目がさめることが（ない・たまにある・よくある）
・下痢や便秘を繰り返すことが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・何もする気が起こらないことが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・頭痛や腹痛それにめまいを感じることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・遊びや勉強に集中できないことが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・風邪をひくことが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・小さな音や振動に敏感になったと感じることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・地震のことを思い出したり話しするのが（いや・少しいや・別にいやと思わない）
・対人関係がめんどうと感じることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・いらいらしたり、腹立たしかったりすることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・食欲がなく食事が食べられないことが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・地震の夢をみることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・じんましんがでたり身体がかゆくなることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・保健室に（休み時間に行くことがある ・ 授業中に行くことがある ・ 行かない）
・地震のときのようすを思い出すことが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・ストレスがたまっていると感じることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・何か不安に感じることが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・目やのどが痛いことが（ない ・ たまにある ・ よくある）
・せきが出やすくなったと感じることが（ない ・ たまにある ・ よくある）

19．今回の震災でで体験したこと、学んだこと、あるいは失ったもの等を書いて下さい。
[illegible]

ご協力ありがとうございました。

震災に関する生徒実態調査アンケート

考察 震災と地盤

油浅　保雄　（建築科）

1　地盤の良し悪し

阪神大震災において、当初は活断層上の地域が危険であると言われていた。しかし、淡路島で畑を横切って丘陵地の地表面に現れた野島断層のすぐ脇の民家がほとんど被害を受けずに建っていたことも事実である。結局、従来の定説通り、地表面の揺れの大きさに影響を与える要因は、断層からの距離よりも地盤の成層であると結論づけられている。

1月17日、午前５時46分に淡路島の北端付近に発生したM（マグニチュード）7.2の兵庫県南部地震は、1949年震度７の震度階が設けられて以来初めてのもので、神戸では三宮地区が震度７と判定された。兵庫南部の地震史としてはM７以上は868年播磨に生じた地震以来である。また、今回の地震と同じ場所では1916年11月26日に明石海峡付近にM6.1の地震が発生している。

地層をみる場合、大きく分けて沖積層（一万年前までに堆積した軟弱な砂や粘土層）と、さらにその下の洪積層（一万年から200万年前までに堆積した、よく締まった砂礫層や硬い粘土層を含む強固な地層）に分けられる。前者は軟弱で特別の考慮を必要とし、後者は信頼できる地層であるといわれている。

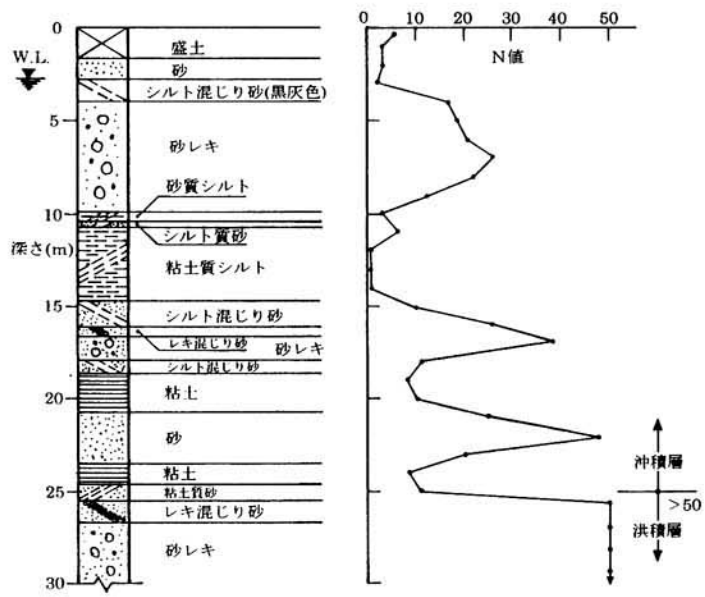
そこで地盤の情報を知るには、役所で自分の敷地周辺の地盤調査記録を見せてもらうのが手っ取り早い。しかしより詳しい情報を知りたい場合、周辺の建物でボーリング調査記録があればより確実である。ボーリング調査は、一般には標準貫入試験のN値により推定される。

標準貫入試験：決められた重さのハンマ（63.5ｋｇｆ）を決められた高さ（75ｃｍ）から自由落下させ棒の先端に取り付けた貫入きり（サンプラ管：外径51ｍｍ内径35ｍｍ）が地中に30cm貫入するのに要する打撃数（N値：Numberの頭文字）とサンプラー内の土質試料によって地盤や土質の硬度・密度を調べる。

一般には、N値30以上の地層に支持された建物であれば強いといわれているが、N値50以上（洪積層）であれば、ほぼ安心できる地層である。

そこで、本校のボーリング調査の記録を見ると、地表面より約17m・22m付近でN値40程度の密な地層が確認されるが、N値50以上（安心できる地層）となると26m以上の深さになる。本校では１本の柱の下に直径50ｃｍ、長さ25m（上杭11m＋下杭14m）のＰＨＣ杭（高強度プレストレストコンクリート杭）を３～４本ずつ組み合わされてＧＬ（Ground line：地盤線）より26.8mまで打ち込んでいる。校舎の周辺で液状化に伴う地盤の圧密沈下がおきているが、洪積層までの杭（支持杭）が到達しているため、建物の不同沈下等が起こらなかったものと思われる。

なお、打たれた杭一本当たりの支持力は55ｔあり、N値50以上の地層の地耐力は一般に60ｔｆ／平方メートルあると言われている。



兵庫工業高校ボーリング調査（土質柱状図）

2　液状化と圧密沈下

液状化とは、1964年の新潟地震で、緩い砂盤上の建物などに大被害をもたらした現象として広く知られた言葉である。地下水位下にある砂質土層（緩い砂地盤）で生じ、砂が液状のようになって、粒子同士の噛み合わせを失う。その後、10～30分程の間に地震により揺さぶられた緩い砂地盤は、密な状態（圧密沈下による）に変化し、地盤沈下を起こすと思われる。いずれにせよ、地下水が大きな役割を果たすと考えられる。

液状化のメカニズムとしては、水がからむことにより、本来、砂は比重が2.7程あるにもかかわらず、ほとんど沈むことなく、上向きの水流によって、砂の表面に作用する引き上

げ力と浮力によって、浮遊状態を保つことになる。この状態の砂は、自身の重さをも失い、抵抗もなくなる。自然の砂地盤でも、何らかの外力（震度５以上の地震の振動により水圧が増大）のため、砂の隙間中を水が移動して、このような液体に近い状態が生じることがある。

地層の中でも細砂や粗いシルト(砂に似た球形に近い形で粘土ほどには粘りがない土)のときに液状化は起きやすく、地表面から15～20mまでの深さ以内に、このような砂質土層があれば、液状化する可能性があると考えられる。その他、純粋な砂層で粒子が均一な中粒砂からなるもの、地下水位以下にあって水が飽和しているもの、締まりがゆるくN値 15未満の危険範囲にあるものが要注意といわれる。

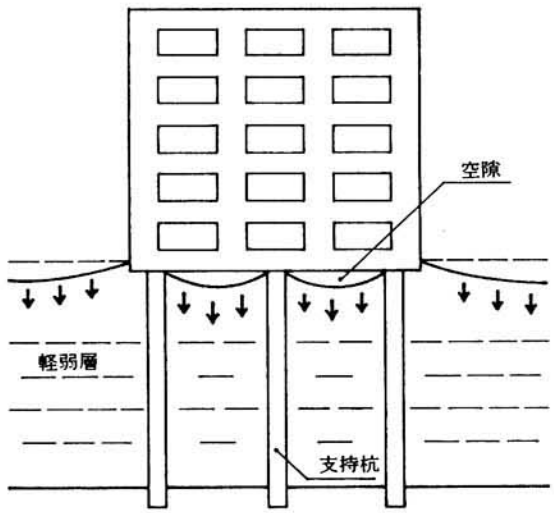
さて本校敷地内の液状化は、校舎の周辺いたるところで見られ、１階土間コン部分には亀裂が生じ、駐車場アスファルトが盛り上がるなど、波打ち現象となって現れている。また、中庭や校庭等、あらゆるところに地割れの痕跡が残っており、異質の砂がそのまわりに見られる。また、砂が円形状になっているものもあり、噴砂現象も認められる。

その原因として、Ｃ棟（中庭側）西側より２番目の柱脇のボーリング結果を調べると（標高0.03m）、非常に緩い盛り土がＧＬより1.9m、順次砂0.8m、シルト混じり砂1.2m、中位の砂礫6.0m…と堆積している。孔内水位（地下水位）は、ＧＬより-2.7mのところにあり、それより下層の砂等が、地震の振動により液状化し、水圧が増大して、噴水・噴砂したものと考えられる。

なお、前記したシルト混じり砂は(この場所が、一時期、周辺のゴミ捨て場であったため)ヘドロがあり、黒灰色をしていたとのことから、地震当初、地中のヘドロが噴出した。

o 地盤下の状況

本校の地盤は、標高０m付近に位置しており、液状化後の圧密沈下がかなり進んでいる。場所によっては41cmの地盤沈下が見られる。そのため、埋立地等では、沈下している地盤が杭をつかみ、杭と一緒に引き込もうとするために（この力は沈下地盤の層厚が大きいほど大）、建物だけを支えるはずの杭が、周りの土まで支えねばならなくなり、杭の負担が増す。支えきれない場合は、杭の破壊も考えられるため、注意が必要である。また、残留沈下が続き、杭と基礎スラブ間に、大きな隙間を生じると、杭の水平支持力や耐久性が問題にもなるため、その空隙部分に土を入れる投入口が設けられ



圧密によって建物下に空隙が生じる

るなどの工夫もなされている。本校では、そこまでの必要性を考えていない。

ただ、梅雨や、台風の時期になると、地割れ部分より、建物下の空隙へ雨水が流れ込み、水のドリルにより水の道ができ、さらに大きな空隙が生じるおそれもあり、注意が必要である。本校の場合、Ｄ棟北側の亀裂へ、中庭の雨水が、かなりの勢いで浸入しているという目撃者もおられ、地盤改良ができれば理想である。

地盤改良の方法：地盤の締め固め、脱水による水位低下、セメントミルク注入などによる地盤強化、良質土による置換などがある。

o 中庭の亀裂

本校中庭、グランド等の亀裂が、五助橋活断層であると、以前に新聞紙上で公表された。そこで、私論になるが、液状化現象によるものではないかとも考えられないだろうか。

その要因としては、

・中庭の亀裂は割目の南側が高く、グランドの亀裂では割目北側が高いこと。すなわち、活断層が、この短い距離の間で、逆転するものとは考えにくいこと。

・亀裂付近でも、液状化現象が見られ、グランドの亀裂においては砂が噴砂したような現象が確認できること。

・逆断層（正断層は火山地帯などを除くとまれで、逆断層と横ずれ断層が普通とされている）であるとすると、その特徴である地盤の跳ね上がりが確認できないこと等が考えられる。

では、なぜこの様な現象が生じたのかということについて推論すると、

・この地が川中小学校の跡地で、中州であったことから東西方向に地層が形成され、その地層の方向に沿って亀裂が生じたものと考えられる。

・戦後の高度成長期に合わせて、昭和 20 年代後半より、建設に利用するための砂利（角の取れたもの）の採取が中庭付近でなされたことにより、中庭の亀裂は、緩い北側の地盤がより沈み、グランドにおいては、地盤下 60cm 程に埋設された水はけ用の配水管がネットの働きをし、亀裂の北側の地盤を支えたため、亀裂の南側の地盤が沈んだものと考えられる。また、亀裂の両側もネットによる粘りから、無数の亀裂の枝が生じている。

以上の理由により液状化による亀裂ではないかとも考えられるが、断言するまでに至ってない。

先日、12 月 16 日付朝日新聞朝刊にて神戸大学理学部の宮田隆夫教授らの調査研究が発表された。それによると和田岬断層の合流する他の陸側の断層が働いた可能性も高いとのことである。和田岬断層は南北に走る断層のようであるが、地理的にも、本校のグランド上を通過していたとしても、なんら不思議はない。（ただし、本校の亀裂は東西に走っている。）

また、改めて見ると、中庭の敷石等にもずれが生じており、亀裂の北側が、５～７ cm 程西側に移動した形跡からして、横ずれ断層ではないかと考えられる。さらに、建物の下を直線状に通過した亀裂が、D棟・C棟の地盤下のケーブル用ピット（幅３ m・深さ 1.1m）の壁(厚さ 30cm)をも、膨らませて通過していることから、断層あるいは、断層の端部に当たるものではないかとも考えている。以下、詳細については今後の研究に期待したい。

参考文献：

・稲山正弘：建築知識, 住まいの耐震診断・補強マニュアル, 既存木造住宅地震対策 P23, 建築知識刊, 1995 年緊急増刊５号

・尾崎　修：ボーリング図を読む P23, 理工図書, 1994 年

・平井利一：ボーリング図を読む P151～152, P158, 理工図書, 1994 年

・三谷　哲：ボーリング図を読む P199, 理工図書, 1994 年

・建設省建築研究所：兵庫県南部地震の震害調査報告 P199, 建築技術刊, 1995 年５月号

・朝日新聞 1995 年 12 月 16 日朝刊（13 版）

地盤の被害状況　　土木科

1月 20 日に被害調査として建物の傾きについて土木科の職員で測定を実施。トータルステーションにて全ての建物に対し外部から測定する。その結果Ｉ棟（鉄筋コンクリート４階建）東側が各階の平均で 87mm 地盤沈下していることが判明するが柱の傾きは 20mm 以下であった。さらに、Ｉ棟校舎内部における各階の廊下の両端を測定するが最大で 45mm の落差であった。その後、２月２、３日の両日にグラウンドと中庭の地割れに５ｍピッチで杭を打ちグラウンド側Ｃ１～Ｃ 14、Ｂ１～Ｂ 14 と中庭側Ａ１～Ａ 11 の段差、深さ、方向の測定および現況写真を撮影する。また、中庭の石だたみが南東方向に 60mm、北東方向に 80mm 移動しており、西南西から東北東にかけて力が働いたと考えられる。

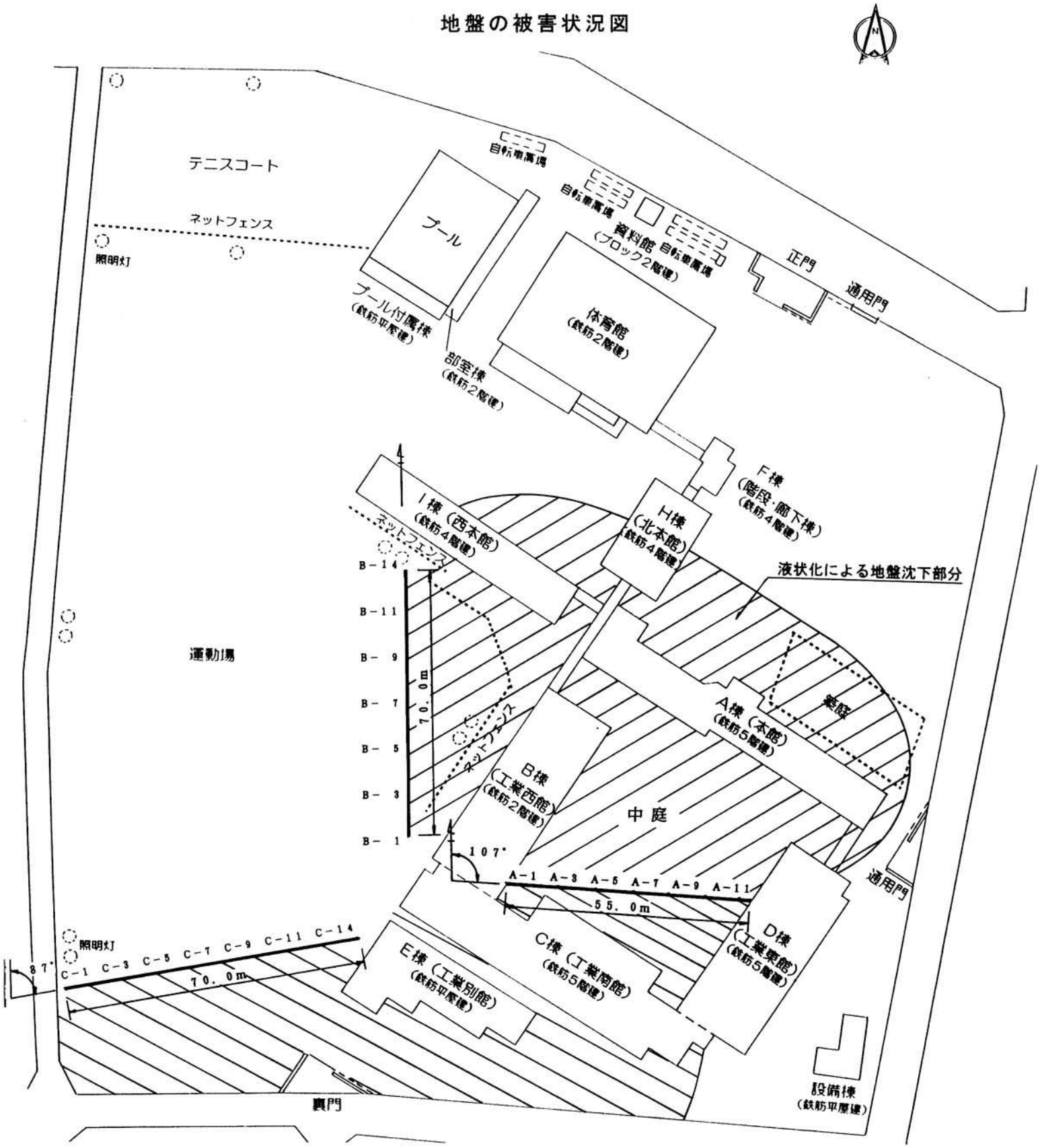
Ｂ１からＢ 14 方向の地割れ

３０ｃｍ以上の地割れによる段差（Ｂ 11）

Ａ 11 からＡ１方向の地割れ

石のブロックが南東方向に 60 mm移動

地盤の被害状況図



測点	A−1	A−2	A−3	A−4	A−5	A−6	A−7	A−8	A−9	A−10	A−11			
段差	0	0	0	0	306	215	147	29	62	89	125			
測点	B−1	B−2	B−3	B−4	B−5	B−6	B−7	B−8	B−9	B−10	B−11	B−12	B−13	B−14
段差	199	248	281	236	198	203	241	235	303	336	276	244	147	0
測点	C−1	C−2	C−3	C−4	C−5	C−6	C−7	C−8	C−9	C−10	C−11	C−12	C−13	C−14
段差	0	55	180	145	273	315	349	359	306	222	267	363	175	0

(単位mm)

あとがきにかえて

全国どこにでもある普通の学校が、予想もしなかった大震災に遭遇し、どのような事態におちいり、教職員生徒はどのような体験をしたのかを、振り返ってみた。私たちが、学校再開に向けて行動したことをこれから防災教育を考える上での資料に役立てられないか、そのような視点で震災の記録をまとめた。この記録をまとめるにあたり次の点について留意した。

・平成7年1月17日に何が起こったか。

・その規模・内容がどのようなものだったか。

・そのことに対して、学校としてどのように取り組んできたのか。

・その結果、どうであったか。

資料を集める過程で、建造物の写真はあるものの、炊き出し風景など被災された人の入った写真はなく、自治会の方にお借りした。私たちには被災された人を被写体にすることができなかった。また、各教師とも最初に学校にきて携わった日のことは鮮明に記憶しているが、その後は時間の感覚がなく、細かい部分はあいまいになっていた。編集会議で話し合い教職員の協力を得る中で、何をまとめたいのか、何が必要なのかが、徐々に見えてきた。

それぞれの立場で、学校再開に向けて走り続け、震災発生から84日経過した4月10日に、始業式を迎えたのである。

表面的には、街は以前の活気を取り戻し、順調に復興への時を刻んでいるかのように見える。しかし、今回の震災は、不況に加え神戸の地場産業に大きな打撃を与え、経済的にもより弱い立場の方に厳しい状態が、今なお、続いている。

やはり、この記録をまとめるのは、一年という時間が必要であった。この記録集を、本校の新たな教育の営みの出発点としていきたい。

震災記録委員会

災害時に学校はどうあるべきか
阪神淡路大震災８４日

発行
兵庫県立兵庫工業高等学校
神戸市兵庫区和田宮通２丁目１－６３
電話　(078)671-1431（代表）
ＦＡＸ　(078)671-1435

印刷
水山産業株式会社
神戸市長田区二番町３丁目４－１
電話　(078)577-3757（代表）
ＦＡＸ　(078)576-3165

本文中の写真は、本校教諭山内氏、大橋写真館鷲尾氏、元自治会長森永氏の提供によるものです。
また、記事・図版の一部を株式会社神戸新聞社のご了解を得て掲載しました。　震災記録委員会

写真・4/16 復興祭にて

記録・編集　兵庫県立兵庫工業高等学校 震災記録委員会
1996. 1. 17 発行